

山梨県笛吹市

境川町 仲原遺跡

八代町 東小山 B,C 遺跡

春日居町 上町田遺跡

一宮町 山道添・物見塚遺跡

御坂町 上坊地遺跡

2011

笛吹市

山梨県峡東農務事務所

笛吹市教育委員会

# 序

本書は笛吹市内で実施された仲原遺跡、東小山B遺跡、東小山C遺跡、上町田遺跡、山道添遺跡、物見塚遺跡、上坊地遺跡の調査報告書です。これらの遺跡は市内の境川町、八代町、春日居町、一宮町、御坂町に分布し、現地調査は平成17年度から19年度にわたって行われました。

仲原遺跡では縄文時代前期・中期の集落が明らかになり、甲府盆地南東縁の丘陵裾部に展開する典型的な縄文時代前・中期の集落に関する資料を追加することができました。他の諸遺跡では小規模な発見に留まったものの、意外な場所にも人為の痕跡があることを気付かせてくれます。

御坂山地北西斜面の丘陵や扇状地には旧石器時代から近世（江戸時代）にかけての遺跡が多く点在しています。とくに縄文時代の遺跡は素晴らしく、八ヶ岳山麓と同様、優れた土器や土偶の発見が相次いでいます。全国的にも釈迦堂遺跡の名は知られていますが、同じ釈迦堂遺跡からの出土品、一の沢遺跡からの土器のセットは国の重要文化財に指定されているほどです。

ところで、今ある御坂山地の地形の基礎は25万年前にできあがったと言われています。造山運動で海の底から盛り上がった花崗閃緑岩の大きな塊が大小の断層で刻まれて谷を造り、幾多の中小河川が崩落した土砂による丘陵を削っています。今や日本有数の果樹地帯をなす笛吹市に住むわれわれの祖先たちは、変化に富んだこのような自然環境の中で、「よりよい暮らし」を求めて弛まず歩んできたこと、その歩みの痕跡が今もいきいきと息づいていることを折つけて感じます。

笛吹市内に様々な文化財が数多く残されていることは周知のことですが、普段は目にすることのない地中にも、貴重な歴史資料を蔵した文化財＝遺跡が数多くあります。笛吹市教育委員会では種々の開発で破壊される運命にある文化財を救い、資料を市民の方々による歴史研究に役立てられるよう調査を実施しています。本書がこれらの方々に興味に少しでも応えられることを希望します。

平成23年3月30日

笛吹市教育委員会  
教育長 山田武人

## 本書について

---

■本書は山梨県笛吹市内の下記5遺跡の発掘調査報告を合冊したものである。図番号、写真番号、遺物番号等は各冊のなかで1から順にふってあるが、ページは通し数字とした。

### 報告書目次

仲原遺跡	1
東小山 B,C 遺跡	71
上町田遺跡	85
山道添・物見塚遺跡	95
上坊地遺跡	105

# 目次

---

序

本書について

目次

図版目次・写真目次

仲原遺跡発掘調査報告書	1
1章 調査の経緯と概要	3
1節 調査の経緯	
2節 調査の概要	
2章 遺跡の位置と環境	6
1節 遺跡の位置	
2節 遺跡の環境	
3節 近隣の遺跡	
3章 遺構と遺物	11
1節 住居址と出土土器	
1号住居址	
2号住居址	
3号住居址	
4号住居址	
5号住居址	
6号住居址	
7号住居址	
8号住居址	
9・10号住居址	
11号住居址	
2節 溝址と出土土器	
3節 遺構外山土土器	
4節 石器	
4章 総括	59
1節 仲原遺跡の縄文集落	
2節 溝址	
東小山B,C遺跡発掘調査報告書	71
上町田遺跡発掘調査報告書	85
山道添・物見塚遺跡発掘調査報告書	95
上坊地遺跡発掘調査報告書	105

## 図版目次 (仲原遺跡のみ)

図 1	仲原遺跡位置と周辺の遺跡	7
図 2	調査区全体図 (遺構分布図)	9
図 3	1号住居址平面図	11
図 4	1号住居址出土土器	12
図 5	2号住居址平面図	16
図 6	2号住居址出土土器①	17
図 7	2号住居址出土土器②	18
図 8	2号住居址出土土器③	19
図 9	3号住居址平面図	19
図 10	3号住居址出土土器	19
図 11	4号住居址、炉址平面図	21
図 12	4号住居址出土土器	22
図 13	5号住居址、炉址平面図	23
図 14	5号住居址出土土器	24
図 15	6号住居址、炉址平面図	27
図 16	6号住居址出土土器①	27
図 17	6号住居址出土土器②	28
図 18	6号住居址出土土器③	29
図 19	7号住居址、炉址平面図	30
図 20	7号住居址出土土器①	32
図 21	7号住居址出土土器②	33
図 22	7号住居址出土土器③	34
図 23	7号住居址出土土器④	35
図 24	7号住居址出土土器⑤	36
図 25	8号住居址、炉址平面図	36
図 26	8号住居址出土土器①	37
図 27	8号住居址出土土器②	38
図 28	9・10号住居址平面図	40
図 29	11号住居址平面図	40
図 30	11号住居址出土土器	41
図 31	溝址平面図	43
図 32	溝址内陣遺構平面図	44
図 33	溝址出土土器	45
図 34	遺構外出土土器①	46
図 35	遺構外出土土器②	47
図 36	出土土器①	53
図 37	出土土器②	54
図 38	出土土器③	55
図 39	出土土器④	56
図 40	出土土器⑤	57
図 41	出土土器⑥	58
図 42	出土土器⑦	58

## 写真目次 (仲原遺跡のみ)

1号住居址	61
1号住居址遺物出土状況	61
2号住居址	61
2号住居址遺物出土状況	62
3号住居址	62
4号住居址	62
4号住居址遺物出土状況	63
5号住居址	63
5号住居址炉址	63
5号住居址炉址	64
5号住居址床下土坑	64
5号住居址炉址横遺物出土状況	64
6号住居址	65
6号住居址炉址	65
6号住居址遺物出土状況	65
7号住居址	66
7号住居址炉址	66
7号住居址遺物出土状況	66
8号住居址	66
8号住居址炉址	67
8号住居址遺物出土状況	67
9号住居址	67
10号住居址	67
11号住居址	68
溝址	68
溝址内側溝断面	68
溝址外側溝断面	68
4号住居址出土土器	69
6号住居址出土土器	70
7号住居址出土土器	70

山梨県笛吹市境川町

# 仲原遺跡発掘調査報告書

# 仲原遺跡発掘調査報告書

(平成 18 年度 笛吹市農道改良工事)

## 〔例言〕

- 1 本書は山梨県笛吹市境川町前岡田1286ほかに所在する埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は笛吹農道 579 号線（境川地内）工事に先立ち、笛吹市教育委員会が実施した。
- 3 現地発掘調査に要した期間は平成 18 年 3 月 1 日から同 3 月 31 日までである。
- 4 室内整理・報告書作成作業の期間は平成 20 年 4 月 1 日から同 22 年 12 月 28 日である。
- 5 本書の執筆・編集は小淵忠秋が行った。
- 6 本書に使用した土器実測図の一部は有限会社松風（代表早川紀子）に委託した。
- 7 本書に係る出土品・記録類は笛吹市教育委員会で保管している。
- 8 発掘調査および報告書作成にあたり、次にあげる機関と個人から御指導・御協力を得た。  
名を記して感謝申し上げたい（敬称略、順不同）。

山梨県教育委員会学術文化財課      山梨県埋蔵文化財センター      山梨県立考古博物館  
(財) 山梨文化財研究所      平野修

## 〔調査組織〕

- 1 調査主体 笛吹市教育委員会
- 2 調査担当 小淵忠秋
- 3 現地調査参加者

中込椿    藤原さつき    石倉弘子    大久保一吉    小林正輝    小野繁雄  
津田元栄    久保山明義    宮川菊江    土屋常子    奥村澄江    榎原千代子  
伊藤津真子    長田くみ子    橘田由利子    渡辺喜乃女

### 室内整理参加者

西山和子    高野眞寿美    斉木愛子    藤原さつき

# 1 章 調査の経緯と概要

## 1 節 調査の経緯

本調査は笛吹市が行った境川町における農道改良事業に先立って行われたものである。試掘調査（平成 17 年 10 月下旬～11 月初めにかけて実施）で遺構・遺物の出土した地域について平成 18 年 2 月～3 月に本格調査を実施した結果、縄文時代前期および中期の集落跡が明らかになった。

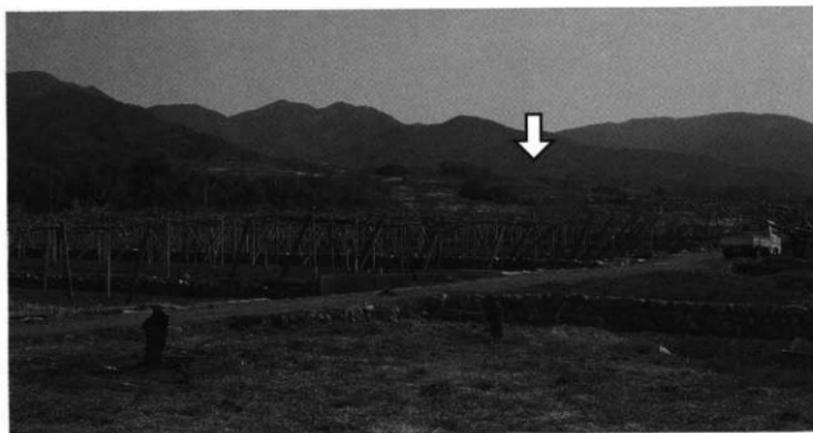
農道工事は一部既設農道を利用して拡幅し、それ以外は新たに畑地内を通して幅 7m の道路とするものである。「みやさか路」合流点を起点に北西へ台地を下り、そこからさらに西へ振れたあと再度北東へ約 90°折れて既設農道に連結するもので、総長 860m になる。

試掘では拡幅部に約 10m 間隔で 1 × 2m の試掘坑を 36 口設定し人力掘削した。部分新設となる畑地では道路幅の中に 2 × 2m の試掘坑をやや密に配置して遺構・遺物の確認に努めた。

「みやさか路」合流点付近では、1993 年度の「みやさか路」整備事業の際の調査で縄文時代中期の住居址が発見されているため、今回試掘坑を拡幅部いっばいに広げて遺構確認を行ったが、なんら遺構は確認できなかった。

合流点から中位平坦部を下る斜面上、長さ約 300m の道路部分に設けた試掘坑からも遺構は見えなかった。これに続く地点は畑の中に道路が新設される部分で、傾斜の緩い幅 50m ほどのテラスになっている。この平坦部では大小の角礫の詰まった二重の溝跡が発見された。

地形は平坦部北端から再度傾斜を強めて下っていく。道路は S 字を描きながらこの斜面を下降していくが、斜面変換点から水平距離で 15m までの斜面に縄文時代中期の竪穴住居址が密集して見つかった。さらにこの密集から約 8m 下からは縄文時代前期の竪穴住居址 2 軒が重複した状態で見つかった。竪穴住居址は調査区外にも延びていくことは確実で、特に中期の住居址は上記平坦部を取り囲むように半環状に存在している可能性がある。



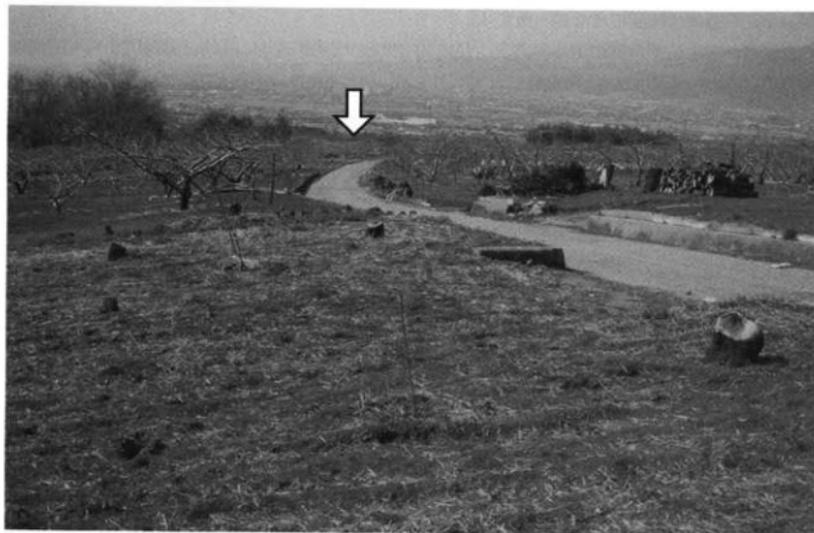
仲原遺跡風景

## 2 節 調査の概要

試掘において遺構が見つかったのは南西向き舌状台地の傾斜が一旦緩み、再度下降していく斜面の転換点上であり、標高約 400m の地点であった。この地点より上側の方は割りと平坦ではあるが、住居址は意図的にそこを避け傾斜地を選んで造られたように見える。

遺構の検出された試掘坑および土器包含層の認められた試掘坑をカバーするように発掘区を絞り、部分的にはパワーショベルで耕作土層を剥ぎ取ったあと、人力で精査しながら遺構プランの確認作業を行った。

本調査した区画は幅 10m、長さ約 50m、広さ約 500㎡の範囲で、最高所で標高約 430m、最低所で標高約 390m であった。標高 401m の比較的平坦な地点では硬質土器破片を伴う溝址が見つかった。溝は二重にめぐり、内側の溝幅は 100～125cm、深さ約 70cm で、逆三角形の断面をもつ。外側の溝幅は 75～210cm、深さ約 25cm で、底は平坦である。溝中の覆土は上位 1/3 に大小の花崗閃緑岩の角礫が充填されている。溝全体の様相は周回するのではないかと思わせる。



仲原遺跡近景

内側の溝のさらに内側は浅い皿状の落込みが検出されており、周溝墓の主体部を想起させるような形である。

溝址の外側の溝の西に接するように方形の落込み 2 箇所が見られ、規模・周辺からの土器片より判断すると縄文時代前期の住居址の可能性が高いと思われる（本文中では住居址として記載）。ただし覆土や床面上からの遺物はなく、内部施設も不明なため断定する確たる証拠はない。

先の1節で言及したように、調査区中央には縄文時代中期の住居址群が検出されている。プランは円形ないし略円形で、中期中葉の井戸尻式期から同後葉曾利IV式期に至るまでの期間に営まれた集落の一部を構成すると思われる。いずれも柱穴は明確でなく、壁下に周溝も見られなかった。ただし一軒に一炉がしっかり設えてあり、地床炉（3軒）と石囲炉（2軒）の2種が認められた。石囲炉は4個の石の長辺を方形に配置した端正なものであった。

調査区西端では2軒、調査区中央では1軒の縄文時代前期の住居址が見つかった。前者は長軸を等高線に合わせた楕円形のプランをもつ。うち1軒（1号住居址）は全貌を把握していないが、同様であろう。この地点の傾斜は調査区の中では一番きつく、2号住居址の東壁の高さ80cmに対し西壁の高さは20cmしかない。2号住居址のはっきりした炉址は1基であるが焼土溜りが2箇所見られた。また東側壁直下には周溝の一部らしき掘り込みがあり、それが南側ではかなり内側で廻りこんでしまっている。使用中で床面積を拡げた痕跡かもしれない。

1号住居址は北側の1/4くらいは2号住居址によって壊されていた。また南側半分は調査区域外にある。床面の高さは2号より70cm高い。屋内施設については検出できなかったが、上器の大きな破片が得られた。

1・2号住居址は、外壁に縄地文のみを付した前期前半の土器が遺物の主体を占めている。11号住居址は縄文前期後半の諸磯a、b、cの各形式の土器を含むようである。

縄文中期の住居址は5軒が調査区中央部に密集して確認された。中期中葉に属する1軒を除いた4軒はすべて中期中葉の上器を出土している。またうち3軒は一部を切り合っており、微妙な時期差が想定される。

さて、仲原遺跡の位置する本台地は火山灰起源の土壌が程良く発達して耕作に適しており、人為による耕耘が激しい。特に傾斜の強いところで軟柔なローム質褐色土が顕著で、縄文期の住居はそうした所を好んで営まれた印象を受ける。傾斜の少ない平坦面の土質は非常に硬く、今回の調査区内では明確な住居址は見つからなかった理由もそのあたりにあるかもしれない。また農道工事に伴う調査であったため調査区は狭いものとなり、集落跡の検出という観点からは難しい側面があったことも事実であるが、今後も農道の改良は行われていくものと思われ、そうした機会を利用した調査によって丹念に事実を拾っていくことが重要である。

## 2章 遺跡の位置と環境

### 1節 遺跡の位置

仲原遺跡は笛吹市境川町の東部前問田と大黒坂に跨る丘陵上に位置する。標高は高い所で(大黒坂)で海拔約444m、低い所(前問田)で約394mとなり、比高差が50mもある。

台地は南西側を浅川支流の狐川に、北東側を同じく浅川支流の竜安寺川に面され、幅400～450mで甲府盆地に向かって低くなる北西-東南に細長い丘陵地である。

今述べた浅川の2つの支流は方位:北北西-南南東の断層谷(第四紀更新世中頃:約50万年前の造山運動により生じた)に沿うものである。また現在も進行中とされる御坂山塊の隆起と甲府盆地の沈降により、台地斜面は甲府盆地に向かって高度を下げていく。またこの斜面自体も先述した断層線に直交する西南西-東北東の大小の断層崖により寸断されているため、部分的な急斜面として表れているところも見受けられる。

遺跡のある本台地には少なくとも2つの浅い埋没谷が見られ、その谷によって3本目のフォークのように尾根が3分されている。仲原遺跡はそのうち最も南西に寄った尾根の上に営まれている。ちなみに北東縁の尾根には境川町と八代町との町堺があり、この町堺を跨いで竜安寺川西遺跡(縄文時代、古墳時代)が立地している(『竜安寺川西遺跡』山梨県埋蔵文化財センター)。中央の尾根上には遺跡は確認されていない。

### 2節 遺跡の環境

本遺跡が立地する境川町の丘陵部は境川と狐川が扇状に押し出した花崗閃緑岩主体の崖堆積層で造られたものであり、その上を御岳火山や八ヶ岳に起源する火山灰層(ローム層)が被っている。遺跡はこのローム層中に存在し、遺構の確認は上に積もった表土層(耕作土層、森林土壌層など)を剥ぎ取って行う。1章で述べたが、今回の調査地点は丘陵の平坦面の終端部、つまり下降し始める付近にある。特に縄文時代前期・中期の住居址は平坦地には存在せず、下降する斜面地を選んで設営されていた。

平坦地・斜面地はチョコレート色ないし褐色のソフトロームが被っているが、前者は花崗閃緑岩の小礫をまばらに混入する非常に硬い層であり、仲原遺跡では標高402m前後の平坦地で観察できる。これに対し褐色の強い柔らかいソフトロームは斜面地で見られ、縄文時代の住居はこの褐色ソフトロームを選んで造られている印象を与える。

西へ約30mで狐川の流下する谷となる。水量は安定しており年間を通じて比較的豊富であるが、川の両側は非常に急で崩れやすく高い崖となっている。

遺跡の立地する台地は畑地で、高所からは甲府盆地が一望できる。南アルプス市、韮崎市、そして北の山梨市、甲州市まで望める。北西には鳳凰三山、その右側には八ヶ岳、茅ヶ岳など高峻な2,000m級の山々が望め、冬場はこれらの高山から吹き降ろす風が強烈である。また北の秩父山地の山々からの風も冷たく厳しい。しかし縄文時代には、丘陵地帯は恐らく落葉広葉樹に被われており、冬場の葉を落とした樹木でさえ、厳しい気候を緩和したに違いない。

台地の東南側は濃密な森林を伴う急峻な御坂山地の山体となり、縄文時代は豊富な動植物資源の供給地であったと考えられる。周囲の多様で生産性の高い環境を考えると、有用植物や



図1 仲原遺跡位置と周辺の遺跡

- ①仲原遺跡(★平成5年調査地点) ②一の沢遺跡 ③立石北遺跡 ④伝黒坂氏屋敷跡  
 ⑤中村遺跡 ⑥東西原遺跡 ⑦龍安寺川西遺跡 ⑧上ノ平B遺跡 ⑨上ノ平A遺跡  
 ⑩中丸東遺跡 ⑪中丸遺跡 ⑫西原遺跡 ⑬柳原遺跡 ⑭金山遺跡 ⑮立塚古墳(消滅)  
 ⑯石尊塚遺跡 ⑰御崎塚古墳 ⑱晴雲寺裏の古墳 ⑲東窪2号墳 ⑳山小山中村1号墳  
 ㉑小山中村2号墳 ㉒小山中村3号墳 ㉓荒神塚古墳 ㉔山の神塚1号墳  
 ㉕山の神塚2号墳 ㉖山の神塚3号墳 ㉗真福寺遺跡 ㉘京原遺跡

哺乳動物などの自然資源の利活用、初期の園耕栽培や幼獣飼育などが試みられていた可能性も否定できない。

### 3節 近隣の遺跡

仲原遺跡の立地する台地は「曾根丘陵」と称され、北西から南東に向かって距離約1,000mの間に高度を100m前後上昇する緩傾斜地である。標高では概略350mから450mとなる。北西の丘陵下には甲府盆地、南東端の急斜面が御坂山地を構成し、南西―北東に長い平坦面を崖面に見立て「ベンチ型地形」とも形容される。

境川地内の曾根丘陵上は特に縄文時代中期に集落形成が進み、人口の集中する地帯となったと考えられる。曾根丘陵は肥沃な土壌の上に森林が豊かに発達し、御坂山地や甲府盆地の動植物資源へのアクセスが容易で食糧を安定的に獲得できたと考えられ、自然立地が縄文中期の繁栄をもたらした要件の一つであったことは疑いない。

さらにこのベンチ型地形を鋭く開析し、幅は狭いが兩岸を崖のように切り取っている小河川は、豊かで清浄な冷水の供給源であり、集団生活の拠り所として機能したに違いない。曾根丘陵は当然ながら豊富な埋蔵文化財包蔵地として知られ、仲原遺跡の西を北西に流下する狐川を越えた台地には一の沢遺跡、その北西側に接して立石北遺跡がある。

1993年、仲原遺跡の南端寄りを通る農道の整備（県営事業）に伴う発掘調査で、縄文前期及び中期の住居址5軒、土坑7基が発見されている。

一の沢遺跡については縄文時代早期、前期、中期の遺物が数多く散乱していること、また狐川に沿って小円墳が散見されることが以前より知られていた。1982年より笛吹川沿岸の農業用管水路敷設事業、簡易水道配水施設設置、農道（みやさか路）建設などの公共事業、境川カントリークラブ取付け道路、民間住宅などの建設に伴って調査され、一の沢遺跡のもつ豊富な内容が明らかにされつつある。特に1983年に山梨県埋蔵文化財センターにより実施された第2次調査では、縄文前期後半（諸磯b・c式）の住居址1軒や土坑、縄文中期中葉（藤内式、井戸尻Ⅲ式）の住居址7軒と土坑、同中期後半（曾利Ⅰ式）の住居址1軒と土坑、縄文後期前葉（称名寺Ⅱ～堀之内Ⅰ式）の住居址1軒などが明らかにされた。特に井戸尻Ⅲ式期の4号住居址からは優れた土器セットが出土しており、平成11年6月に重要文化財に指定されている（土器25点、土製品44点、石製品107点の合計176点が指定）。

1991年、一の沢遺跡の範囲南端で境川村（当時）簡易水道東部中央配水池建設に伴い発掘調査が実施され、土坑2基が発見され、縄文中期中葉（新道式）の土器が出土した（境川村埋蔵文化財調査報告書第9輯『立石南遺跡Ⅱ』）。この地点の北西・北東隣接地が浄・配水施設建設予定地となり、2009年1～3月に1,500㎡の本調査が行われ、縄文中期後半を中心とする住居址12軒、縄文中期の土坑22基、古墳1基が明らかとなった（調査報告書準備中）。

1985年、境川町小黑坂地内に計画された境川カントリークラブの建設に先立ち、一の沢遺跡の南数百メートルに点在する寺平、亀の子A、机、砂原山の4遺跡（小黑坂南遺跡群）がカントリークラブ予定地内埋蔵文化財発掘調査会によって調査された。寺平遺跡では、縄文前期後半～前期末（諸磯b式～十三苜提式）の住居址5軒、同期の土坑11基などが発見された。亀の子A遺跡では縄文前期後半～同中期後半の上器集中地点が2箇所検出された。机遺跡では縄文中期末（曾利Ⅴ式）の住居址1軒が調査された。砂原山遺跡では縄文前期後半～同中

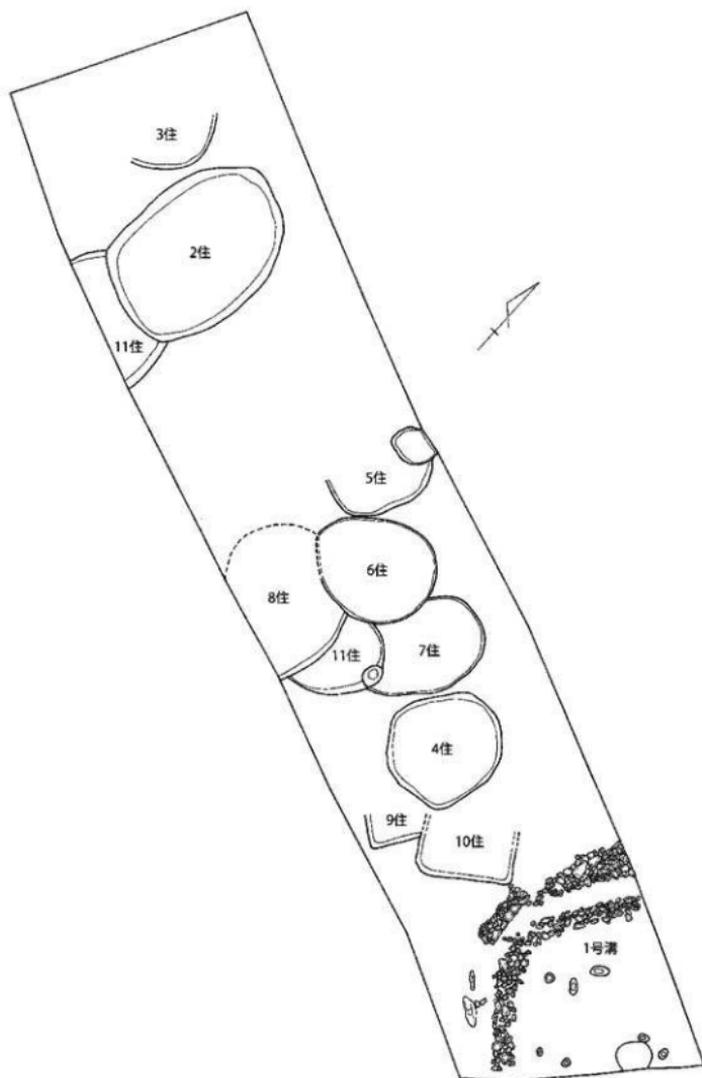


図2 調査区全体図 (遺構分布図 S=1:200)

期初頭の土器集中地点 1 箇所、平安時代の住居址 1 軒が発見された。

仲原遺跡の乗る台地の東縁を竜安寺川が北に流下している。この東縁部を北北西に下る狭い農道が境川町と八代町の境界であるが、この農道を跨いで竜安寺川西遺跡があり、2008 年、リニア実験線敷設に伴い県埋文センターが調査を実施して縄文前期住居址 1 軒、同中期住居址 3 軒、弥生後期住居址 1 軒、古墳などが見つかった。また竜安寺川源頭窪地には真福寺遺跡があり、縄文土器片が採集されている。

### 3章 遺構と遺物

#### 1節 住居址と出土土器

今回の調査では11軒の住居址が見つかり調査されたが、遺存の程度はまちまちであり、住居址中の覆土から出土した遺物の遺存についても良好なもの、貧弱なものなど各様であった。住居址に伴う土器は深鉢型がほとんどであったが、石器については打製・磨製石斧、石皿・磨石、石鎌・石匙など多様であった。出土数は当然ながら削平の激しい一部の遺構では概して貧弱であった。

住居址は、4章でも述べるが分布が偏っている。おおむね台地平坦部から下降する傾斜地にかけて意図的に選んで住居を構築しているようである。平成5(1993)年度に旧境川町教育委員会が実施した「みやさか路」地点では竪穴住居址5軒、土坑7基、溝跡4条が確認・調査されたが、いずれも台地中央部の斜面地に位置する。この地点も上位の平坦面に連続する下降傾斜面に占地するという点で、今回の調査地での住居址のあり方と共通している。

また今回調査した地点では、1～3号住居址と4～11号住居址の2つのグループに分かれ、グループ間には帯状の空閑地がある。斜面の変化は連続的で、畑作のため帯状部が削り取られた可能性は低いと思われる。

以下に住居址とそこから出土した土器について述べる。

#### 1号住居址(図3)

調査区北西側に位置する3軒のうちの1つである。北辺を2号住居址に切られており、南半分ほどは調査区外にある。平面形は楕円であろう。調査した範囲には炉址・柱穴など屋内施設は確認できなかった。壁高は東南側で67cm、北西側で5cmであった。

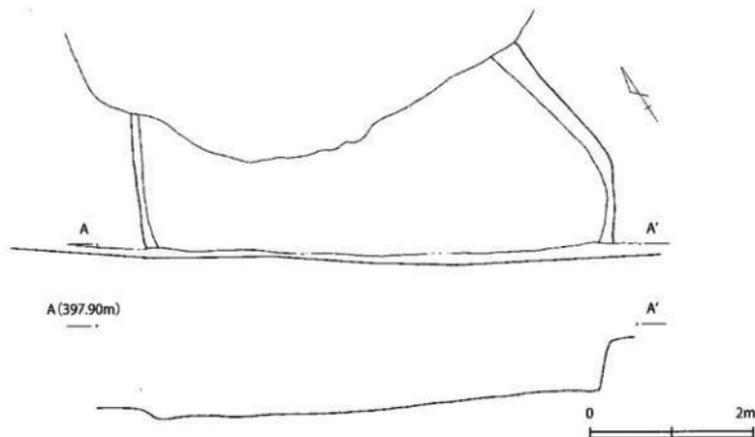


図3 1号住居址平面図(1/60)

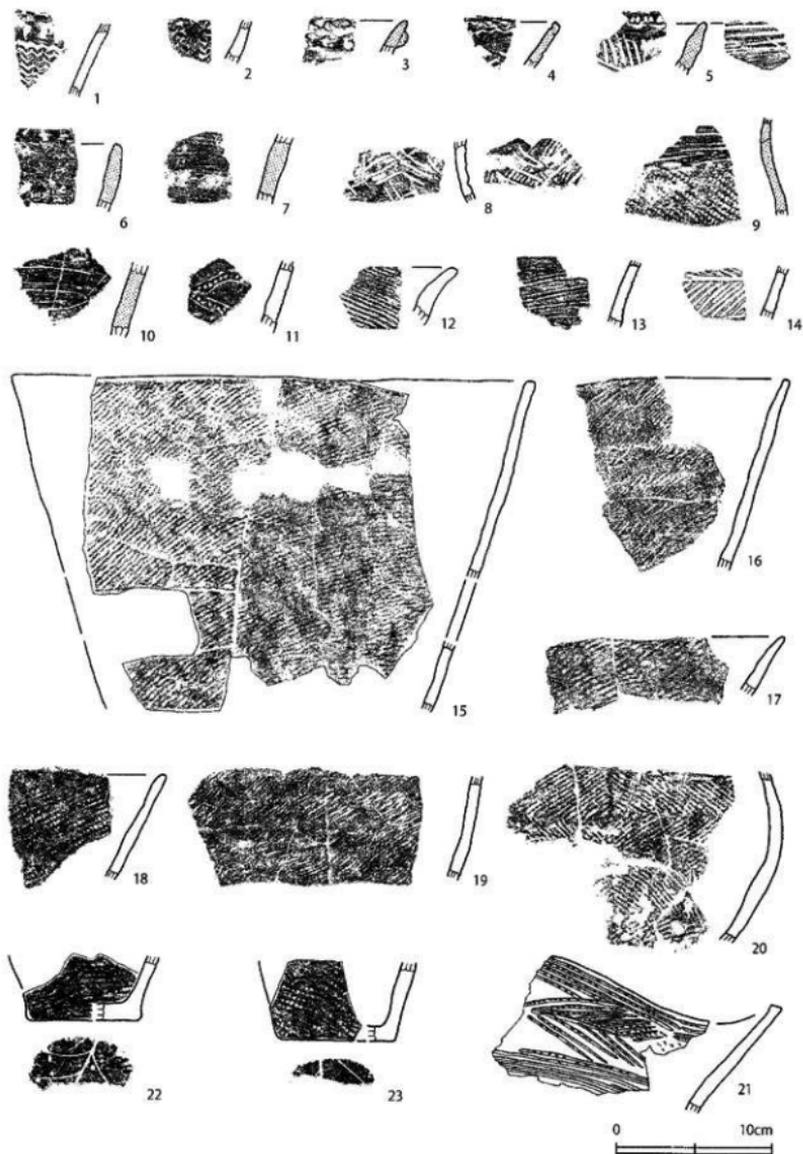


図4 1号住居址出土土器 (1/3)

## 出土土器 (図4)

本住居址の主体的な土器は15～20の地縄文を有するもので、直線的に開く深鉢であり、斜行する中太の縄文を密に施している。口は平縁で、底は平底ないし若干の上げ底となり、木葉痕がつく(22,23)。20は胴が丸く張り、縄文も羽状となる特殊なもの。なお本址の覆土中より押型文(1,2)、諸磯a式(9～11、21)など早期・前後葉の破片も発見されている。

表1 1号住居址出土土

図番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考
				外面	内面			
1 1	縄文土器	深鉢	胴	押形文		暗褐色	粗	
1 2	縄文土器	深鉢	胴	押形文		褐色	粗	
1 3	縄文土器	深鉢	口唇	豆状貼付		褐色	繊維、粗	
1 4	縄文土器	深鉢	口唇			暗褐色	繊維、粗	
1 5	縄文土器	深鉢	口唇	口唇連続刻み目、 口縁下沈線	口縁裏沈線	黄褐色	繊維、粗	
1 6	縄文土器	深鉢	口唇			暗褐色	繊維、粗	
1 7	縄文土器	深鉢	胴			黒褐色	繊維、粗	
1 8	縄文土器	深鉢	胴			赤褐色	粗	
1 9	縄文土器	深鉢	胴	上部:横位条線、下 部:縄文		黄褐色	繊維、粗	
1 10	縄文土器	深鉢	胴	沈線		赤褐色	繊維、粗	
1 11	縄文土器	深鉢	胴	沈線・刺突		褐色	粗	
1 12	縄文土器	深鉢	口唇	縄文		褐色	粗	
1 13	縄文土器	深鉢	胴	縄文		暗褐色	粗	
1 14	縄文土器	深鉢	胴	斜行縄文		暗褐色	粗	
1 15	縄文土器	深鉢	口唇～胴	縄文	縄文	褐色	粗	
1 16	縄文土器	深鉢	口唇～胴	縄文		暗褐色	粗	
1 17	縄文土器	深鉢	口唇	縄文		暗褐色	粗	
1 18	縄文土器	深鉢	口縁	縄文		暗褐色	粗	
1 19	縄文土器	深鉢	胴	縄文		褐色	粗	
1 20	縄文土器	深鉢	胴	羽状縄文		黄褐色	粗	
1 21	縄文土器	深鉢	口縁	沈線内刺突		暗褐色	粗	波状口縁
1 22	縄文土器	深鉢	底	縄文		褐色		
1 23	縄文土器	深鉢	底	縄文		褐色		

## 2号住居址（図5）

1号住居址の北側に位置する。1号と一部を重複させている。床は2号が1号より約70cm低い。平面形は楕円で長軸は南北となる。斜面にあるため南東側の壁は高く残り一番高いところで80cmを計る。北西側は5cm程度である。

焼土痕跡を残す場所が3箇所ほどあったが、炉址は住居址中心よりやや北寄りにある。掘り込みはごく浅く、皿状の窪みである。

南側の壁際に土留め施設の痕跡を思わせる浅い溝が認められる。また南側のプランが少し膨らんでいる。これは先の溝の配置と考え合わせ、住居が拡張されたためかもしれない。

柱穴は西半分にはほとんど配置されているが、これは「四つ立て」ではなく片流れ式の屋根。

## 出土土器（図6、7、8）

主体は1号住居址と同じく地縄文のみ施文した深鉢形土器である（11～24）。単節縄文を縦位ないしやや斜め（12,13）に施すもの、45度前後斜めに施すものがある。口縁が緩やかに外反するものが目立つ（13,16,21,22,26）。17,25は波状口縁で、25は無文である。

また1～3は山形の押形文、4～7は胎土に繊維を混入する。8は貝殻腹縁を口縁外部と胴括れ部に連続的に押し当てている。前期前半の東海系土器と思われる。30は分厚い上底となっている。

表2 2号住居址出土土器

図番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考
				外面	内面			
6 1	縄文土器	深鉢		押形文		赤褐色	密	
6 2	縄文土器	深鉢	口縁	押形文		褐色	密	
6 3	縄文土器	深鉢		押形文		黄褐色	粗	
6 4	縄文土器	深鉢				暗褐色	織維、粗	
6 5	縄文土器	深鉢	口縁			褐色	織維、粗	
6 6	縄文土器	深鉢				明褐色	織維、粗	波状口縁
6 7	縄文土器	深鉢		竹管押し爪形文		黄褐色	織維、粗	
6 8	縄文土器	深鉢	口唇～胴	貝殻腹縁文		暗褐色	粗	波状口縁
6 9	縄文土器	深鉢	口唇～胴	上部竹管押し文		暗褐色	織維、粗	波状口縁
6 10	縄文土器	深鉢	胴	羽状縄文		暗褐色	織維、粗	
6 11	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		赤褐色	粗	
6 12	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		赤褐色	粗	穿孔あり
6 13	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		橙褐色	粗	
6 14	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		暗褐色	粗	
7 15	縄文土器	深鉢	口唇～胴	斜縄文		暗褐色	粗	
7 16	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		暗褐色	粗	
7 17	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		褐色	粗	
7 18	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		暗褐色	粗	
7 19	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		暗褐色	粗	
7 20	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		赤褐色	粗	
7 21	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		黄褐色	粗	
7 22	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		暗褐色	粗	
7 23	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		褐色	粗	
7 24	縄文土器	深鉢	口縁	斜縄文		赤褐色	粗	
7 25	縄文土器	深鉢	口唇～胴	無文		暗褐色	粗	波状口縁 穿孔あり
7 26	縄文土器	深鉢	胴～底	斜縄文		暗褐色	粗	
8 27	縄文土器	深鉢	底	斜縄文		赤褐色	粗	木葉痕
8 28	縄文土器	深鉢	底	斜縄文		橙褐色	粗	木葉痕
8 29	縄文土器	深鉢	底	斜縄文		赤褐色	粗	木葉痕
8 30	縄文土器	深鉢	底	斜縄文		赤褐色	粗	木葉痕
8 31	縄文土器	深鉢	口縁			黒褐色	密	網代痕
8 32	縄文土器	深鉢	口縁			黒褐色	密	
8 33	縄文土器	深鉢				黒褐色	密	

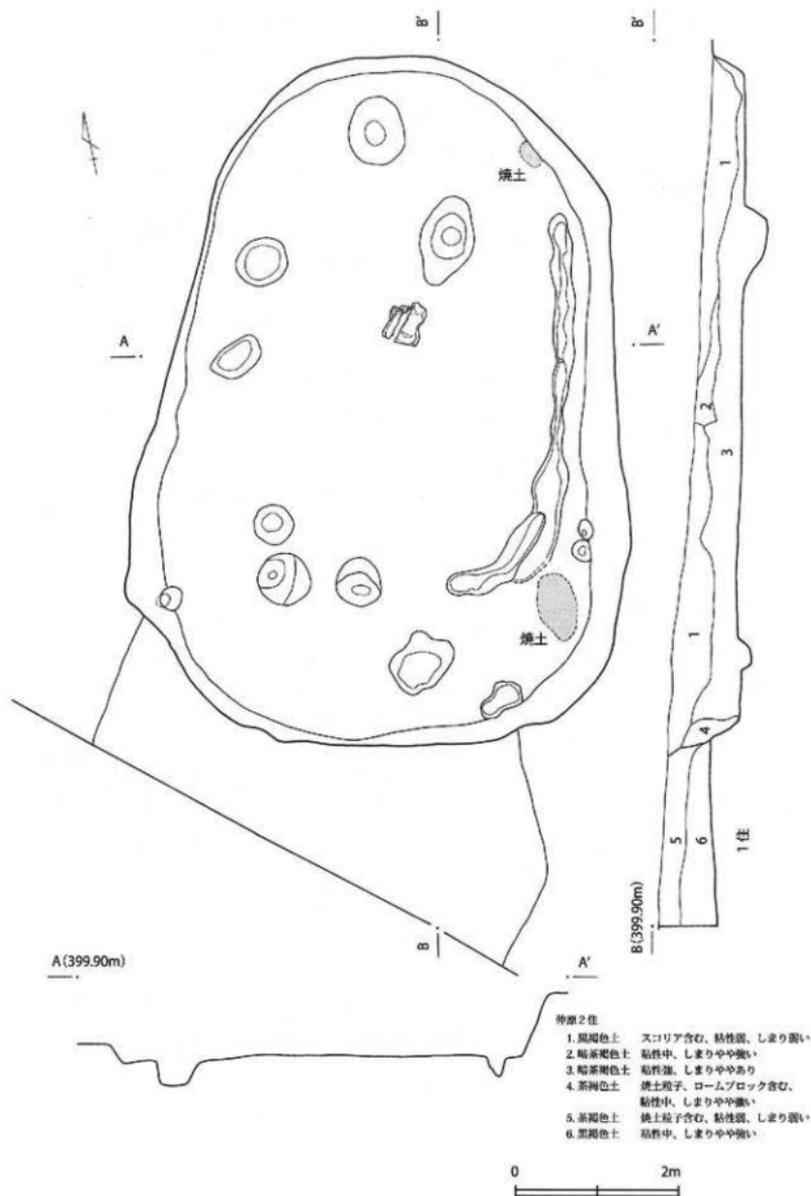


図5 2号住層址平面図 (1/60)

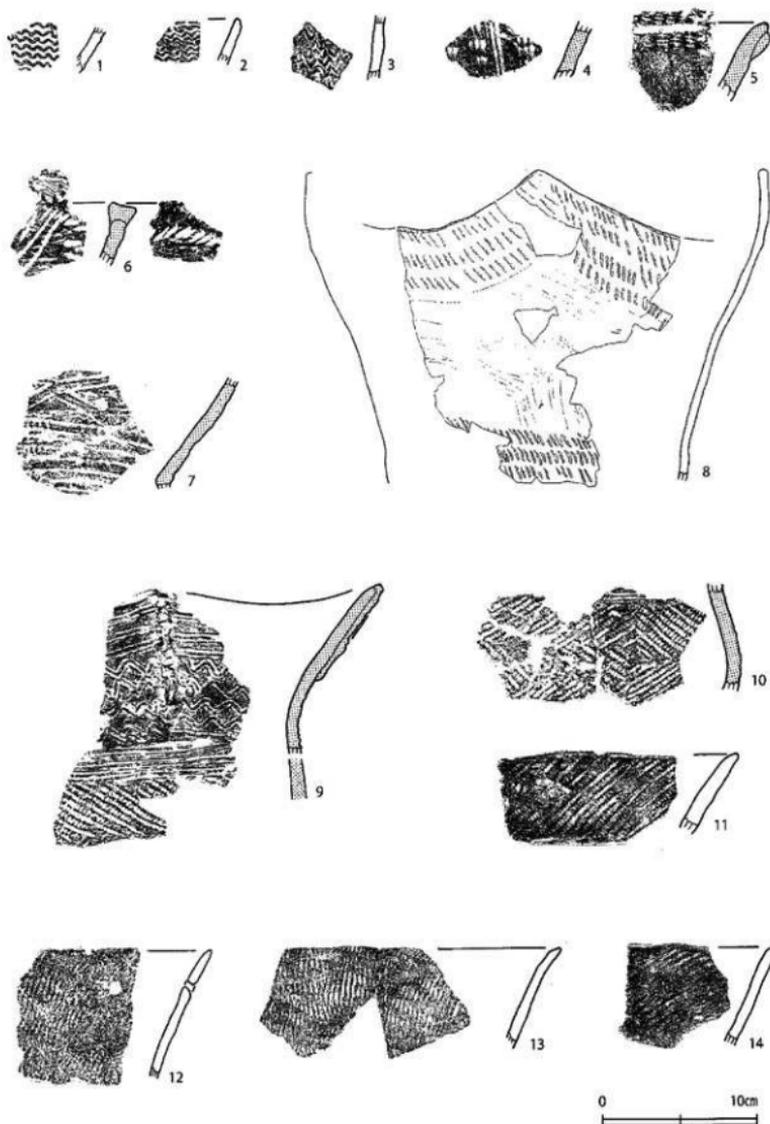


図6 2号住居址出土土器① (1/3)

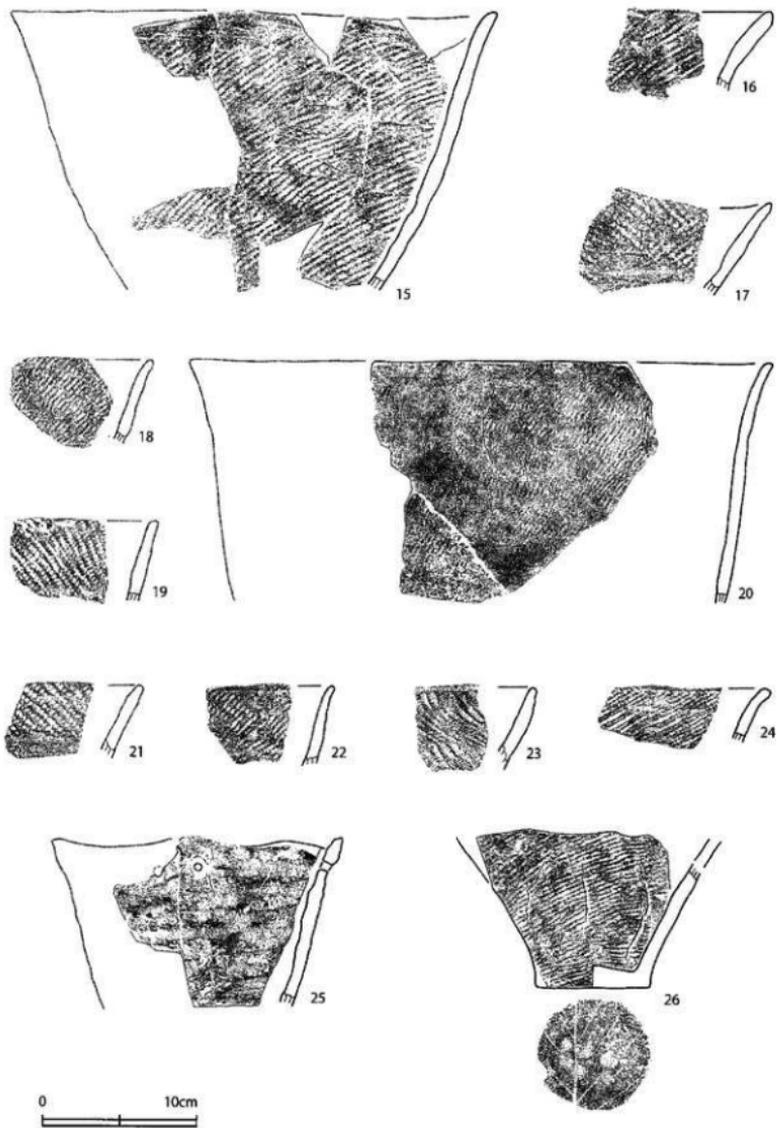


図7 2号住居址出土土器② (1/3)

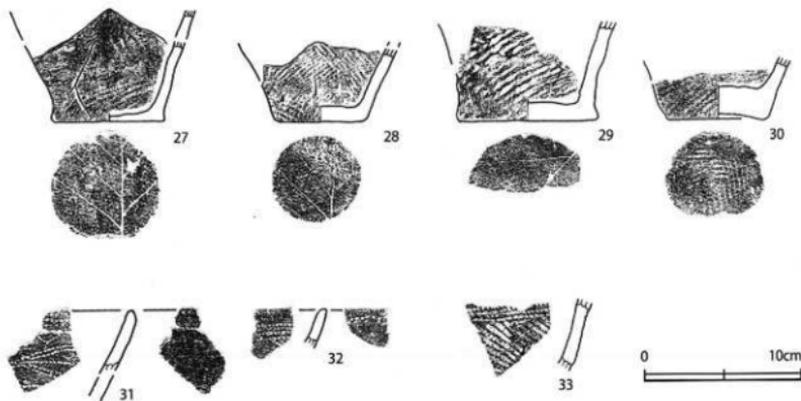
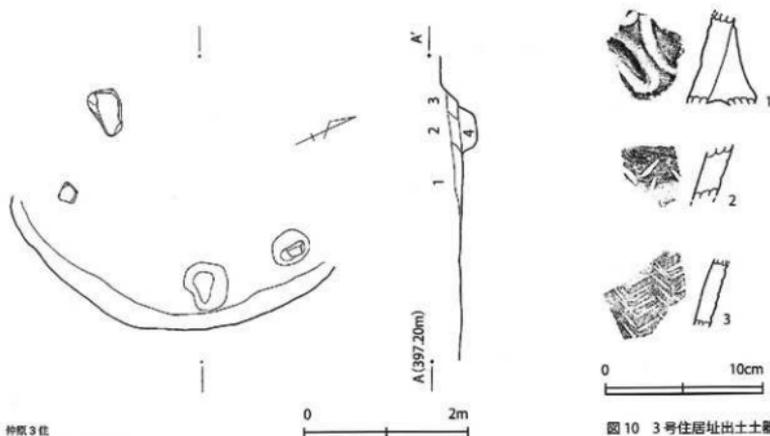


図8 2号住居址出土土器③ (1/3)

### 3号住居址 (図9)

調査区最西端に位置する。ほとんどが削平されており、東側の壁が僅かに残ったものである。土器の破片が3片覆土中から見つかったが、本住居址に伴う可能性は低い。



種別3住

- 1.暗褐色土 しまり強い
- 2.暗褐色土 ロームブロック含む、しまり強い
- 3.明褐色土 しまり強い
- 4.明褐色土 ロームブロック若干含む、しまり強い

図10 3号住居址出土土器 (1/3)

図9 3号住居址平面図 (1/60)

## 出土土器 (図 10)

いずれも小片である。1はX字状把手である。2は粗い「ハ」の字文様、3は線の細かい「ハ」の字文様で、中期後半の土器である。

表 3 3号住居址出土土器

図番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考	
				外面	内面				
10	1	縄文土器	深鉢	胴	太沈線		褐色	粗	
10	2	縄文土器	深鉢	胴	「ハ」		褐色	粗	
10	3	縄文土器	深鉢	胴	綾杉文		褐色	粗	

## 4号住居址 (図 11)

調査区中央に密集する住居址群の東側に位置し、すぐ西に数十センチ離れて7号住居址がある。略円形と思われるが、南側が五角形様になっている。長軸 5.2m、短軸 5.0m である。

壁の立ち上がりは緩やかで、残存高は約 40cm である。中央よりやや南に寄って円形の炉址をもつ。炉の底面は平らで、扁平な礫が 2 個中央部底面に張り付いていた。住居址床面は傾斜に沿って北西側に非常に緩く下がり、平坦である。人頭大の礫が床面上、また壁下に数点見られた。柱穴や細溝は見当たらない。

## 出土土器 (図 12)

中期後半の土器である。1は深鉢の口縁部片で、口唇から口縁下の括れまで粘土紐を格子状に貼付している。括れ部には太い粘土紐を巡らせる。2は器面ほぼ全体を縦位の縄文で被い、口縁上部から口唇にかけて太沈線で長円状の区画を設け、大きめのゴマ粒状の刺突文を充填する。地縄文中に波状沈線の懸垂文を付す。4も同様だが、長円状区画下端の中にまで縄文が及ぶ。3は口縁部を欠失する。頸部には残存部で3条の太い沈線が巡り、うち1条に連続爪形文を付す。胴部全体に地縄文を施し、連続「S」字文を垂下する。胴部断面形は算盤玉状である。5は地縄文を施した口縁を太い沈線で飾り、口縁外に巡らせた平行沈線最下部に渦文を付し、また3条の平行沈線を垂下させている。6は丸い胴部破片で、地縄文に平行沈線を狭い間隔で垂下させている。7・8は地縄文で全体を覆う深鉢で、口縁と括れ部に内部を擦り消した長円を巡らせている。長円の間に平行沈線が垂下する。9・10は口縁に極太の沈線を巡らせ、その一部を渦状に処理している。上記沈線の下はやはり太い沈線で区画し、梯子状に短沈線を充填している。11は小形深鉢で若干上底気味である。無紋だが、篋状工具で器面調整を行っている。

表4 4号住居址出土土器

図番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考
				外面	内面			
12 1	縄文土器	深鉢	口縁	格子目文		褐色	密	石英、長石
12 2	縄文土器	深鉢	口唇～胴	地縄文		暗褐色	粗	
12 3	縄文土器	壺	頸～底	頸部沈線文		褐色	粗	
12 4	縄文土器	深鉢	口縁	地縄文		暗褐色	粗	
12 5	縄文土器	深鉢	口縁	地縄文		褐色	粗	
12 6	縄文土器	深鉢	胴	頸部沈線文 地縄文		暗褐色	粗	
12 7	縄文土器	深鉢	口縁	磨消楕円文		橙褐色	密	
12 8	縄文土器	深鉢	頸	頸部磨消		橙褐色	密	
12 9	縄文土器	深鉢	口縁	太沈線		暗褐色		
12 10	縄文土器	深鉢	口縁	太沈線		暗褐色		
12 11	縄文土器	深鉢	略完形	無文		暗褐色		筵調整

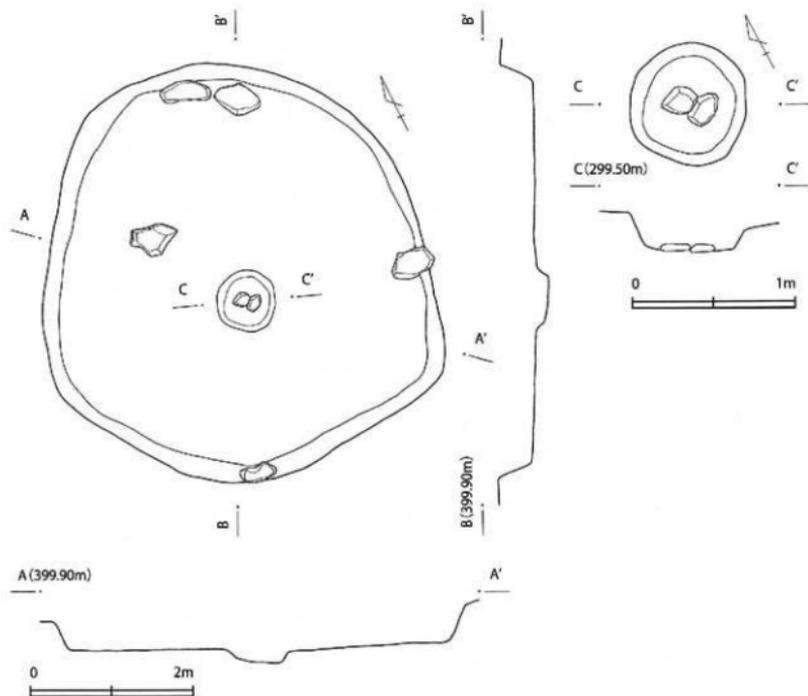


図11 4号住居址 (1/60)、炉址平面図 (1/30)

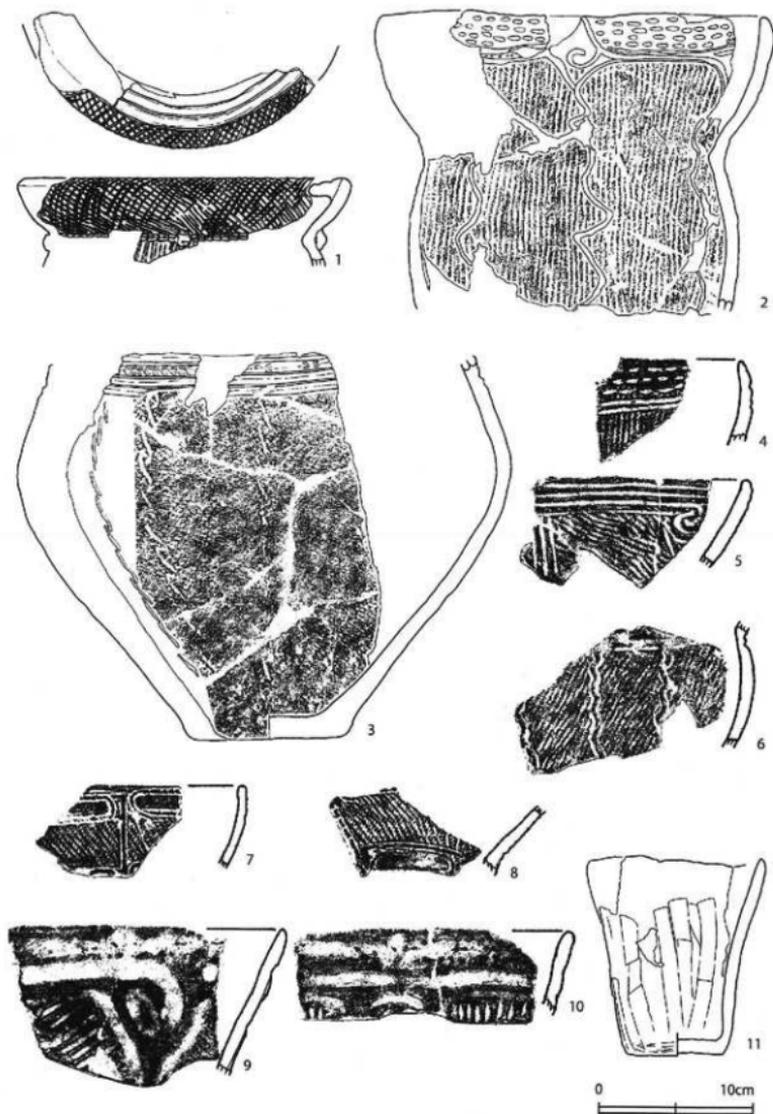


図12 4号住居址出土土器 (1/3)

## 5号住居址 (図13)

本住居址は調査区中央に密集する住居址群の西側に位置し、6号住居址と南辺を接している。平面で半分以上は削られ失われており、北側を大型で楕円の土坑が切っている。直径約4.5mの略円形ないし略方形を呈すると考えられる。

壁は高いところで35cmを測る。傾斜は緩い。

石囲炉が中央よりやや北に偏して設置されている。炉の壁および底面は球面状で、最深部で床面から35cm程度ある。炉穴の規模は40cm前後の楕円である。石囲いは厚さ10cm前後の扁平な閃緑岩が使われており、本来は4個の石が方形に配されていたものと思われる。焼土の堆積は多くなかった。

南壁寄りに不定形の浅い窪みが2箇所確認されている。これらの周辺には焼土と人頭大の礫が1個とが散在していた。火を使い何かを加工した痕跡の可能性はある。

土坑 北西側の住居址の壁を切るように土坑が掘られていた。長軸2m、短軸1.6mの楕円状を呈する。深さは5号住居址床面レベルより25cm低く、壁の傾きは60度前後で一定している。5号住居址より新しいが、遺物が皆無いため目的・用途は不明である。覆土内容は5号住居址のものに似ているので、住居廃絶後それほど期間を置かない時期のものと考えられる。

## 出土土器 (図14)

縄文中期中葉の土器である。すでに述べたように遺構の残存が悪く、得られた土器資料は破

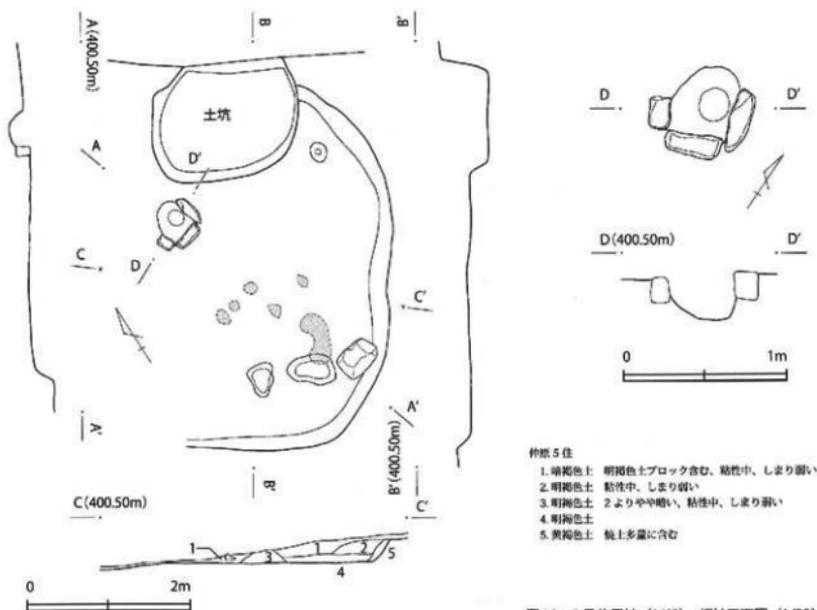


図13 5号住居址 (1/60)、炉址平面図 (1/30)

片のみである。4は彫刻的な施文が顕著で、口縁部と胴下部の間に広い無文帯が置かれる。口縁部文様帯は突出部（恐らく4単位）の間を刻線により短線、三叉線等を配する。下部文様帯は周回する沈線で文様帯を区切り（現存2帯）、それぞれを縦の短線、三角線で埋めている。5の口縁部文様帯は平板で、無地の上に孔の周りに円、そこから派生する有刺鉄線状の文様、渦文を描いている。9は矩形の区画中に楔状の沈刻を施している。13,14は土器の脚部である。16は波状口縁土器の把手部であるが、蛇頭を模したものである。

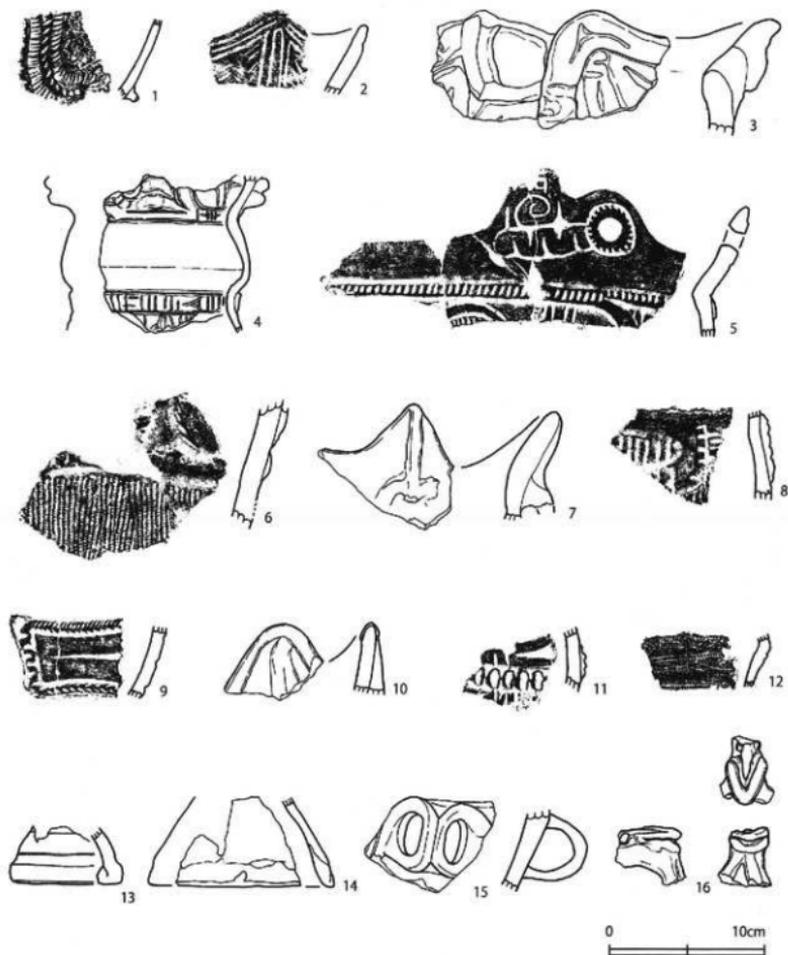


図14 5号住居址出土土器 (1/60)

表5 5号住居址出土土

図番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考
				外面	内面			
14 1	縄文土器	深鉢	胴	キョタヒラ		赤褐色	密	
14 2	縄文土器	深鉢	口縁	中太沈線		暗褐色	粗	
14 3	縄文土器	深鉢	口縁	三叉文		赤褐色	粗	
14 4	縄文土器	深鉢	胴	太沈線		黄褐色	粗	
14 5	縄文土器	深鉢	口縁			暗褐色	粗	
14 6	縄文土器	深鉢	胴	隆帯		褐色	粗	
14 7	縄文土器	深鉢	口縁	隆帯貼付		褐色	粗	
14 8	縄文土器	深鉢	胴	長方形区画		黄褐色	粗	
14 9	縄文土器	深鉢	胴	隆帯		暗褐色	粗	
14 10	縄文土器	深鉢	口縁			褐色	粗	
14 11	縄文土器	深鉢	胴			褐色	粗	
14 12	縄文土器	深鉢	胴			褐色	粗	
14 13	縄文土器		脚			暗褐色	粗	
14 14	縄文土器		脚			褐色	粗	
14 15	縄文土器	深鉢	口縁部	メガネ		暗褐色	粗	
14 16	縄文土器	深鉢	口縁部把手	蛇		褐色	粗	

## 6号住居址(図15)

本住居址は調査区中央に密集する住居址群の中央に位置する。北西辺で5号住居址と接し、東南～南側で7号住居址、11号住居址、8号住居址と一部を重複させている。

平面は略円形あるいは楕円形であり、長軸4.9m、短軸4.0mである。壁は20cmほど残存し、傾斜は他例の同期のものと同様に緩い立ち上がりである。

床面は平坦で、ほぼ中央に炉址をもつ。炉址の大きさは長軸90cm、短軸1.6mのきれいな楕円状を呈する。底は床面まで20cmと浅く、皿状の平坦な底面に焼土が広く厚く堆積していた。緩く立ち上がる壁面に拳大の角礫が残っていた。南壁と炉址の中間地点に直径20cmの焼土堆積が観察された。

## 出土土器(図16,17,18)

縄文中期後半の土器である。1は特異な装飾を施した深鉢で、口唇から胴部中央にかけて太い粘土紐をスタレ状に垂下させる。紐には刻みが入る。3は丸い胴部をもつ壺形土器で、無文地に太い沈線で渦、曲線、線分を描いている。4～7はサイズの割には器壁が薄く、X字状把手、極太沈線による渦文を施している。8は広口壺形土器で、口縁部は無紋とし、肩の張る胴部には粘土紐貼付により彫刻的な曲線、弧線を表現しているが、残存部分からは規則性は伺えない。9・10は典型的な曾利IV式土器である。11は胴部の縦長の区画をゴマ粒状の刺突で満たしている。12は15と酷似するが、区画内の処理が12は毛彫り風で、15は棒状工具による斜めの条線となる。13は縦区画の内外に笹葉状の短線を振っている。14は胴部の処理が12に似ているが、弧状に描いている点が異なる。

表6 6号住居址出土土器

図	番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考
					外面	内面			
16	1	縄文土器	深鉢	口唇～底	□縁刻み目入り粘土紐を垂下		褐色	密	
16	2	縄文土器	深鉢	胴	太沈線区画		黄褐色	粗	
16	3	縄文土器	壺	胴～底	太沈線で蔽文		赤褐色	粗	X字状把手
16	4	縄文土器	深鉢	胴	太沈線で蔽文		黄褐色	粗	
16	5	縄文土器	深鉢	胴	太沈線で蔽文		褐色	粗	
16	6	縄文土器	深鉢	胴	太沈線で蔽文		褐色	粗	
16	7	縄文土器	深鉢	胴	太沈線で蔽文		褐色	粗	
16	8	縄文土器	壺	口唇～胴	太沈線で柔毛		橙褐色	粗	
16	9	縄文土器	深鉢	口唇～胴	突起夙文様		暗褐色	粗	
16	10	縄文土器	深鉢	胴～底	太沈線区画		橙褐色	粗	
16	11	縄文土器	深鉢	口縁～胴	平行沈線垂下		暗褐色	粗	
16	12	縄文土器	深鉢	口縁	太沈線で方形区画		褐色	粗	
16	13	縄文土器	深鉢	口縁	口縁に太沈線		暗褐色	粗	
16	14	縄文土器	深鉢	口縁～胴	口縁に太沈線 胴は櫛歯で弧線		褐色	粗	
16	15	縄文土器	深鉢	口縁～胴	口縁に太沈線 胴は斜行沈線		暗褐色	粗	

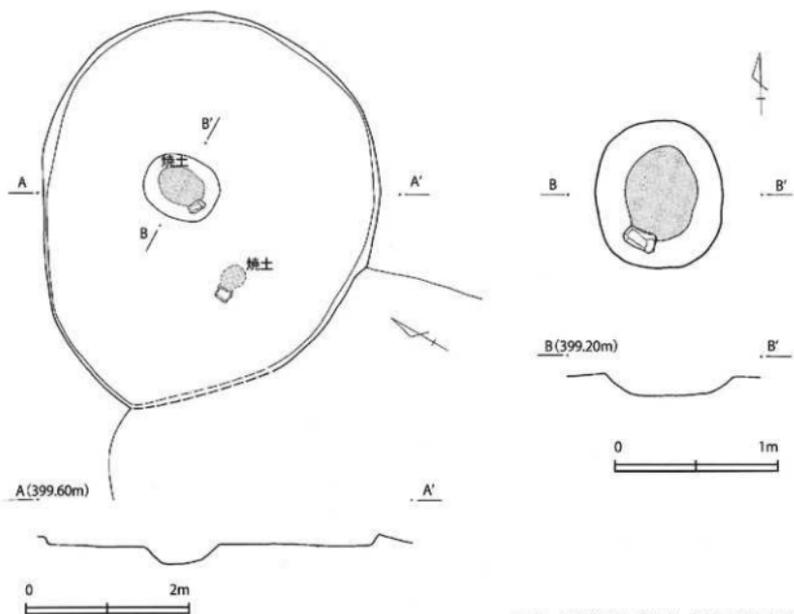


図15 6号住居址 (1/60)、炉址平面図 (1/30)

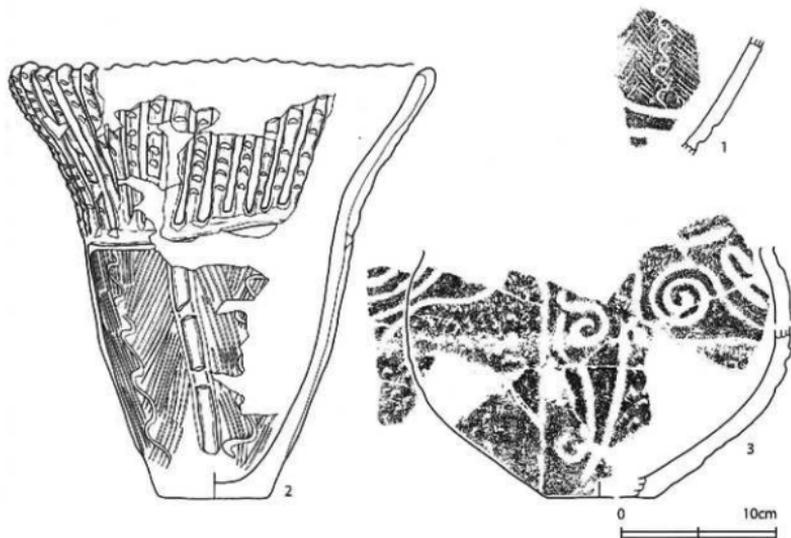
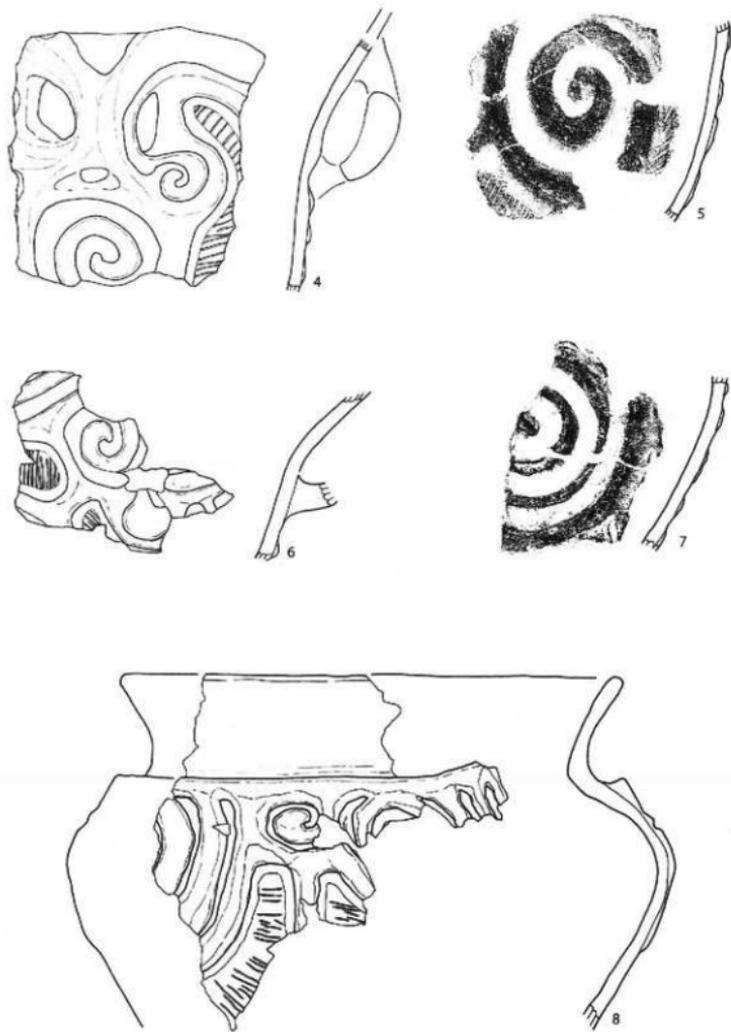


図16 6号住居址出土土器① (1/3)



0 10cm

图 17 6号住居址出土土器② (1/3)

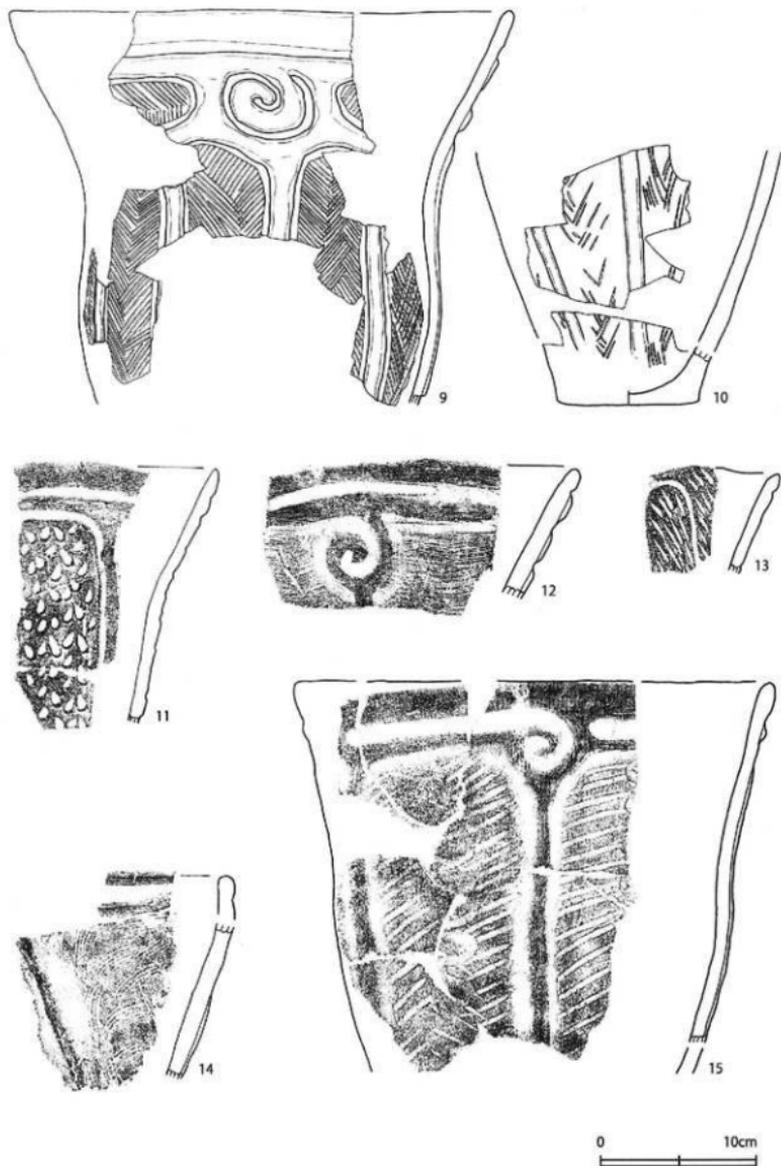


图 18 6号住居址出土土器③ (1/3)

## 7号住居址 (図19)

本住居址は調査区中央に密集する住居址群の中にあり、北側を6号住居址に切られている。南側には数十センチ離れたところに4号住居址の壁がある。

南西側を11号、西側を6号住居址に切られているため不完全ではあるが、平面形は楕円になると考えられる。

壁は残りの良いところで高さ25cmしかない。上部をかなり削られてしまっているが、床にへばり着いたように深鉢形の大型土器片が出土している。

床面は平らで炉址を除く柱穴・溝等の施設は確認できなかったが、楕円形状の焼土塊が炉址のすぐ西側床面上で見つかった。

炉址は残存部のほぼ中央(復元プランでは北東側に偏る)に楕円形のもので設置されていた。底部までの深さは20cm未満と非常に浅く、したがって壁も非常に緩いものになっている。炉の掘り込み面直上で深鉢の大型土器片が見つかった。焼土は長軸上に南に偏って厚く堆積していた。

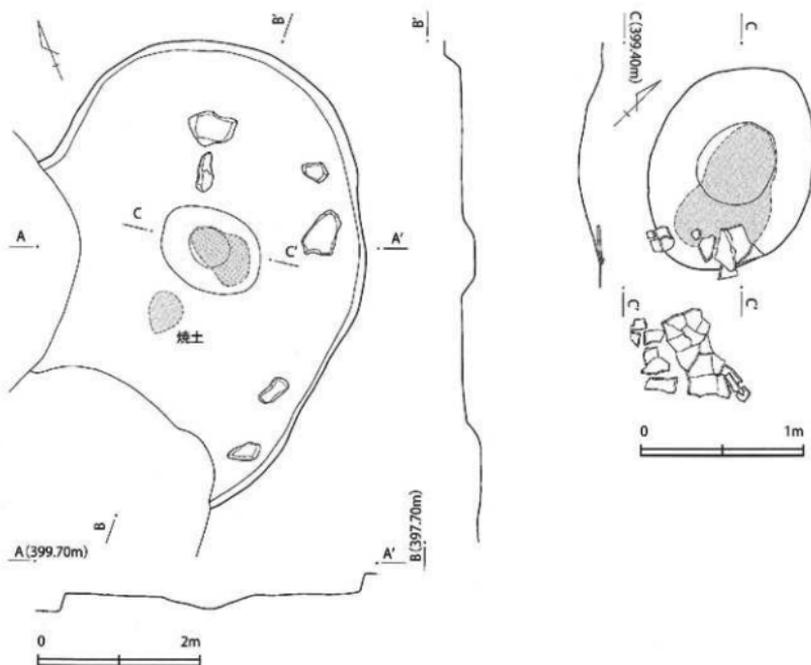


図19 7号住居址 (1/60)、炉址平面図 (1/30)

## 出土土器 (図 20,21,22,23,24)

中期後半の土器群が主体である。1～3は口縁、口縁下に粘土紐を並行かつ密に貼付する。4は大型の深鉢で口縁に弧文と波状の粘土紐を垂下させ、括れ部の肩に渦文、弧文を配する。5は蚯蚓腫れ状の粘土紐を付したX字状把手である。6・7は地文に縄文、条線文を施し、口縁周りの沈線から波状文を垂下させている。8は器壁が曲線となる深鉢で、地に縦の条線を粗く施している。

12は肥厚帯口縁上に楕円文、胴部に横S字モチーフを配する大型深鉢である。13・14は肥厚帯口縁に凹文ないし楕円文を配する。15は横S字の間を条線で埋め、16・17は肥厚帯口縁に縦位の条線を満たした楕円文を配する。18はやや大振りの深鉢口縁部で、大きな波状の隆帯、波頭に渦文、波谷部を縦沈線で充填している。19は厚手の小型深鉢で、肥厚帯口縁に凹文、ボタン状突起を付している。胴部には沈線による葉脈状意匠を描き、また縄文、逆「ハ」の字なども付している。

23・24は底部破片で、23は胴が丸く膨らむ大型深鉢形土器である。24は中型の深鉢で、垂下する降帯間を縦や斜めの条線で満たし、さらに渦や横S字の曲線文が配される。25はいわゆる有孔鈔付き土器で、胴下半に最大径をもつ壺型土器である。胴の地文は無く、竹管による押し引きにより、大きな渦文が描かれる。

26は大型深鉢の胴部破片である。括れ部に横S字モチーフから生ずるX字状把手が付く。弱く膨らむ胴部に渦文、J字あるいはW字状の懸垂文が描かれ、空間を短沈線ないし刺突文で満たしている。

表7 7号住居址出土土器

図番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考	
				外面	内面				
20	1	縄文土器	深鉢	口縁	粘土紐貼付		赤褐色	密	
20	2	縄文土器	深鉢	頸部	粘土紐貼付		褐色	密	
20	3	縄文土器	深鉢	口縁	粘土紐貼付		黄褐色	粗	
21	4	縄文土器	深鉢	口唇～胴下	沈線弧文		暗褐色	繊維、粗	
21	5	縄文土器	深鉢	胴	粘土紐に刻目		褐色	繊維、粗	
21	6	縄文土器	深鉢	口縁～胴	口縁に太沈線 波状文垂下		明褐色	繊維、粗	波状口縁
21	7	縄文土器	深鉢	口縁～胴	口縁に太沈線 波状文垂下		黄褐色	繊維、粗	
21	8	縄文土器	深鉢	口縁～胴	口縁下条痕		暗褐色	粗	波状口縁
21	9	縄文土器	深鉢	胴～底	波状文垂下		暗褐色	繊維、粗	波状口縁
21	10	縄文土器	深鉢	胴	垂下隆帯、 ゴマ粒状刺突文		暗褐色	繊維、粗	
21	11	縄文土器	深鉢	口縁	口縁に突起貼付		赤褐色	粗	
22	12	縄文土器	深鉢	口縁	口縁楕円文		赤褐色	粗	穿孔あり
22	13	縄文土器	深鉢	口縁	円文		橙褐色	粗	
22	14	縄文土器	深鉢	口縁	波状文垂下		暗褐色	粗	
22	15	縄文土器	深鉢	胴	渦文内は条痕		暗褐色	粗	
22	16	縄文土器	深鉢	口縁～胴	口縁に楕円、 内部縦位の条線		暗褐色	粗	
22	17	縄文土器	深鉢	口縁	口縁に円文、 内部は平行線		褐色	粗	
22	18	縄文土器	深鉢	口縁	口縁は粘土紐貼付、 弦月状文内は縦沈線		暗褐色	粗	
22	19	縄文土器	深鉢	口縁	口縁円文、 胴部は沈線と縄地文		暗褐色	粗	
23	20	縄文土器	鉢	口縁	無文、口唇突起		赤褐色	粗	
23	21	縄文土器	深鉢	口縁	口縁に沈線、 下部区画内縄文		黄褐色	粗	
23	22	縄文土器	深鉢	口縁	櫛歯状条痕		暗褐色	粗	
23	23	縄文土器	壺	胴下部～底	地縄文		褐色	粗	
23	24	縄文土器	深鉢	胴下部～底	縦、斜め、弧状の施文		赤褐色	粗	
23	25	縄文土器	壺	口縁～胴下部	竹管押引による渦文		暗褐色	粗	波状口縁 穿孔あり
24	26	縄文土器	深鉢	胴	平行沈線による 横S字文、W字文、 刺突文		暗褐色	粗	

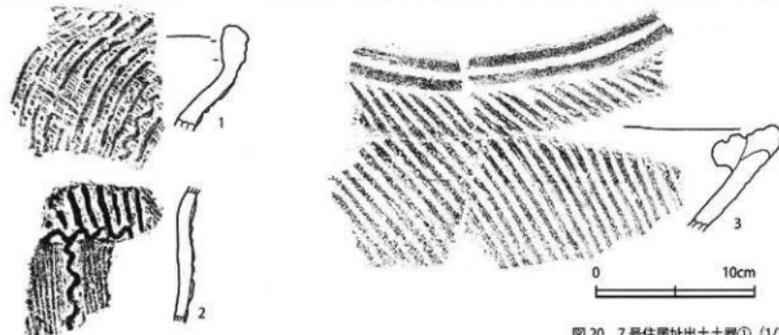


図20 7号住居址出土土器① (1/3)

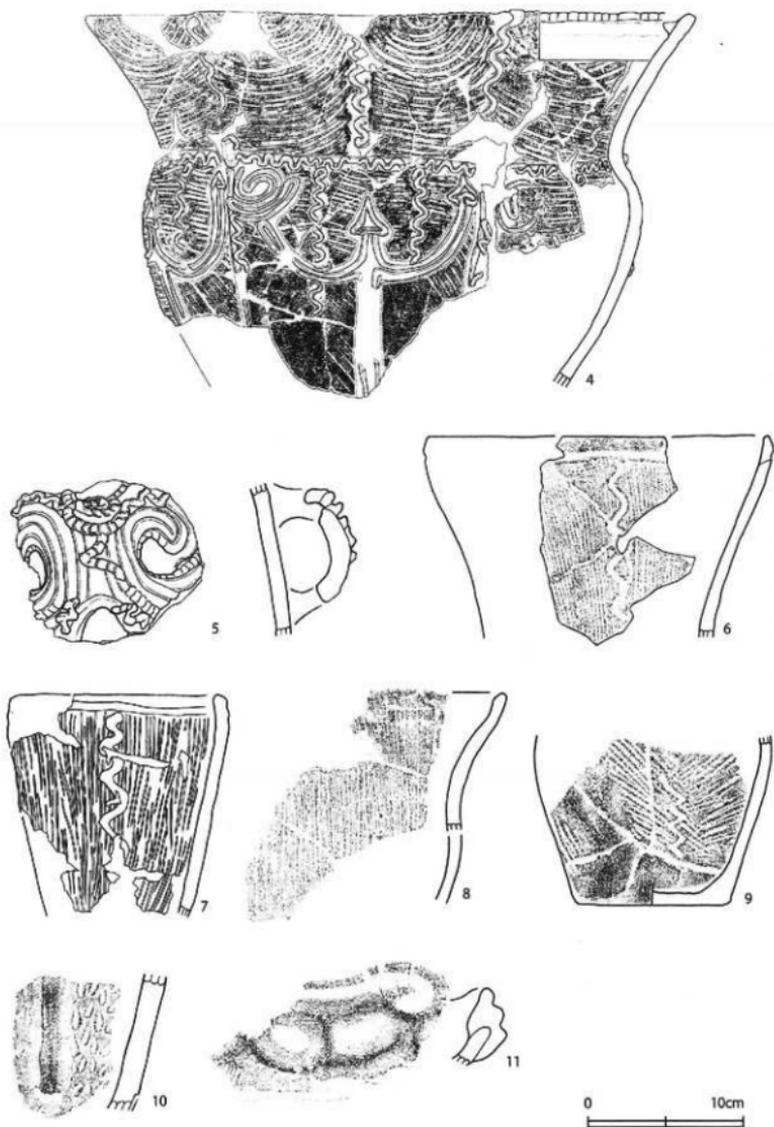


図21 7号住居址出土土器② (1/3)

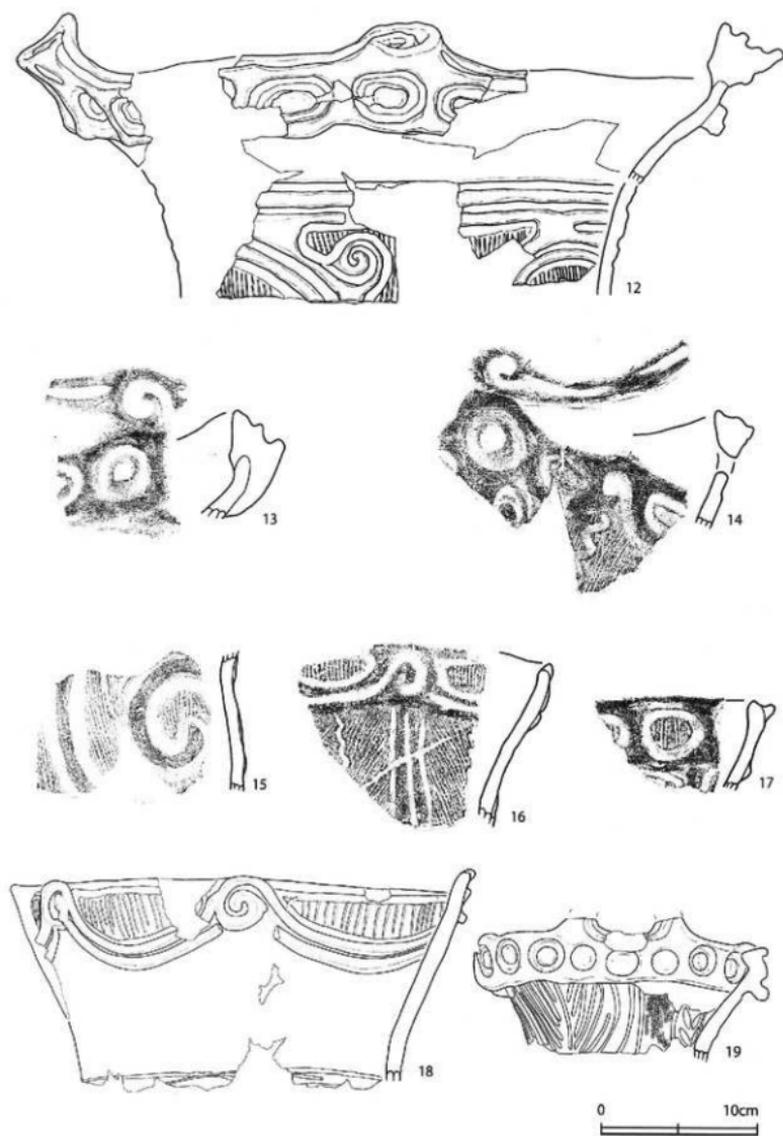


図22 7号住居址出土土器③ (1/3)

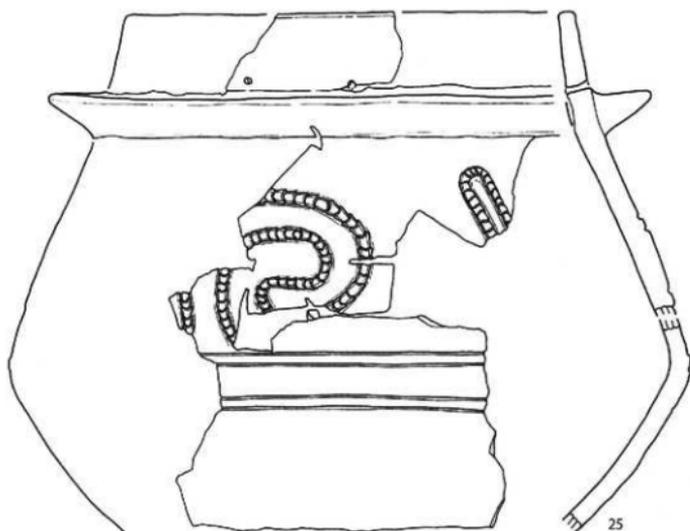
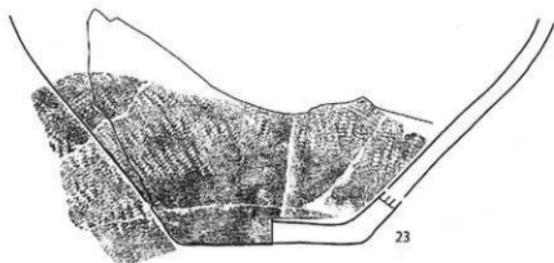


図23 7号住居址出土土器④ (1/3)

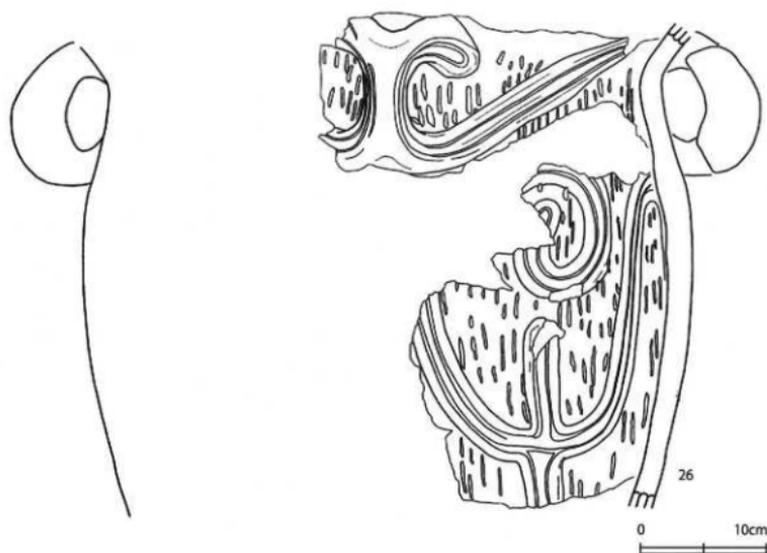


図24 7号住居址出土土器③ (1/3)

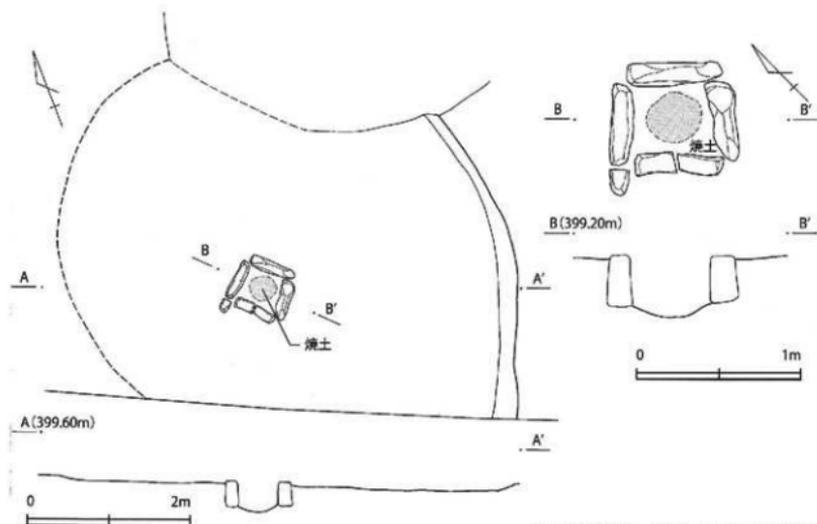


図25 8号住居址 (1/60)、炉址平面図 (1/30)

## 8号住居址 (図 25)

本住居址は調査区中央に密集する住居址群のうち南側に位置する。北側を6号住居址に切られ、東側で11号住居址を切っている。

平面形は楕円で、長軸は推定6m、短軸は推定5mである。壁は全周の4分の1程度残存し、その部分で10cmほどの高さで残っていた。西側の壁と床は削り取られているが、ぎりぎりまで残った床は平坦であった。

石囲炉は厚さ約15cmの四角い扁平な閃緑岩で四辺を画した端正なものであった。石外縁で140×130cmの長方形を呈し、囲い石は35cm程度埋め込まれていた。炉底は球面状で、中央に直径35cmの円形の焼土堆積が見られた。

## 出土土器 (図 26,27)

中期後半の土器群である。1は口縁部に格子文を施し、括れ部下は縦位の沈線を地文とし、波状文を垂下させている。2は口縁下の括れから胴にかけての破片で、括れ部に波状の粘土紐を周回させる。胴部は3条の隆線を垂下させて区画し、内部を縦の沈線で埋めている。3は波状口縁で、波頂点したに沈線の渦文、その両側には楕円文が配されるようだ。これら口縁部の文様帯の下には、やはり同幅の沈線による文様が描かれる。4～10は沈線と隆線による区画内を条線、縄文、「ハ」の字モチーフで満たす深鉢である。4の口縁部には太い沈線による長円が付され、その下に矩形区画が設けられる。5は口縁が分厚く成形されるが、口縁部文様帯はない。口縁下に矩形の区画を配し、斜行する条線を重点している。

6は大振り器壁が鐮鉢状に大きく開く。底部に向かって狭まる矩形の文様区画が4単位配されると思われる、内部は散漫な条線で埋められる。さらに中間に波状文を垂下させた区画、波状文のない区画がある。7は縦長の楕円で文様区画を作り、中に縄文を施してから沈線による波状文を垂下させている。8・9は口唇下に数センチの無文帯を置き、隆線を周回させ、さらに縦の隆線で区画し「ハ」の字を充填させる。10も類似の深鉢であるが、区画充填の意匠が少し異なる。11・12は深鉢の底部で、縦沈線で器壁を区画する沈線が底面より数センチで止まっている様子が判る。また11には2本飛びの網代痕が残る。

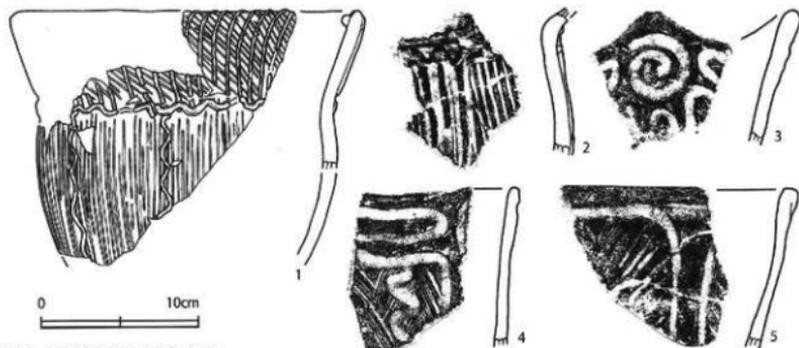


図 26 8号住居址出土土器① (1/3)

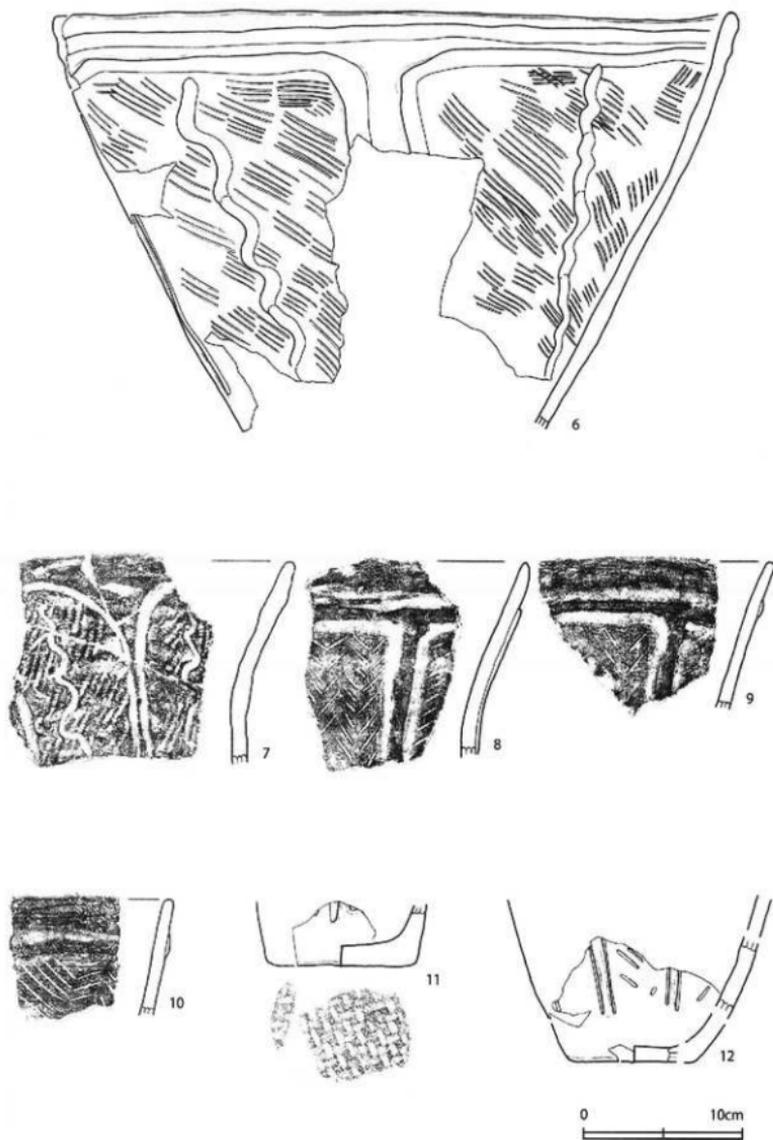


図27 8号住居址出土土器② (1/3)

表8 8号住居址出土土器

図	番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考
					外面	内面			
26	1	縄文土器	深鉢	口縁・胴	格子文		褐色	粗	
26	2	縄文土器	深鉢	肩	太沈線		褐色	粗	
26	3	縄文土器	深鉢	口縁	太沈線の渦文		褐色	粗	
26	4	縄文土器	深鉢	口縁	口縁に長円、以下の区画内に条痕		赤褐色	粗	
26	5	縄文土器	深鉢	口縁	沈線区画内に条痕		暗褐色	粗	
27	6	縄文土器	深鉢	口縁・胴	口縁に太沈線一条。 以下区画内を条痕		暗褐色	粗	波状口縁
27	7	縄文土器	深鉢	口縁	長円区画内は縄文、波状文垂下		暗褐色	粗	
27	8	縄文土器	深鉢	口縁	隆線で器壁分割、中に綾杉文		褐色	粗	波状口縁
27	9	縄文土器	深鉢	口縁	口縁下、隆帯で分割し中に綾杉文		褐色	粗	波状口縁
27	10	縄文土器	深鉢	口縁			褐色	粗	
27	11	縄文土器	深鉢	底	平底、網代直		褐色	粗	
27	12	縄文土器	深鉢	底	平行沈線、斜行短沈線		褐色	粗	穿孔あり

### 9・10号住居址

9・10号住居址は4号住居址のすぐ南側に位置する。調査区内では平坦な地形上に位置する。双方方形の浅い落込みで、遺物の発見はないが、本書では住居址として扱う。2軒は一部を重複させ、10号住居址が9号住居址を切っている関係にある。一辺5m強の方形住居址の掘り方を検出したものとも考えられる。底面は平坦であるが、屋内施設は検出されていない。

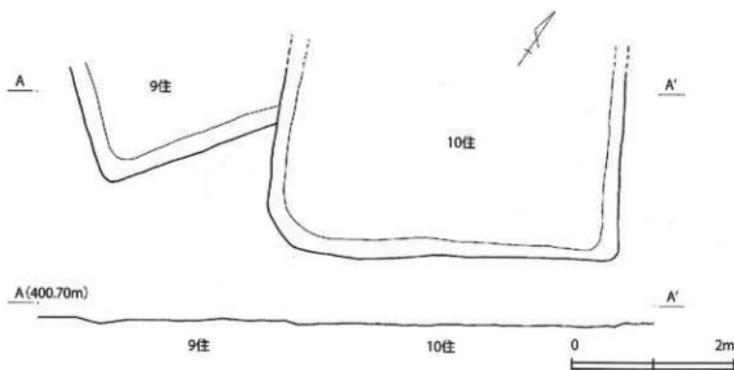


図28 9・10号住居址平面図 (1/60)

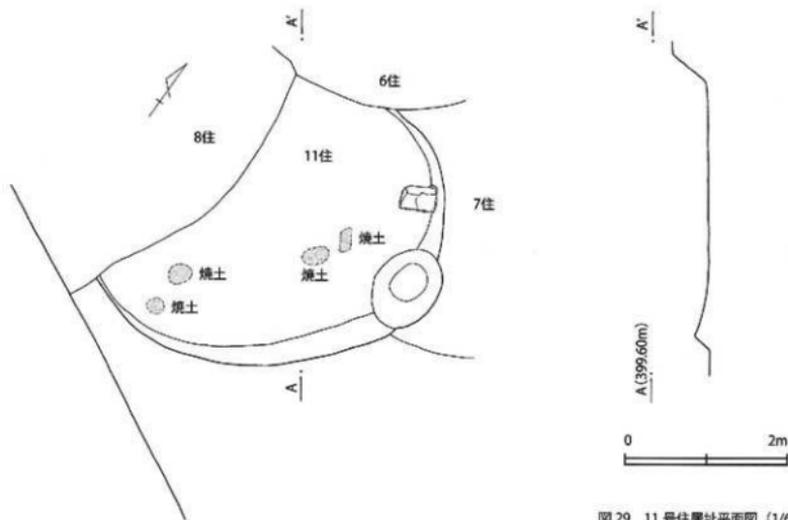


図29 11号住居址平面図 (1/60)

### 11 号住居址

本住居址は調査区中央に密集する住居址群のうち7号住居址と8号住居址に挟まれて位置する。北側を6号住居址に切られている。

東壁は高さ25cmが残るが、西半分は完全に削り取られて不明である。床面は7号住居址の床面より深く掘られていたため、平面プランは長軸4.3m、短軸推定3.5mの楕円形であることが判った。床面は平坦である。東壁には長軸100cm、短軸85cmの楕円形の土坑状の施設を設置しているが、上屋に関わるものかもしれない。床面上に炉や柱穴など他の施設は確認できなかったが、20～30cm径の焼土堆積が4箇所観察できた。

#### 出土土器 (図26,27)

前期後半の土器群である。諸磯 a、b、c の各形式が見られる。1～10は口縁部破片で、広狭の横走る連続爪形文のほか、竹管小口を用いた円文、平行沈線文が見られる。4は口唇に刻みを施している。10口縁が内湾する深鉢で波状口縁を持つ。施文は平行沈線による。

11、14、17は地縄文に横走る浮線を貼付したものである。12、13、16は地縄文を施したあと多条の平行沈線を横走させる、三角形を描くなどした胴部の破片である。15は狭い連続爪形文で木葉文を描いた部分の破片と思われる。

18、19は斜行する集合沈線の地に2個一組のボタン状貼付文が付される。この貼付文2個は横並びに配置される。19は底部を含む破片で集合沈線はジグザグに描かれている。底部径は10cmほど上にある最小径部より約1.5cm大きく、安定感がある。

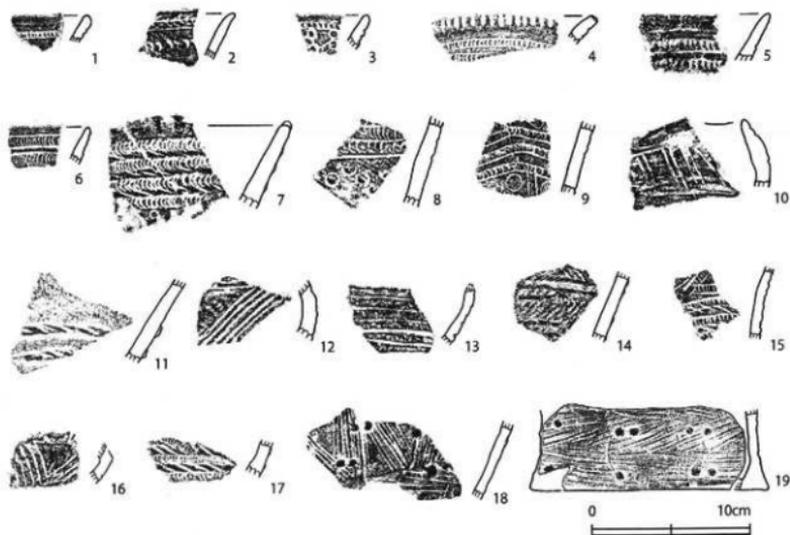


図30 11号住居址出土土器 (1/3)

表9 11号住居址出土土器

図	番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考
					外面	内面			
30	1	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文		暗褐色	密	
30	2	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文		暗褐色	密	
30	3	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文、円文		赤褐色	密	
30	4	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文、 口唇刻目		褐色	密	
30	5	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文		赤褐色	密	
30	6	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文		褐色	密	
30	7	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文、円文		暗褐色	密	
30	8	縄文土器	深鉢	胴上	連続爪形文、円文		赤褐色	密	
30	9	縄文土器	深鉢	胴上	連続爪形文、円文		暗褐色	密	
30	10	縄文土器	深鉢	口縁	平行沈線文		暗褐色	密	
30	11	縄文土器	深鉢	胴上	浮線文、地縄文		暗褐色	密	
30	12	縄文土器	深鉢	胴上	平行沈線文、地縄文		暗褐色	密	
30	13	縄文土器	深鉢	口縁	平行沈線文、地縄文		褐色	密	
30	14	縄文土器	深鉢	胴上	浮線文、地縄文		褐色	密	
30	15	縄文土器	深鉢	胴上	連続爪形文		暗褐色	密	
30	16	縄文土器	深鉢	胴上	平行沈線文、地縄文		暗褐色	密	
30	17	縄文土器	深鉢	胴上	浮線文、連続爪形文、 地縄文		暗褐色	密	
30	18	縄文土器	深鉢	胴上	集合沈線文 ボタン状貼付文		暗褐色	密	
30	19	縄文土器	深鉢	底部	集合沈線文 ボタン状貼付文		褐色	密	

## 2節 溝址と出土土器

調査区の東端で礫が詰まった溝址が2条見つかった。2条とも同じ平面形状で巡るように位置することから1つの遺構に伴うものと判断できる。溝は4分の3以上は未調査区に伸びているが、調査では丸い隅が現れており、方形ないし多角形を呈すると考えられる。内側の溝址のさらに内側（内陣と称する）には長方形の浅い掘り込みがあり、小礫群、焼上、円・楕円の浅いピットが散在する。

### 溝址 (図 31、32)

内側の溝の断面形は概ねV字状であるが中段で幅を狭める。底は皿状である。礫は閃緑岩の角礫が主体をなし、サイズは拳大から長さで1mを越えるものまでである。内側溝の礫の密度は南端と北端でやや濃く、曲折する部分で薄い。

外側溝の礫には長大なものが割りと多く、曲折する個所では長軸を連ねて配されたような部分も観察された。礫列は所々途切れる部分も見られ、溝の断面形も齊一でなく乱れていた。特に南端では礫も溝も途絶えてしまう。

内陣は長方形で、短辺220cm、長辺700cm（推定）、深さ5～10cmを測る。



図 31 溝址平面図 (1/80)

出土土器 (図 26,27)

すべて須恵質土器の破片である。1 は口唇部が丸く外側に肥厚し、下端は段をなしている。広口壺の口唇部と思われる。2 は口唇部を欠失する口縁部から頸部にかけての破片である。肥厚する口唇へ至る屈曲部が観察できる。3 は小形の瓶子の肩部破片である。

図 32 溝址内陣遺構平面図 (1/60)

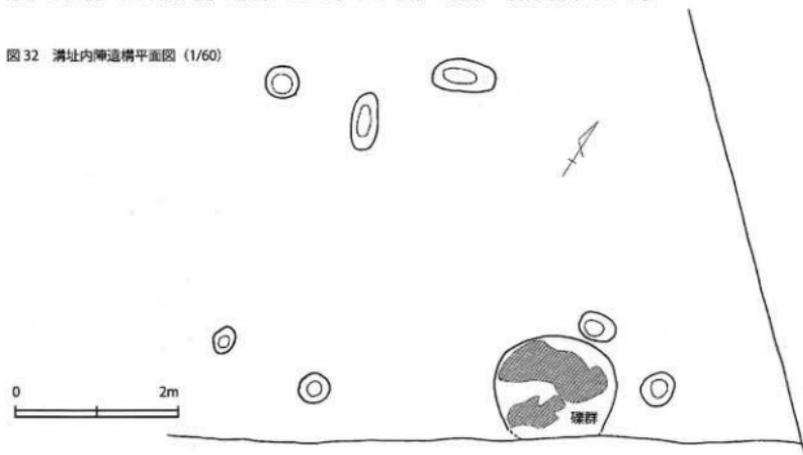


表 10 溝址出土土器

図番号	種別	器種	部位	整形	施文		色調	胎土	備考
					外面	内面			
33 1	須恵器	広口壺	口縁	ナデ			灰色	精選	
33 2	須恵器	壺	頸部	ナデ			灰色	精選	
33 3	須恵器	瓶子	肩	ナデ			灰色	精選	
33 4	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 5	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 6	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 7	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 8	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 9	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 10	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 11	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 12	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 13	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 14	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 15	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 16	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 17	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 18	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 19	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 20	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 21	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	
33 22	須恵器	甕	胴	タタキ	櫛歯		灰色	精選	

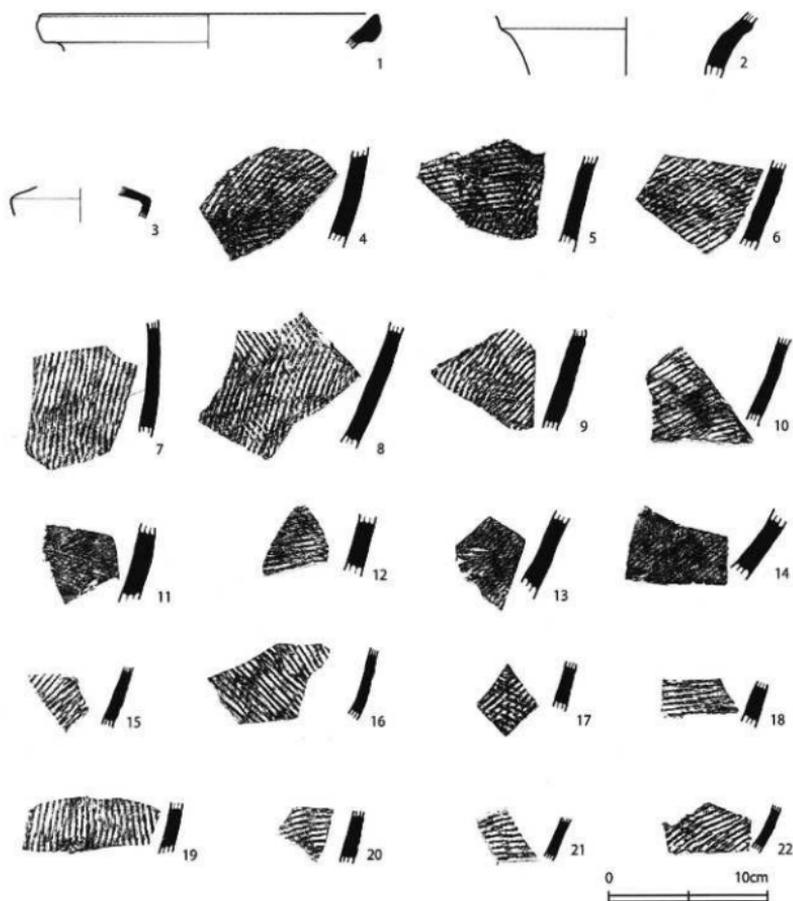


図33 溝址出土土器 (1/3)

### 3節 遺構外出土土器

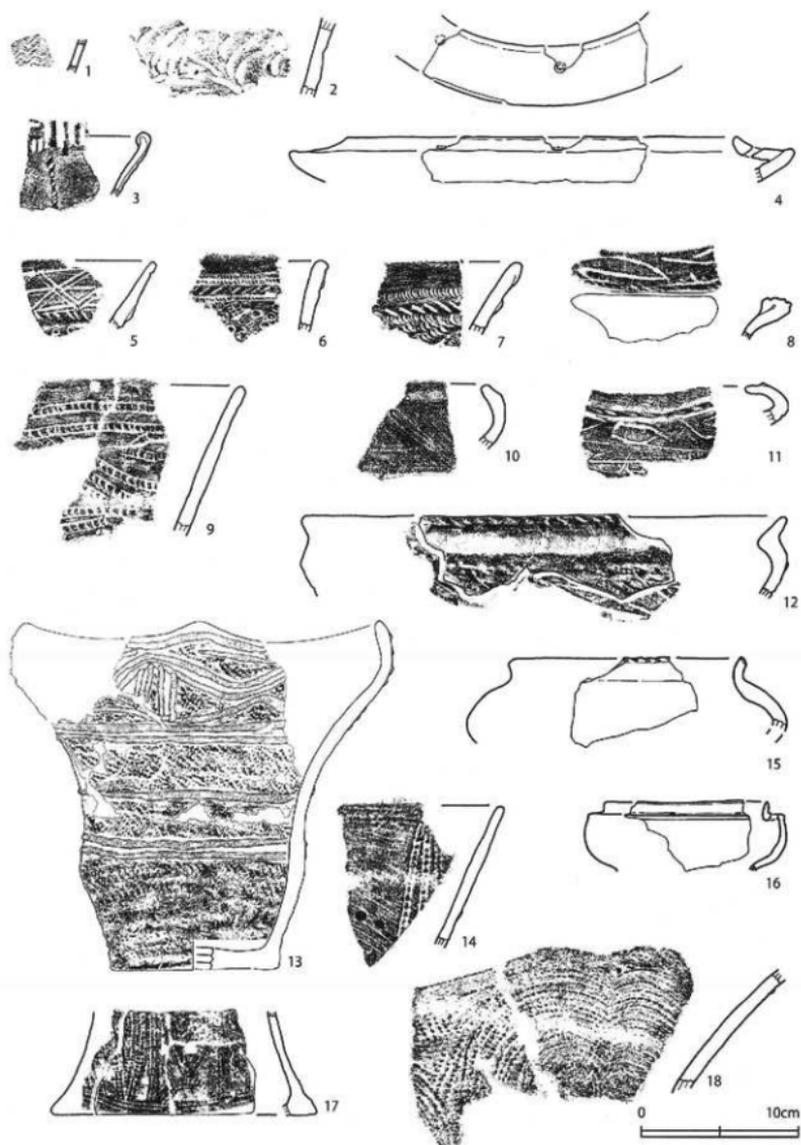


図34 遺構外出土土器① (1/3)

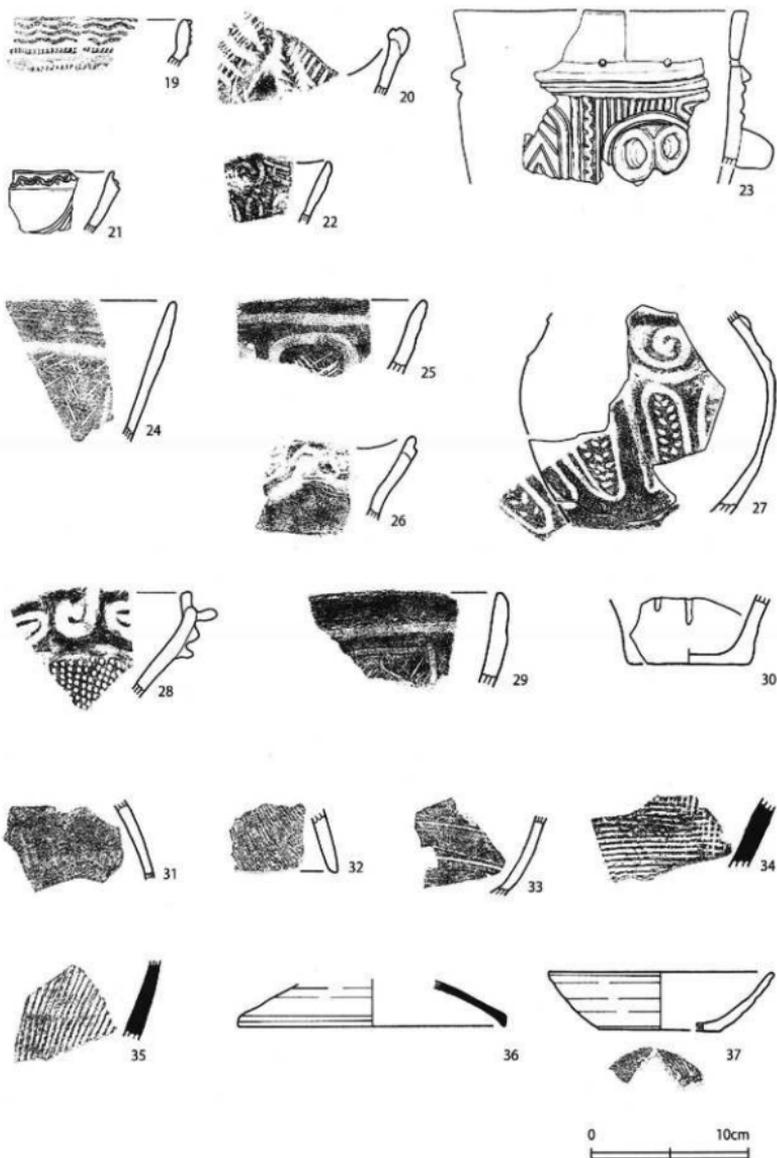


図35 遺構外出土土器② (1/3)

## 出土土器 (図 34,35)

遺構外から得られた土器は縄文早期から平安時代までのものである。縄文早期の土器はわずかであるが山形押形文 (1)、神之木台式 (3) の小破片が見られる。平安時代の土器は叩き目のある須恵器製の胴部破片である。

4～19が縄文前期の土器群で、4は「く」の字状に屈折内傾する有孔口縁部をもつ浅鉢形土器である。5～7、9、10は竹管による平行沈線文、連続爪形文を有する土器である。8、11は口縁部が内折し、密着させたもの (8)、湾曲させたもの (10) となる。8は幅を持たせた口唇部に木葉文を付し、11は口縁外周に1条の浮線文を貼付している。

12、15、16も浅鉢であるが、口縁部の形状は多様なものになっている。12は口唇に刻み目が入り、竜骨状の肩部に浮線文を1条付している。15はS字状に曲折して口縁が外反して開き、口唇に刻み目が入る。16はクランク上に屈折する口縁をもつ無文の有孔土器である。

17は典型的な諸磯b式の浮線文深鉢である。14～19は前期終末期の土器で、丸粒を貼付したもの (14)、極細の連続爪形文を密に配し、底がラッパ状に開くもの (17)、波状口縁をもち胴中位から百合の花のように大きく開く上半身に渦巻文を連結して描いたもの (18) がある。19は波状の結節浮線文を平縁口縁に配した深鉢である。

20～30は縄文中期中葉から同後半の土器群である。23は無文の口縁下に小孔を並べて開け、低い鈎状隆帯を周回させる勝坂式系ないし藤内式系の深鉢である。27～30は曾利式期で、27は胴の丸い壺形となる。

31～32は器面を刷毛状工具で調整した土師器で、32は脚部あるいは高台である。

34～36は須恵器で、36は蓋である。37は土師器坏形土器で、底部に回転糸切り痕を残す。

表 10 遺構外出土土器

図番号	種別	器種	部位	施文		色調	胎土	備考
				外面	内面			
34 1	縄文土器	深鉢	胴	押型		褐色	密	
34 2	縄文土器	深鉢	胴			黄褐色	粗	
34 3	縄文土器	深鉢	口縁			褐色	粗	
34 4	縄文土器	深鉢	口縁、胴			暗褐色	粗	有孔
34 5	縄文土器	深鉢	口縁	平行沈線、円文		暗褐色	粗	
34 6	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文、円文、浮線文		褐色	粗	
34 7	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文、円文、浮線文		褐色	粗	
34 8	縄文土器	深鉢	口縁	口唇に木葉文		褐色	粗	
34 9	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文、木葉文		褐色	粗	
34 10	縄文土器	深鉢	口縁	連続爪形文		赤褐色	密	
34 11	縄文土器	深鉢	口縁	浮線文、木葉文		褐色	密	
34 12	縄文土器	深鉢	口縁	口唇刻目		暗褐色	粗	
34 13	縄文土器	深鉢	口縁	地縄文、浮線文		褐色	粗	
34 14	縄文土器	深鉢	口縁	条痕文、連続爪形文、粒状貼付		暗褐色	密	
34 15	縄文土器	深鉢	口縁	口唇部に刻目		褐色	粗	
34 16	縄文土器	深鉢	口縁	無文、肩部段		黒褐色	粗	有孔
34 17	縄文土器	深鉢	底部	細手浮線文		褐色	密	
34 18	縄文土器	深鉢	口縁下部	密な渦巻き文		褐色	粗	
35 19	縄文土器	深鉢	口縁	波状浮線文		暗褐色	粗	
35 20	縄文土器	深鉢	口縁	波状口縁に刻目		褐色	粗	
35 21	縄文土器	深鉢	口縁	波状浮線文		褐色	粗	
35 22	縄文土器	深鉢	口縁	波状口縁、渦文		暗褐色	粗	
35 23	縄文土器	深鉢	口縁～胴	X 字文		褐色	密	有孔錫付
35 24	縄文土器	深鉢	口縁	「八」の字状文		褐色	粗	
35 25	縄文土器	深鉢	口縁	区画内に格子文		褐色	粗	
35 26	縄文土器	深鉢	口縁	波状口縁		黄褐色	粗	
35 27	縄文土器	壺形	胴	球状胴部、渦文、列点文		褐色	粗	
35 28	縄文土器	深鉢	口縁	立体的口縁突起		黄褐色	粗	
35 29	縄文土器	深鉢	口縁	区画内に条線		褐色	粗	
35 30	縄文土器	深鉢	底部	沈線文		赤褐色	粗	
35 31	須恵器	甕	胴	刷毛目		暗褐色	密	
35 32	須恵器	甕	胴	刷毛目		褐色	密	
35 33	須恵器	甕	胴	刷毛目、条線		褐色	密	
35 34	須恵器	甕	胴	格子状叩き目		黄褐色	緻密	
35 35	須恵器	甕	甕	櫛目		黄褐色	緻密	
35 36	須恵器	蓋	蓋	轆轤水挽き		灰色	緻密	
35 37	土師器	坏	体部	轆轤水挽き、糸切り		褐色	密	

## 4節 石器

今回の調査で得られた石器は77点で、すべて縄文時代のものである。うち28点が石鏃で、磨石が18点、打製石斧が11点、石皿7点、石錐が6点得られている。ただし竪穴住居址出土品は石鏃19点、磨石15点、打製石斧10点、石皿4点、石錐6点となる。

縄文前期の住居址は2軒見つかっており、特に2号住居址では石鏃が13点、石錐が5点も出土しており、中期の住居址を含めてもこの2種の石器については数的に圧倒している。11号住居址は中期の6、7、8号住居址にかなりの部分が切られて失われているので、本来存在した装備品としての石器は多くが失われ、一部が中期住居址の覆土出土品として現れていると考えられる。

中期の住居址5軒のなかで単独で存在するのは4号住居址で、石器のセットには剥片石器は含まれない。むしろ他住居址ではあまり出土していない磨製石斧が2点得られている。磨石6点、石皿3点と多数で、他の住居址には見られない特徴となっている。

表12 石器観察表1 (図36～42参照)

No.	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	形態	備考
1	1住	石鏃	2.1	1.8	0.4	0.56	黒曜石	凹基無茎	
2	1住	石鏃	2.7	1.3	0.3	0.59	黒曜石	凹基無茎	
3	1住	石鏃	2.4	1.7	0.4	0.64	黒曜石	凹基無茎	
4	1住	石鏃	2.2	2.2	0.6	1.78	黒曜石	凹基無茎	
5	1住	石鏃	2.3	1.5	0.4	0.50	黒曜石	凹基無茎	
6	1住	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.26	黒曜石	凹基無茎	
7	1住	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.61	黒曜石	凹基無茎	
8	1住	石鏃	1.8	1.7	0.4	1.02	黒曜石	平基無茎	
9	1住	石鏃	2.6	1.7	0.9	2.69	黒曜石	平基無茎	
10	2住	石鏃	2.3	1.6	0.6	2.19	黒曜石	平基無茎	
11	2住	石鏃	2.2	1.9	0.7	2.46	黒曜石	平基無茎	
12	2住	石鏃	2.3	1.7	0.4	0.84	黒曜石	凹基無茎	
13	2住	石鏃	2.2	1.8	0.6	2.27	黒曜石	平基無茎	
14	2住	石鏃	1.7	2.0	0.5	0.87	黒曜石	凹基無茎	
15	2住	石鏃	1.5	1.4	0.4	0.44	黒曜石	平基無茎	
16	2住	石鏃	2.2	1.4	0.5	1.00	黒曜石	平基無茎	
17	2住	石鏃	1.6	1.6	0.3	0.37	黒曜石	凹基無茎	
18	2住	石鏃	1.9	1.1	0.3	0.43	黒曜石	凹基無茎	
19	2住	石鏃	1.7	1.5	0.6	1.11	黒曜石	平基無茎	
20	2住	石鏃	1.6	1.6	0.3	0.37	黒曜石	凹基無茎	
21	2住	石鏃	1.5	1.2	0.4	0.69	黒曜石	平基無茎	
22	2住	石鏃	2.3	1.8	0.3	0.63	黒曜石	凹基無茎	
23	7住	石鏃	1.8	1.8	0.6	1.29	黒曜石	平基無茎	
24	7住	石鏃	1.8	1.6	0.3	1.21	黒曜石	平基無茎	
25	7住	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.40	黒曜石	凹基無茎	
26	11住	石鏃	1.8	1.5	0.5	0.66	黒曜石	凹基無茎	
27	11層	石鏃	2.3	1.5	0.4	1.37	黒曜石	凹基無茎	
28	11層	石鏃	1.3	1.7	0.3	0.41	黒曜石	凹基無茎	
29	11層	石鏃	1.5	1.3	0.4	0.45	黒曜石	凹基無茎	
30	11層	石鏃	2.8	1.5	0.5	1.95	黒曜石	凹基無茎	

表12 石器観察表2 (図36～42参照)

No.	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	形態	備考
31	II層	石鏃	2.2	1.2	0.4	1.22	黒曜石	平基無茎	
32	II層	石鏃	1.4	1.0	0.3	0.31	黒曜石	平基無茎	
33	II層	石鏃	1.6	1.7	0.3	0.44	黒曜石	凹基無茎	
34	II層	石鏃	1.2	1.4	0.3	0.53	黒曜石	凹基無茎	
35	II層	石鏃	1.3	1.4	0.4	0.84	黒曜石	凹基無茎	
36	2住	石匙	3.9	5.7	0.6	11.21	粘板岩	横型	
37	5住	石匙	9.0	9.0	1.6	120.82	粘板岩	横型	
38	11住	石匙	4.7	4.0	0.9	15.80	粘板岩	横型	
39	6住	石匙	4.0	1.3	1.0	5.27	黒曜石	縦型	
40	1住	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.68	黒曜石		
41	II層	石鏃	2.6	1.3	0.5	1.49	黒曜石		
42	7住	石鏃	3.4	1.0	0.5	2.28	黒曜石		
43	II層	石鏃	3.9	2.0	0.4	3.76	粘板岩		
44	2住	石鏃	4.5	1.2	0.4	3.21	チャート		
45	2住	石鏃	2.7	1.7	0.4	1.54	黒曜石		
46	2住	石鏃	2.3	2.1	0.4	4.59	黒曜石		
47	2住	石鏃	2.9	2.4	0.2	1.52	黒曜石		
48	2住	石鏃	2.4	2.3	0.3	2.16	黒曜石		
49	6住	石鏃	2.2	1.9	0.5	1.12	黒曜石		
50	1住	石鏃	3.5	1.7	0.4	2.59	黒曜石		
51	1住	搔器	1.7	2.2	0.4	1.49	黒曜石		
52	1住	楔形	3.4	2.0	0.6	5.66	黒曜石		
53	1住	楔形	2.6	1.5	0.3	1.63	黒曜石		
54	2住	打製石斧	10.3	4.7	2.2	137.42	結晶片岩		
55	4住	打製石斧	9.7	4.5	1.7	111.53	結晶片岩		
56	4住	打製石斧	8.6	4.7	0.9	63.36	結晶片岩		
57	5住	打製石斧	9.2	4.1	1.2	49.46	結晶片岩		
58	5住	打製石斧	9.0	5.9	1.5	94.38	結晶片岩		
59	5住	打製石斧	6.5	4.5	1.2	42.10	結晶片岩		
60	5住	打製石斧	6.7	5.0	1.2	56.69	粘板岩		
61	6住	打製石斧	8.7	4.0	1.1	54.32	結晶片岩		
62	6住	打製石斧	6.8	2.6	0.7	15.72	ホルンフェルス		
63	7住	打製石斧	12.0	5.8	0.8	76.03	ホルンフェルス		
64	8住	打製石斧	9.2	4.2	1.6	82.36	ホルンフェルス		
65	II層	打製石斧	13.7	6.5	2.1	237.72	ホルンフェルス		
66	4住	磨製石斧	14.4	6.9	3.0	600.00			
67	4住	磨製石斧	14.6	4.9	2.5	255.57	粘板岩		
68	8住	磨製石斧	9.5	4.9	3.2	193.64			
69	1住	磨石	12.0	7.1	5.3	670.00	安山岩		
70	2住	磨石	5.1	4.5	3.6	128.90	安山岩		
71	2住	磨石	10.7	7.2	4.2	520.00	花崗岩		
72	2住	磨石	11.0	7.7	3.4	440.00	安山岩		
73	4住	磨石	10.3	6.9	4.9	550.00	花崗閃緑岩		
74	4住	磨石	13.4	8.7	5.3	910.00			
75	4住	磨石	17.2	6.2	6.0	1050.00	安山岩		
76	4住	磨石	13.4	7.3	5.4	680.00			
77	4住	磨石	12.8	6.8	5.0	720.00			
78	6住	磨石	6.8	6.1	4.7	340.00	安山岩		

表 12 石器観察表 3 (図 36～42 参照)

No.	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	形態	備考
79	7 住	磨石	9.1	7.4	4.0	380.00	安山岩		
80	11 住	磨石	12.1	8.0	3.7	541.00	安山岩		
81	8 住	磨石	18.6	8.9	5.1	1600.00	閃緑岩		
82	II 層	磨石	19.3	8.7	6.7	1800.00	閃緑岩		
83	4 住	凹石	12.8	8.1	4.7	780.00	安山岩		
84	5 住	凹石	10.3	7.2	4.2	500.00	安山岩		
85	7 住	凹石	14.1	5.8	6.1	700.00	安山岩		
86	7 住	凹石	13.9	8.9	6.1	1100.00	安山岩		
87	II 層	凹石	10.8	8.9	5.4	680.00	安山岩		
88	4 住	石皿	(9.5)	(14.0)	4.3	770.00	砂岩		
89	4 住	石皿	(21.2)	(14.8)	6.0	1680.00	安山岩		
90	4 住	石皿	(15.6)	(16.1)	6.9	2120.00	安山岩		
91	7 住	石皿	(16.6)	(16.0)	7.7	3140.00	安山岩		

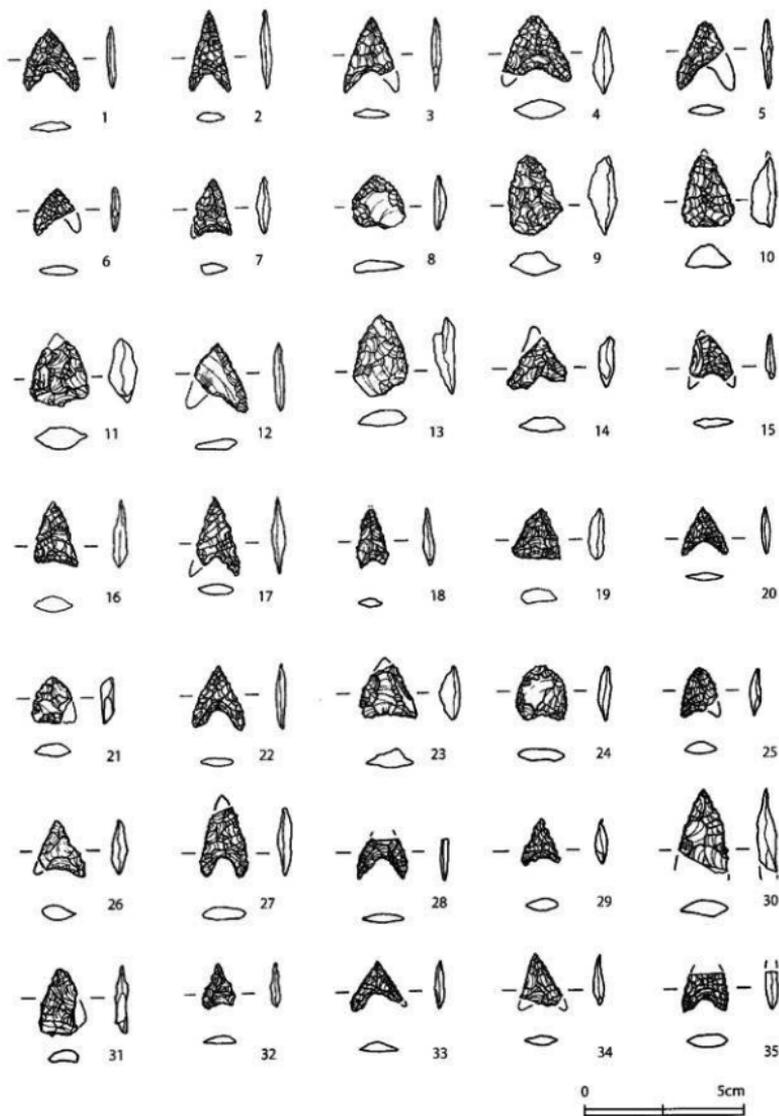


图 36 出土石器①

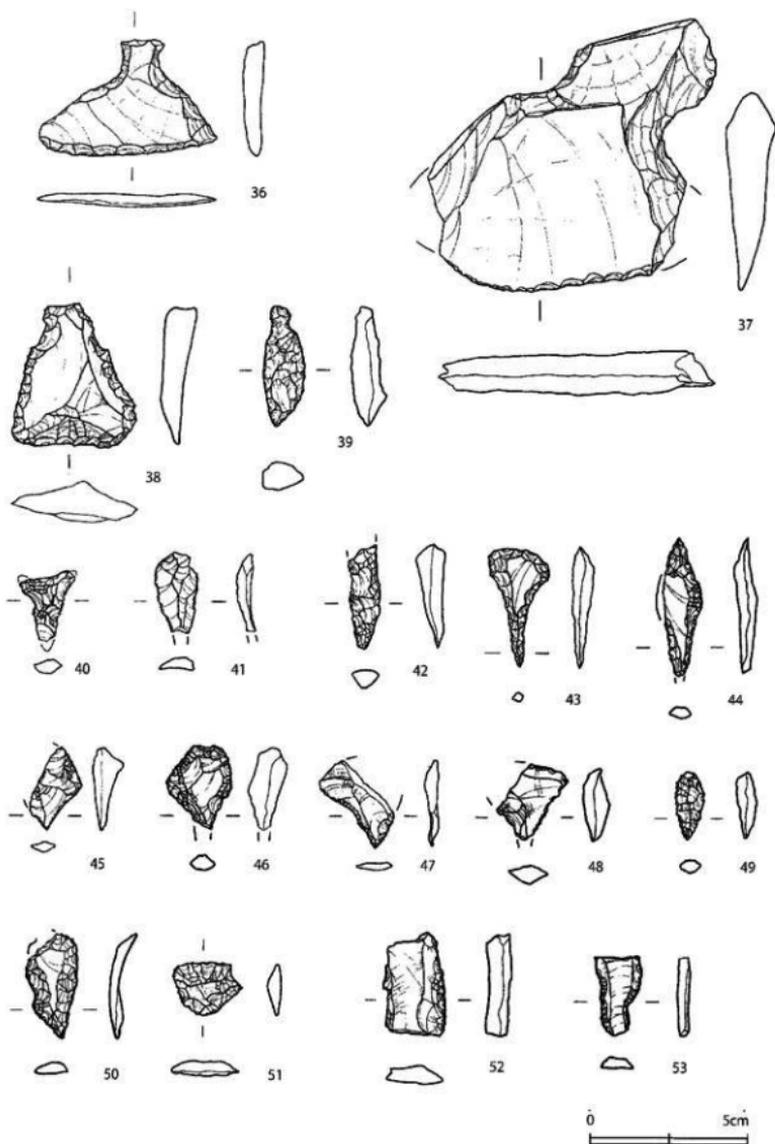


图 37 出土石器②

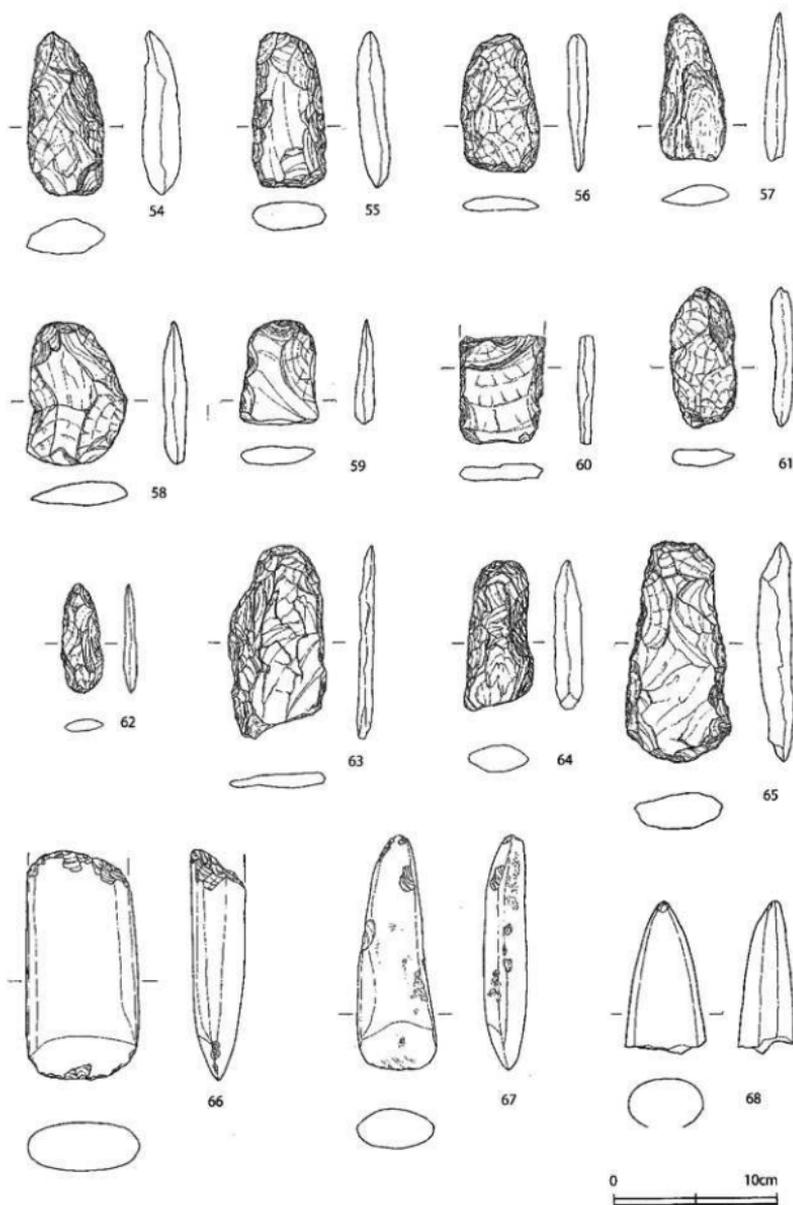


图 38 出土石器③

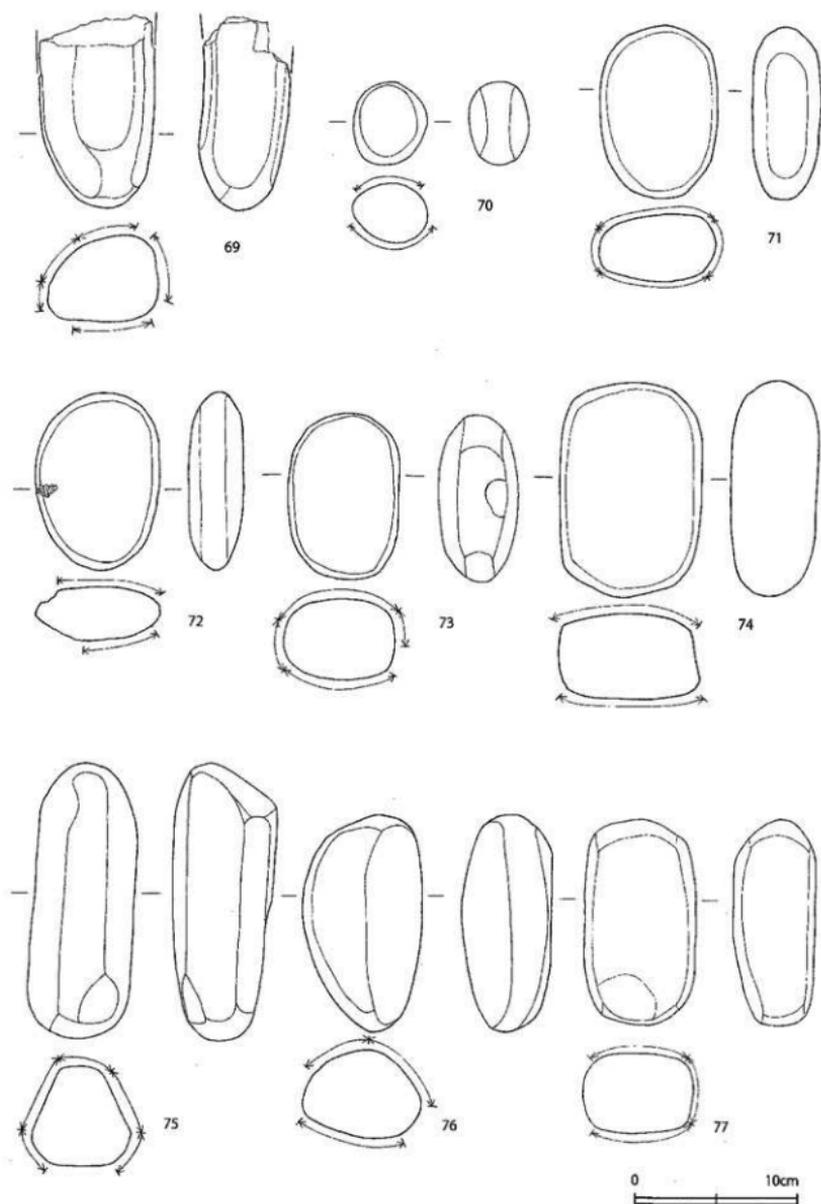


図 39 出土石器④

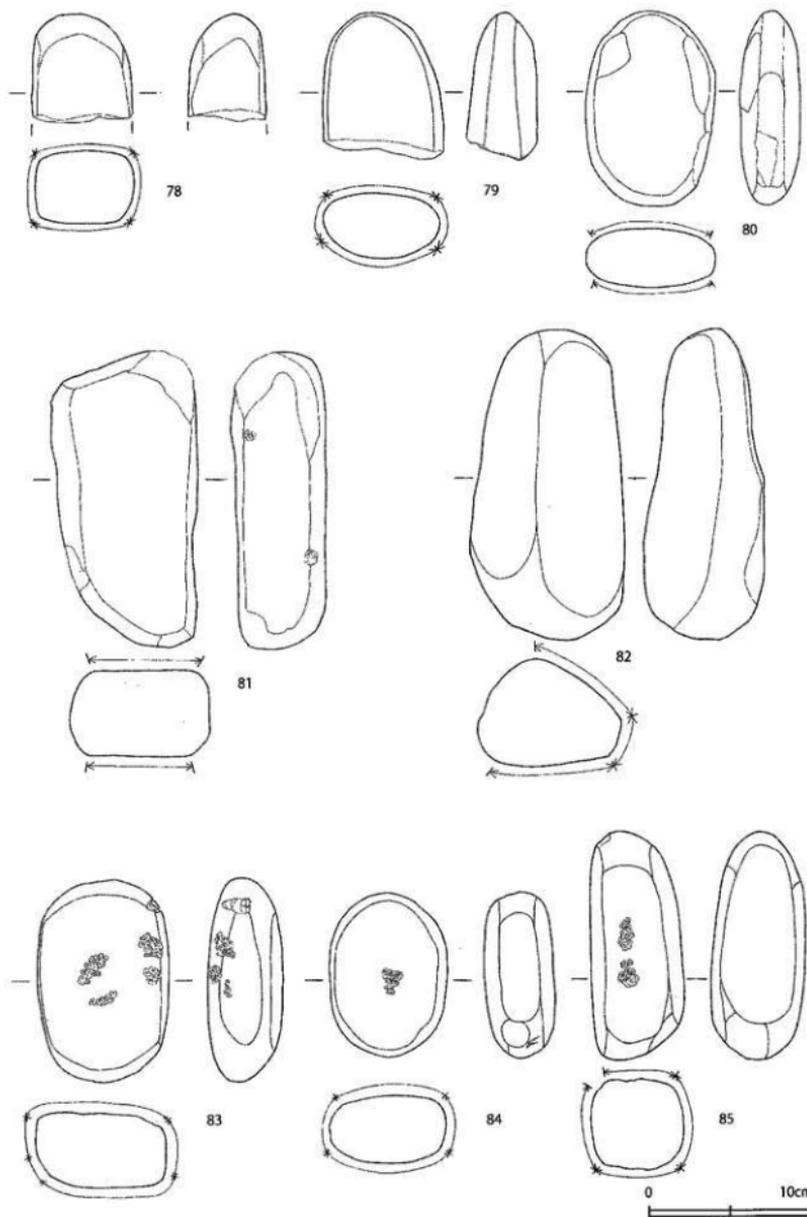
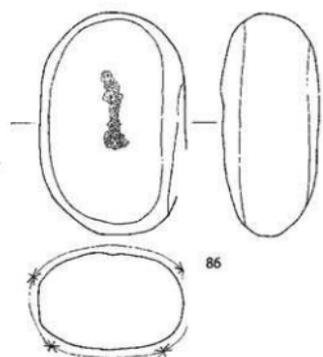
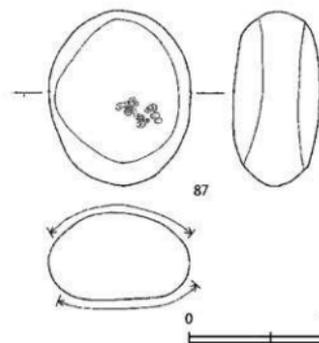


図 40 出土石器⑤

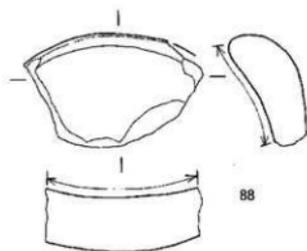


85

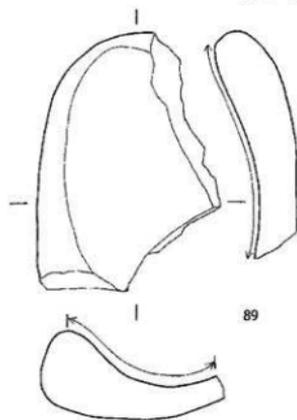


87

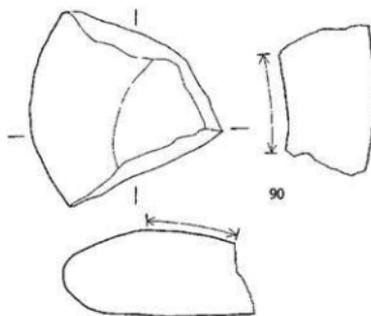
图 41 出土石器⑥



88

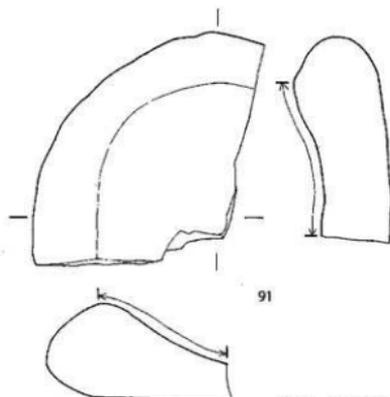


89



90

0 20cm



91

图 42 出土石器⑦

## 4章 総括

### 1節 仲原遺跡の縄文集落

仲原遺跡は、北東—南西に走る御坂山地主軸山系の黒岳(標高1,793m)を起点として西向きに派生した御坂支脈の甲府盆地側に形成された丘陵上に営まれた縄文集落である。丘陵は南西—北東に長い平坦面を成し(1章3節参照)、南西部では曾根丘陵と呼ばれる。また途中で断層(北北西—南南東)起源の浅川、竜安寺川、狐川、境川、間門川などにより寸断侵食され、齒列状に甲府盆地に突き出している。寸断された個々の丘陵は上記の断層群に直行するさらなる断層で区切られ、比較的急な崖錐堆積層からなる後背地と笛吹川沿いの沖積地に挟まれている。

縄文期の集落は丘陵鞍部に営まれ、中期中葉には面的な広がりをもつ丘陵上に定着性の強い拠点的な環状集落が形成された(例えば「一の沢遺跡」、『山梨県史』資料編1原始・古代1考古p130-133)。

一の沢遺跡と仲原遺跡は狐川扇状地の左岸と右岸にそれぞれ占地している。左岸側は標高400m前後で緩斜面地の幅が約500m以上あるが、右岸の仲原遺跡近辺の台地の幅は50mほどしかない。さらにこの台地には浅い小支谷が数本入り込んでうねった地勢をなしており、拠点的な大集落を営むには広さが足りなかったのかもしれない。

今回の調査区は道幅に応じて設定したもので幅12～13mと狭いが、中央部に縄文中期居住址が5軒も密集して発見された(うち中期後半の3軒が重複している)。本地点は平坦面が下り斜面に変換するポイントであり、わざわざ斜面地を選定し堅穴を掘っている。平坦地を避けた理由は不明であるが、土目や風などの物理的な要素のほかに集落の機能による配置で決められた可能性がある。

さて土器形式に基づきこれらの居住址の新旧を検討すると、井戸Ⅲ式期(5号住居址)→曾利Ⅱ式期(4号住居址、8号住居址)→曾利Ⅲ式期(7号住居址)→曾利Ⅴ式期(6号住居址)となる。8号住居址出土の土器を見ると曾利Ⅴ式が数多いが、曾利Ⅱ式の格子目文の鉢形土器も出土している。切り合い関係にある6号住居址に本来帰属すべき土器が8号住居址の覆上に混入したのではないかと思われ、本住居址の時期として曾利Ⅱ式であると判断した。

住居平面形は略円と楕円の2タイプがあり、いずれも明確な柱穴は持たない。炉は床面中心を外して設置されており、5号・8号住居址には方形の石囲炉、4号・6号・7号住居址には地床炉が設けられた。石囲炉は断続的に現れたのではなく、5号住居址の炉作りの伝統の上に8号住居址の炉が作られたと考えられる。

石器の組成をみると、いずれの住居からも打製石斧が見つかった。しかし5号住居址のみが4点で、他は1.2点を出したに過ぎない。また4号住居址で2点、8号住居址で1点磨製石斧の出土を見ている。しかし4号住居址では石鏃等の剥片石器がなく、磨石6点、石皿3点など、加工具が優越して出土している。この多さはやや異常であり、本住居址のかつての使用者の特殊な活動を反映したものと推測される。

以上、縄文中期中葉～後期の集落を考えた場合、土器形式が一代を反映するものと仮定すると、狭い範囲ではあるが一期に1軒ないし2軒が営まれたのではないかという推測が成り立つ。新しい世代が住居を新築する場合には、まったく同じ堅穴を利用するのではないが、前代が暮らした場所に固執して、隣接地ないし前代の堅穴と一部重複するよう意図して作られた

可能性がある。窪んだ前代の堅穴は新築用堅穴の掘削土である程度埋め立てられたであろうが、多少のこぼことなって残る先代の痕跡はむしろ好ましいものであると認識されていたのかもしれない。その心理を支えた根本の原理が血縁であったかどうかは不明であるが。

縄文中期後半の堅穴住居は調査区範囲外にもあると考えられる。恐らく同じ弧状の等高線上、南西と北東に展開していくのであろう。しかしこれらが環状に並ぶのかというと、これを肯定する証拠は得られていない。むしろ試掘した範囲で当然確認されるはずの環の一部が確認されていないからである。

縄文前期の遺構として明らかな住居址は3軒確認されている(1、2、11号住居址)。1号と2号の住居址は調査区北西端に近く、1号は半分以上が調査区外に延び、また調査した部分もかなりの部分が2号住居址により切れ失われている。1・2号とも釈迦堂Z3式土器を主体とする前期前半の楕円形プランをもつ。11号住居址は前期後半の諸磯c式期で、1・2号とは時間的空白をおいて作られたもので、関連性を伺い得ない。ただ1号と2号は同じ形式の土器をもち、2号が1号を切って作られていることから、おのおのの住居址の使用者は同世代であると想定できる。あるいは何らかの理由で、同じ人間が建て直した可能性もある。いずれにしろ1号が設営されたのち、季節を、あるいは年を変えて新たに2号が新築されたことになる。

ところで2号住居址は本市八代町の銚子原遺跡で発見された19号住居址に酷似している(『銚子原遺跡』笛吹市文化財調査報告書第4集 2006)。楕円形のプラン、全周しない周溝、ランダムな配置の屋内ピット、中央を外して設置された浅い皿状の地床坪などが共通する特徴である。残念ながらZ3式期の文化内容は十分に解明されていない。一見地味な地縄文の土器文化であるが、調査例の増加と資料の集積によって「縄文の豊かさ」が明らかになった例も多い。八ヶ岳を中心とする極めてローカル色の強い文化との指摘があるが、その個性を描き出すことがこれからの課題である。

## 2節 溝址

調査区の南東端で一部を調査した溝址は二重の周溝をもつ墳墓の可能性もある。溝内を礫で満たすという特異なもので、調査の当初は耕作者による暗渠配水施設とも考えたが、内側の溝の内部区画から浅い不定形の落ち込みと散在する礫が見つかり、須恵器裏の破片も十数点出土したことから、古代に遡る遺構である可能性が高くなった。

古代墳墓と同様のものであるのか知らないが、中世にはよく似た形態のものが見られる。長野県上田市の上沖遺跡、静岡県磐田市の一の谷中世墳墓群遺跡の例は方形の周溝に礫を数多く落とし込んでおり(『中世墓資料集成』中世墓資料集成研究会 2005)、「方形周溝による区画」、「周溝中の礫群」、「区画内の土坑ないし落ち込み」という類似点が見出せる。

本遺跡の溝址はおよそ4分の1程度を明らかにしたに過ぎず、周溝が方形となるにしても各辺が大きく膨らむようである。また内部区画の落ち込みは北西側に偏っており、中央に位置するものではない。ただ溝址の占める位置は台地脊梁上の平坦地中央、つまり周辺を睥睨するには非常に都合が良く、周到に土地を選んだ結果であると考えられる。ただ現状では性格を証する決定的な遺物はなく、再調査および類例の発見が不可欠な特殊遺構である。

1号住居址



1号住居址  
遺物出土状況



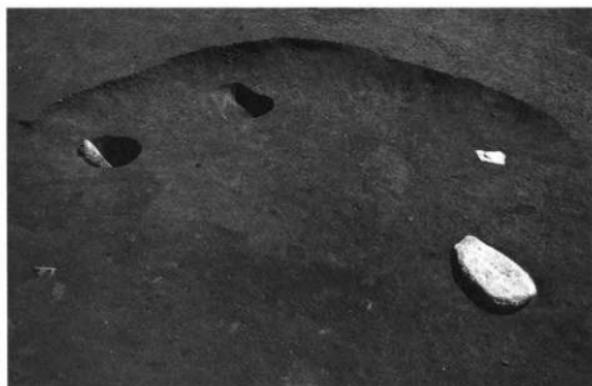
2号住居址



2号住居址  
遺物出土状況



3号住居址



4号住居址



4号住居址  
遺物出土状況



5号住居址



5号住居址炉址



5号住居址炉址



5号住居址床下土坑



5号住居址炉址横  
遺物出土状況



6号住居址



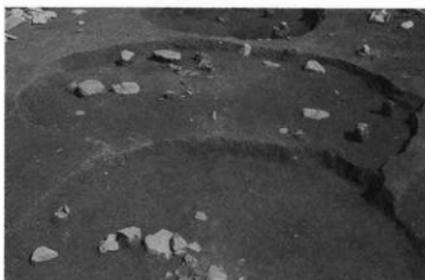
6号住居址炉址



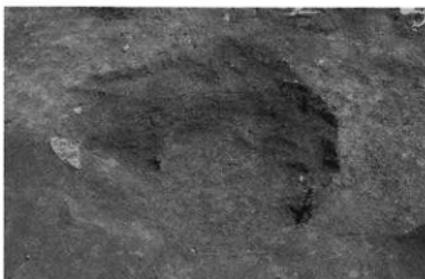
6号住居址  
遺物出土状況



7号住居址（中段）



7号住居址炉址



7号住居址  
遺物出土状況



8号住居址



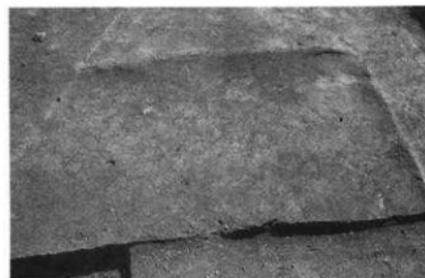
8号住居址炉址



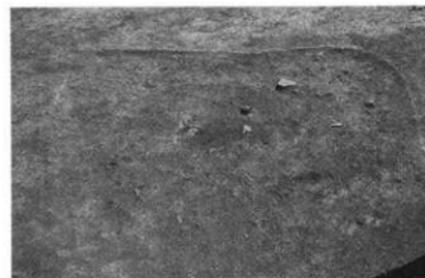
8号住居址  
遺物出土状況



9号住居址



10号住居址



11号住居址



溝址



溝址  
内側溝断面



溝址  
外側溝断面





4号住居址出土土器

6号住居址  
出土土器



7号住居址  
出土土器



山梨県笛吹市八代町

# 東小山 B,C 遺跡発掘調査報告書



# 東小山 B,C 遺跡発掘調査報告書

(平成 18 年度 高家 1 号農道改良事業)

## 〔例言〕

- ・本編は山梨県峡東農務事務所の実施した平成 18 年度農業基盤整備事業・農道改良工事に係る「東小山 B,C 遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- ・調査地点は笛吹市八代町高家 1,295 番ほかである。
- ・現地での発掘調査は平成 19 年 2 月 8 日から 3 月 30 日まで笛吹市教育委員会が実施した。発掘調査参加者は以下の通りである。  
中込 稔、藤原さつき、石倉弘子、小林正輝、大久保一吉
- ・整理作業は平成 20 年 2 月 1 日から同 15 日まで実施した。参加者は以下の通りである。  
高野眞寿美、藤原さつき、西山和子
- ・本編に係る出土品・凶面・記録類等は笛吹市教育委員会で保管している。

## 〔報告〕

### 1 調査の経緯と概要

本発掘調査は山梨県峡東農務事務所の計画する農道改良工事（八代地区高家 1 号農道）に伴うものである。平成 18 年 9 月下旬に実施した試掘調査で一部の試掘坑で溝 1 条とピット数口が確認されたため、平成 19 年 2 月から 3 月にかけて本調査を実施した。

なお高家 1 号農道の北東側が東小山 B 遺跡、南西側が東小山 C 遺跡に含まれる。

改良工事の内容は既存農道の拡幅である。拡幅の幅は県道合流部をのぞき 1m 以下の部分がほとんどである。試掘坑は拡幅部に 7 箇所設定し（北側から順に TP1、TP2～TP7）、本調査では遺構の確認された TP4～TP7 を対象に精査し記録をとった。

厚さ 20cm 前後の最上にある耕作土を取り去ると非常に固い厚さ 15～20cm の暗茶褐色土となる。遺構の検出面はこの暗茶褐色土層を剥ぎ取り、地山が少し茶色味を帯びてからとなった。

本調査は平成 19 年 2 月に開始し 3 月中旬に終了した。

### 2 遺跡の位置と環境

八代町高家は東側で御坂町八千歳に接する。東小山 B,C 遺跡は東を天川の支流竜蛇川、西をやはり天川の支流堀川で挟まれた台地上に位置する。

「高家」は「小岡」が転じた可能性があると言及する向きもあり、近隣の小字に小山、丸山などもあるなど、低位の扇状地上から見ると小高い丘陵地に見える。これは高家地域が浅川扇状地の中にあって「古扇状地堆積層」の露出部にあり、小山城周辺がその先端部に当たることからくる相貌である。

高家の浅川古扇状地堆積層はチョコレート色のローム層（降下火山灰）を載せている。このローム層は浅川最上流の大口あたりでは厚さ 8m 以上に達するという（『八代町誌』昭和 50 年 八代町）。起源は八ヶ岳や木曾御岳で、閃緑岩の小礫を含み、手で掘るには非常に硬く、水を通さないため昔は水田床として採取・利用された。

東小山 B 遺跡、同 C 遺跡は上述した二川に挟まれた台地の縁辺よりやや台地内側に寄った



図1 東小山B,C遺跡位置図 (1:25,000)

①東小山B遺跡 ②東小山C遺跡

斜面地上に位置する。東小山B遺跡指定地は東小山A遺跡を介して笛吹市指定史跡「小山城」に連なり、北西―東南に細長い東小山C遺跡指定地は北部を小山城跡に接している。

厚さ20cmほどの耕作土（Ⅰ層）の下は暗灰褐色土層（Ⅱ層）となり、さらにその下は中礫～小礫を混入した茶褐色ローム層（Ⅲ層）となる。Ⅱ層下部は鉄やマンガンの集積部が帯状に観察される。Ⅲ層は真土（まつち）とも言われ、人力で掘削するには労の多い硬い土であるが、上面が今回の調査における遺構確認面である。

#### ■ 1999～2001（平成11～13）年度の調査

金川曾根広域農道の堀川渡川地点から北へ伸び、小山城東側を通り御坂町の八千歳交差点に連結する農道を整備する際に、四反田、東小山B、東小山Cの3遺跡が調査された（『四反田遺跡 東小山B遺跡 東小山C遺跡』2003 八代町埋蔵文化財調査報告書第16集）。

これらのうち今回の調査地点にもっとも近接しているのが東小山B遺跡（本記述では「H12地区」と呼称する）の南端部分である。今回の特にTP7は文字通り調査地点同士が連結している。H12地区は東西幅12m弱、南北長約150mの長大な調査区をもち、竪六住居址6軒、

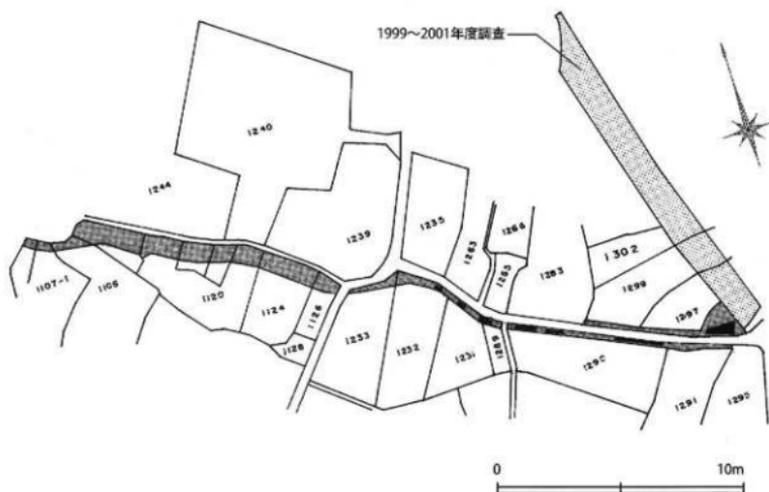


図2 東小山B,C遺跡調査区 (1:2,000) ※ 黒色が調査トレンチ

掘立柱建物跡4棟、土坑77基、溝跡18条、ピット500口以上が調査されている。主な時代は奈良～平安であった。住居址は奈良時代が3軒、平安時代が3軒で、掘立柱建物跡は平安時代1棟、他3棟は時期不明であった。溝跡では平安3条、奈良1条、残りは時期不明であった。

住居址から出土している時代判定資料となる土器は数少ないが、平安時代の3軒については3号が4・6号より古手であり、50～100年ほどの開きがある。

掘立柱建物跡のうち1号が平安時代である。1号と2号は総柱建物で、棟方向を直行させている。3号は2間×3間、4号は2間×2間ないし2間×3間で建て方は同じで、1号・2号と同様に互いに軸を意識して造られたと考えられる。さらに1号～4号すべての掘立柱建物は南北、東西の軸を意識していることから時代的に大差ないもの、同時存在していた可能性は大きいと考えられる。

溝については時期の判明しているものは一部に過ぎないが、居住施設ないし生活関連施設にともなうものと考えるのが至当であろう。

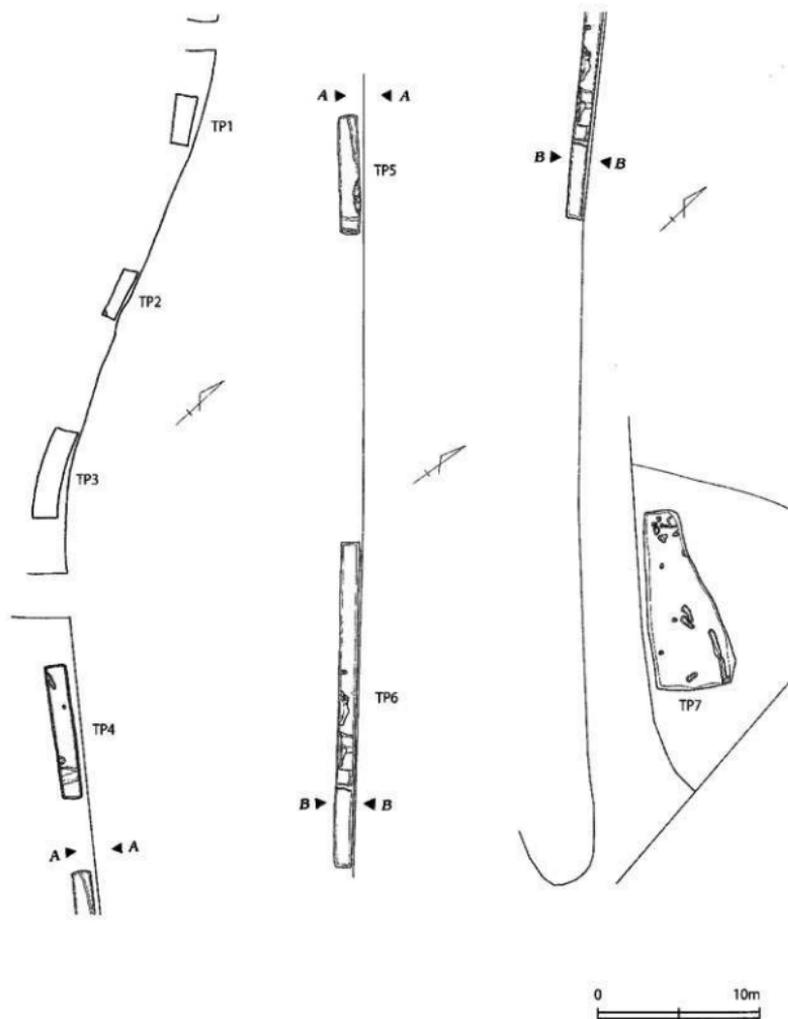


图3 調査区配置図 (1/300)

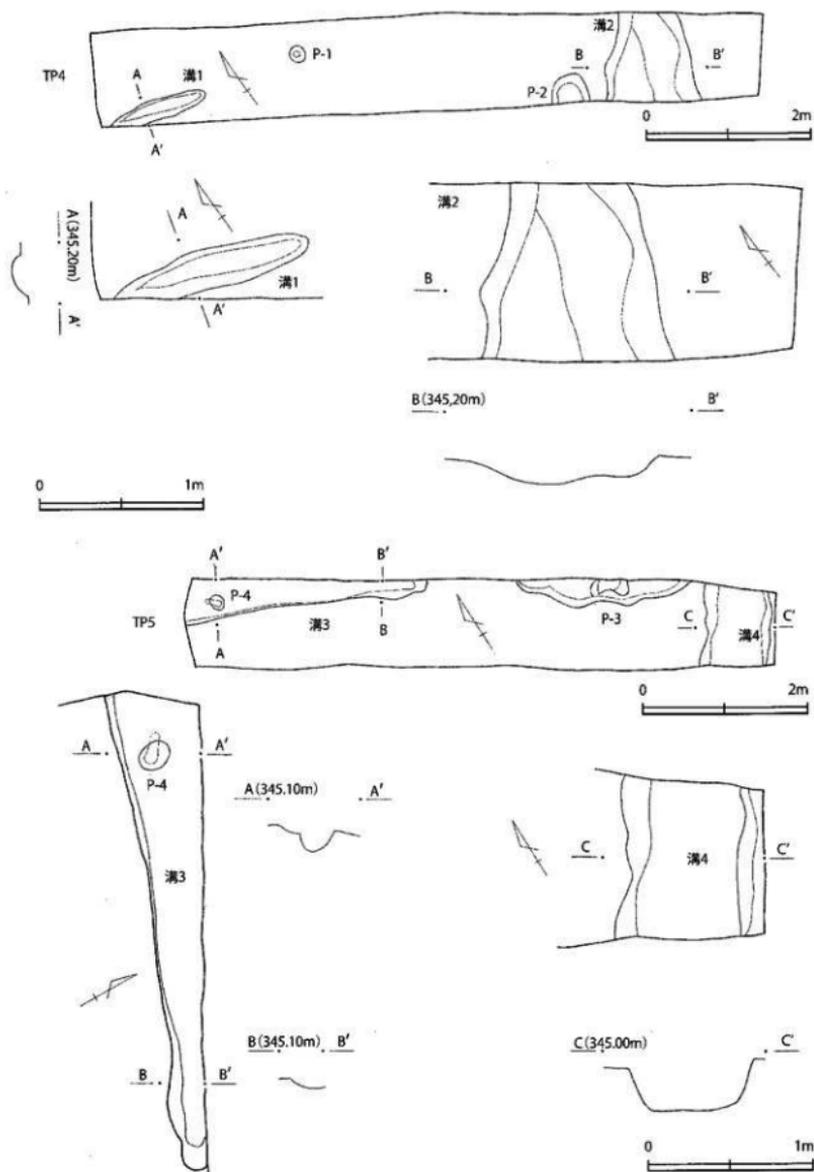


図4 TP4、TP5

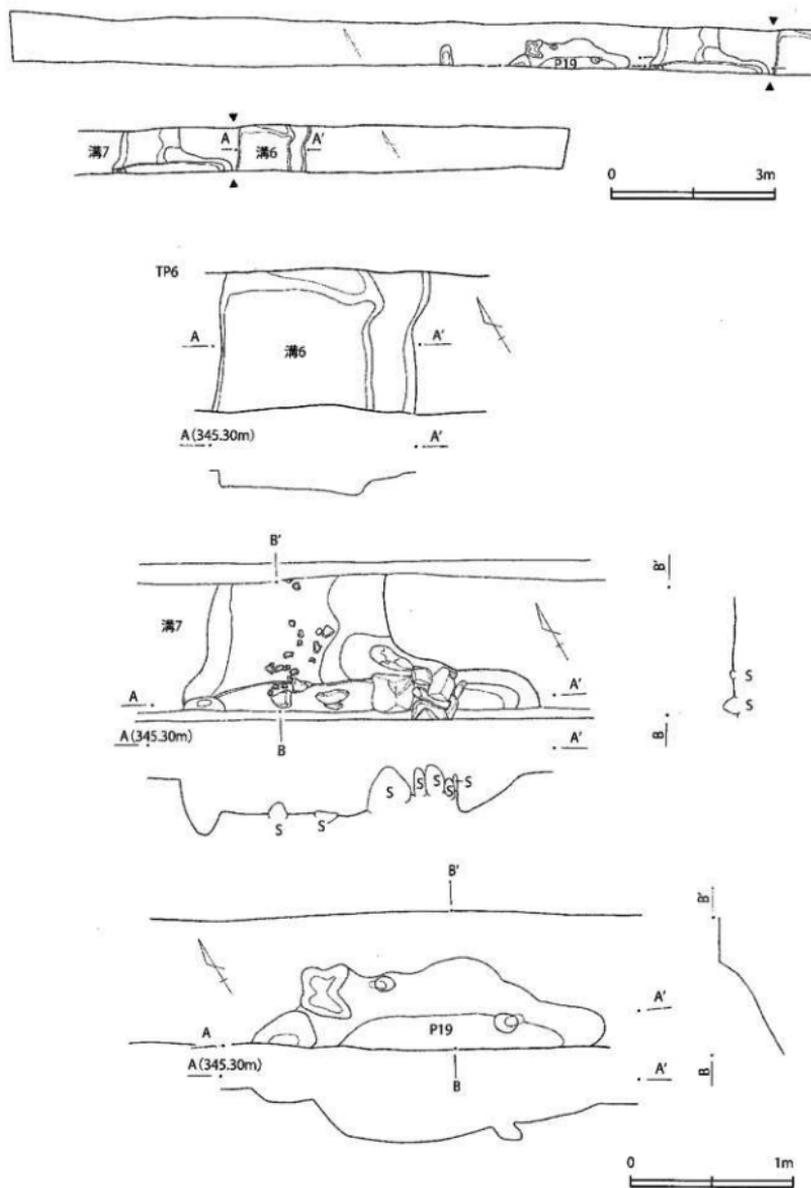


図5 TP6

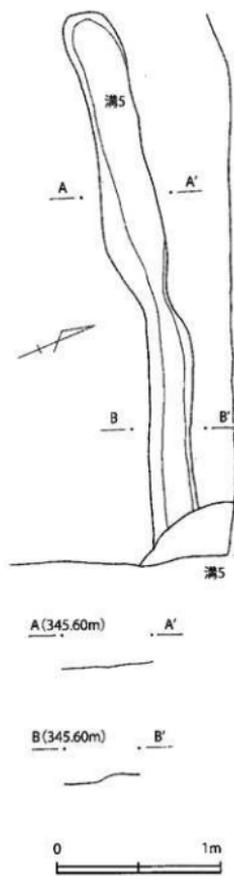
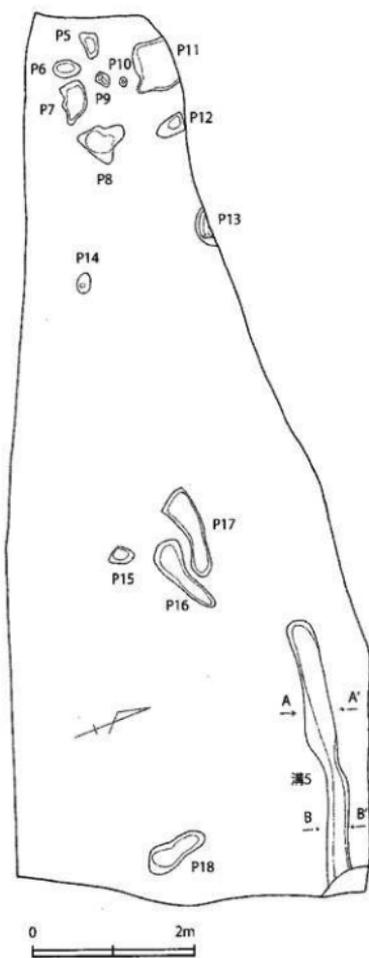


図6 TP7

### 3 遺構と遺物

遺構の検出された試掘坑を拡張して精査を行い、記録をとった。

#### ■ TP4

西寄り2つ試掘坑で溝状の落込みが見つかったため、その間を連結し調査坑TP1と呼称した。調査坑の長さは8.4mで、幅は1.2mである。

西側では幅25cm、長さ120cmの船底形の浅い溝状遺構が検出された（深さ10cm）。東側の溝状遺構は調査坑に直交し、幅75～110cmで、浅い（深さ15cm）。溝底は平坦である。

ピットが2口見つかっている。西側のピットは径25cmの円形で、深さは20cm。東側のピットは東側の溝状遺構に隣接している。短辺約50cm、長辺推定60～70cmの楕円形になると思われる。深さは約20cm。

#### ■ TP5

TP4の南側4.5m離れて位置する。長さは7.2mで、幅は1.1mである。

西寄りに幅60cm以上、長さ300cm以上の東西に伸びる溝状遺構（深さ20cm）が見つかっている。また調査坑東端で調査坑に直交する幅80cmの浅い溝状遺構が見つかった（深さ35cm）。この溝状遺構のすぐ西側には深さ10cmほどの弦月状の落込みも見つかっているが、全体の形状は不明である。

#### ■ TP6

TP5の東南側20mほど離れて位置する。長さ20mで、幅1mである。

ほぼ中央に不整な円の一部のような落込みが見つかった。深さは35～40cmで、壁面にいくつ小ピットが設けられているが規則性はない。

上記の不整円状の落込みの東に接して調査坑に直交する溝状遺構が検出されている。この溝は当初幅1mほどで、それと直交する溝状遺構が噛み、その中に礫や土器が廃棄されているように観察されたが、結局は東縁が幅約100cm、西側が幅約220cmの2重構造をもつ溝状遺構であることが分かった。西側の溝状遺構は北端でさらに15～20cmほど深くなっている。

このほか調査坑ほぼ中央、不整円状の遺構の西に隣接して溝の端部らしき遺構が見つまっている。長さ25cm、幅205cmで、深さ10cmほどである。

#### ■ TP7

TP7は上述H11～13年度調査区への合流部に設けたものである。隅切りで計画幅が広くなるため調査坑も広くとり、長さ11m、最大幅4.3mのくさび形の区域である。発見された遺構は西端でピット群1群、東端で溝状遺構1条、他に土坑・ピット等4口である。

ピット群：調査坑の西端に10口のピットをもつもので、東側のやや離れた位置ある2口を除くと各ピットは狭い範囲に凝集している。各ピットの開口部の形状と大きさはまちまちで、深さも一定しない。ピットの配列は調査区外に続く様相を見せており、何らかの施設の跡であった可能性がある。

溝状遺構：東端の溝状遺構は幅25cm、長さ3m以上で、深さ5cmである。

土坑・ピット 長軸方向不定の長さ約100cm、幅30cmの長楕円状の土坑が3口、径25cmの略円形ピットが1口調査坑中央から東辺にかけて見つっている。性格は不明である。

#### ■遺物

溝状遺構、ピット群、土坑に伴う遺物は皆無であったが、調査区掘削土中で出土した土器は図7のとおりである。縄文時代の打製石斧1点を除くとすべて奈良～平安時代の土器である。図1～4は土師器坏口縁部、5～10は坏底部、11～12は高台付き甕底部、14は皿口縁部である。15は陶器鉢の口縁部である。他には大型の須恵器甕の胴部破片と底部破片および須恵器坏の蓋などがある。

#### 4 まとめ

溝状遺構、ピット群ともに年代を決定する遺物はないが、得られた土器はおおむね遺構に対応していると考えられる。また既調査のH11～13年度調査地区（『四反田遺跡 東小山B遺跡 東小山C遺跡』2003 八代町埋蔵文化財調査報告書第16集）の所見と合わせて、今回明らかになった遺構の年代は9世紀前半から10世紀前半にかけて営まれたものと考えられる。溝状遺構の方向を見ると、上記調査地点の方向性と一致し、コンターラインを意識していると考えられ、今回調査分も一体の遺跡であることは明らかである。

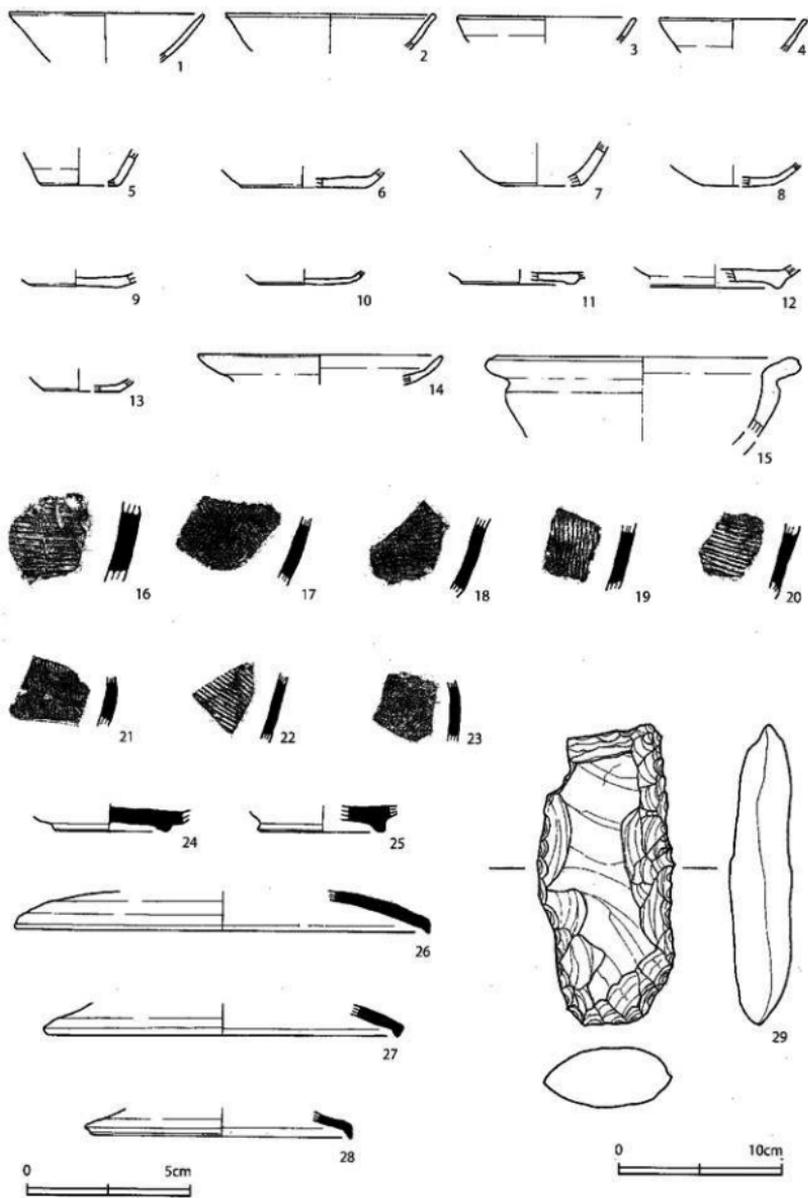


図7 出土遺物 (1/3)



TP4



TP4 溝状遺構とピット



TP5



TP6



TP6 溝状遺構



TP7



TP7 東半

山梨県笛吹市春日居町

# 上町田遺跡発掘調査報告書



# 上町田遺跡発掘調査報告書

(平成 18 年度 農業基盤整備事業)

## 〔例言〕

- ・本編は山梨県峡東農務事務所の実施した平成 18 年度農業基盤整備事業・農道改良工事に係る「上町田遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- ・調査地点は笛吹市春日居町鎮目 1,177 番である。
- ・現地での発掘調査は平成 19 年 2 月 8 日から 3 月 30 日まで笛吹市教育委員会が実施した。
- ・発掘調査参加者は以下の通りである。  
中込 楸、藤原さつき、石倉弘子、小林正輝、大久保一吉
- ・整理作業参加者は以下の通りである。  
西山和子、渡辺利江
- ・本編に係る出土品・函面・記録類等は笛吹市教育委員会で保管している。

## 〔報告〕

### 1 調査の経緯と概要

本発掘調査は山梨県峡東農務事務所の計画する農道改良工事（春日居第 1 地区農道第 7 号）に伴うものである。平成 18 年 10 月末から 11 月初めに実施した試掘調査で一部の試掘坑から土器を伴う落ち込みが確認されたため、平成 19 年 2 月から 3 月にかけて本調査を実施した。

改良工事は既存の農道の拡幅であり、2 × 1m の試掘坑を拡幅部に 3 箇所設定し（南東側から順に TP1、TP2、TP3）人力掘削した。TP2 から直線的な輪郭の一部を持つ落ち込みが確認され、掘削土中に平安時代の土師器破片が散見されたことから、TP1 と TP2 を連結する形で本調査を実施することとした。

本調査は平成 19 年 2 月初旬に始めたが、諸般の事情で他の複数の遺跡の調査も同時に進行させたため、人員や器材の配置の関係で現地へ入るのは飛び飛びになった。最終的に完了したのは 3 月中旬であった。

### 2 遺跡の位置と環境

春日居町北西部および石和町北部を画す兜山や大蔵経寺山は関東山地前哨の山塊を構成している。特徴は南側斜面が非常に急で、笛吹川とその支流群が形成した沖積低地に一気に下る相貌を呈している。

上町田遺跡は、春日居町鎮目の山塊裾部とそのやや南側を山塊に沿って南西に流れる平等川の間位置する天神塚古墳を取り囲むように位置する。本書で報告する地点は天神塚古墳の北東側約 10m を通る農道の西側拡幅部である。東側も拡幅されるがその幅 50cm 程度と狭いため試掘はしなかった。

遺跡内では過去に多くの遺物が採集されており、弥生時代末～古墳初頭、古墳時代中期、同後期、奈良～平安時代までの土師器、須恵器からなる。

周辺の遺跡としては、上町田遺跡の南西約 800m には保雲寺橋遺跡（古墳、平安時代）、東約 300m には市道遺跡（平安時代）がある。特筆すべきは小規模な円墳の多さである。天神塚古

墳の近隣の低地には散見される程度だが、西側の日影沢沿いには 30 弱がいくつかの支群を構成するように分布している。このうち標高の高い位置にあるものは積石塚古墳がほとんどで、低地近くにあるものは土盛古墳が主体を成している。

昭和 50(1975)年に農道拡張工事に伴う緊急調査で「天神のこし古墳」が調査され、大刀 4 振、刀子 5 振、轡 1 組、金環等 5 個、鉄鏝 35 本などが出土している(『天神のこし古墳』1976 春日居町教育委員会)。

昭和 53 年に林道開発に先立ち「笹原塚 3 号墳」が調査された。横穴式石室をもつ積石古墳であったが天井や壁が大きく破壊された状態であったが、副葬された鉄鏝 7 本が発見されている(『笹原塚 3 号墳』1979 春日居町教育委員会)。

天神塚古墳の墳丘は段状に削られているものの盛土と石室は割りとはよく残されている。平成 13 年、県教育委員会の手により調査され、直径 35m ほどの円墳で、春日居古墳群中最大のものである。石室の床、側壁、奥壁と天井石 2 枚が残り、副葬品と思われる 6 世紀後半の提瓶が春日居郷土館に保管されている。本古墳の北約 100m、また南西約百数十 m にはそれぞれ鎌田塚古墳、田島稲荷塚古墳が存在した。横穴式石室をもつ土盛りの小規模な円墳と考えられるが、現在はまったく不明である(『春日居町誌』1988 春日居町)。



図 1 上町田遺跡調査地点位置図 (S=1:25,000)

### 3 遺構と遺物

幅 1.6m、長さ 20m の区画を調査した。前述したように TP1 と TP2 の 2 つの試掘坑を連結し、さらに TP2 の西側を延長した。調査坑南東寄りに幅 4.5m の方形竪穴状遺構、中位にピット群、北西寄りに方形竪穴状遺構とこれと重複する不整形の遺構状の掘り込みが確認された。

#### ■竪穴状遺構

幅 1.6m という限られた調査区にあり、竪穴状遺構は 3 基を確認した。南東側から 1 号、2 号、3 号と呼称する。

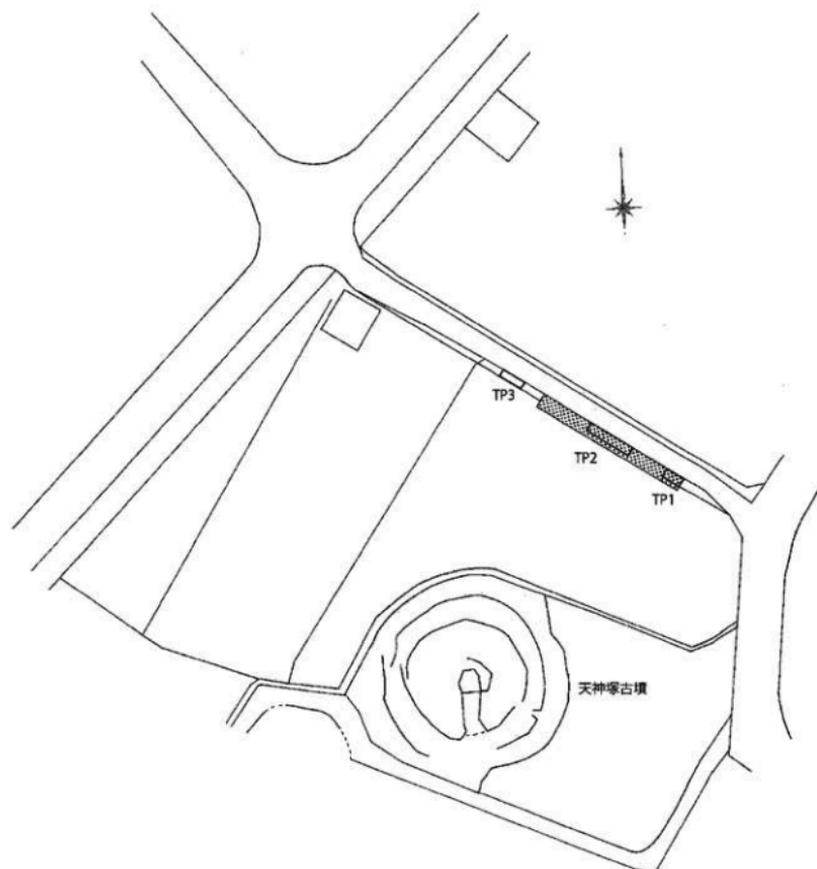


図2 上町田遺跡調査区設定図 (1:600)

1号のプランは推定である。竪穴状遺構としたが、溝になる可能性もある。確認された両壁の立ち上がりもしっかりして均等な傾斜を呈している。深さは25cmで、底は平坦である。

2号は2つの隅と3.7mの辺長が確認できた。深さは50cmで、壁は垂直に近く、底は平坦である。しっかり整った掘り込みである。

3号は不整形とも見られ、2号に切られている。差し渡し4m前後。深さは25cmで、底は平坦であるが、辺の北寄りが弧状に乱れている。

2号・3号の西にも同様の遺構が時期を異にして存在した可能性があるが、2号、3号および中間部は同一の遺構の部分であった可能性もある。



図3 調査区域図

#### ■ピット群

竪穴状遺構1,2号の間に5ないし6口のピットが検出された。大きさは一定しておらず形も不ぞろいであり、ピット間の距離もまちまちである。深さは20cmである。狭い範囲の確認であるため、明確なことは言えない。

#### ■遺物

竪穴状遺構ないしピット群に伴う遺物は皆無であるが、図5の5が1号竪穴状遺構の床面上10cmの覆土中より出土している。他はすべて耕作土中の出土である。

#### 4 まとめ

竪穴状遺構は施設であるのか、土取りの結果であるのか不明である。天神塚古墳造営に伴う土取りによって生じた可能性もある。

竪穴状遺構、ピット群ともに年代を決定する遺物はない。1号竪穴状遺構内覆土中発見された図5の5も、攪拌されて埋土中に混入された可能性は否定できない。3,4,6は同時代の所産で4世紀後半から5世紀初めにかけてのものであるが、他の土器はおおむね平安時代11世紀前半の所産である。

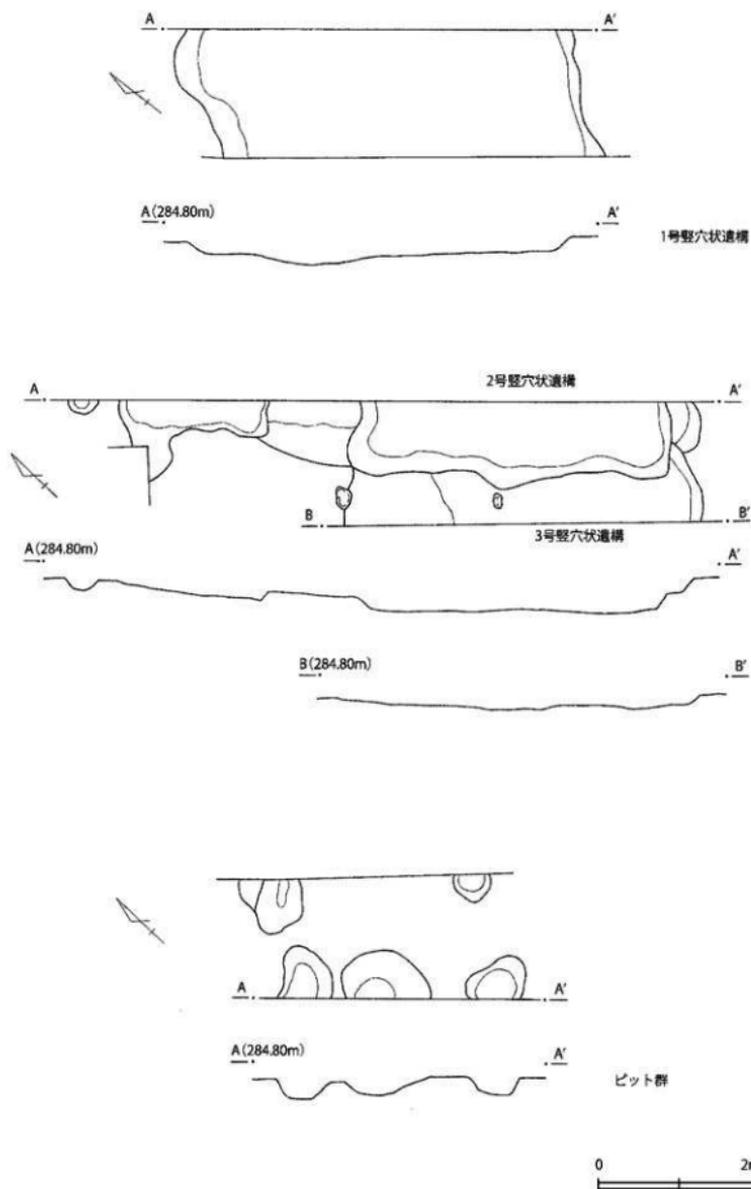


図4 遺構平面図

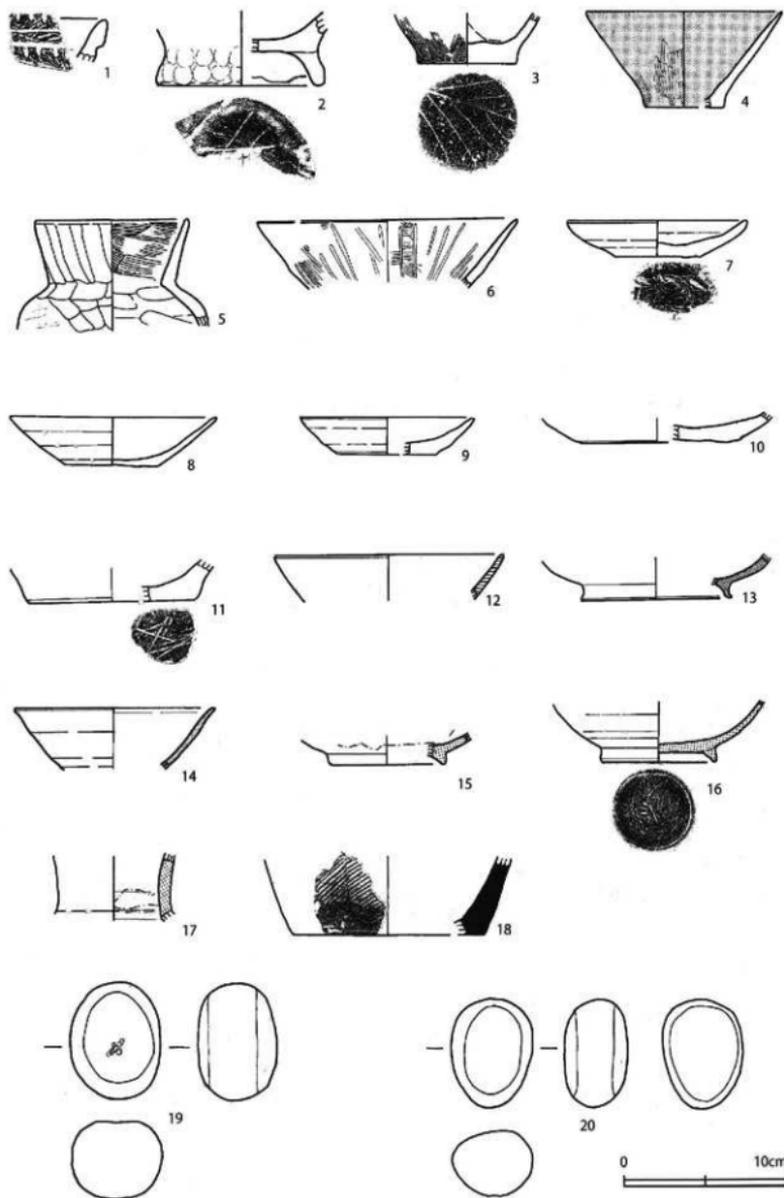


図5 出土遺物 (1/3)



調査区全景（北より）



1号竪穴状遺構



1号竪穴状遺構 出土遺物



ピット群



2号竪穴状遺構

山梨県笛吹市一宮町

# 山道添・物見塚遺跡発掘調査報告書



# 山道添遺跡・物見塚遺跡発掘調査報告書

(平成 19 年度 農業基盤整備事業)

## 〔例言〕

- ・本編は山梨県峡東農務事務所の実施した平成 19 年度農道整備事業に係る「山道添遺跡」「物見塚遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- ・調査地点は笛吹市一宮町南野呂 950-1 番ほかである。
- ・現地での発掘調査は平成 20 年 3 月 3 日から 3 月 31 日まで笛吹市教育委員会が実施した。
- ・本編に係る出土品・図面・記録類等は笛吹市教育委員会で保管している。

## 〔報告〕

### 1 調査の経緯と概要

本発掘調査は山梨県峡東農務事務所の計画する農道整備事業に伴うものである。平成 19 年 9 月下旬から 10 月中旬にかけて実施した試掘調査で一部の試掘坑から縄文土器を伴う落ち込みが確認されたため、平成 20 年 2 月から 3 月にかけて拡張調査を実施した。

農道の整備される予定地に幅 1m で長短各種の試掘坑を設定し人力掘削した。物見塚遺跡では縄文時代後期加曾利 B 式の土器器片が散見されたことから、翌年度 200㎡程度の広さを本調査することとした（『物見塚遺跡』笛吹市文化財調査報告書第 12 集 2010）。

一方、山道添遺跡と物見塚遺跡は千米寺・石古墳群の指定地と重複し、特に舌状台地脊梁部を中心に古墳時代後期～終末期の小型円墳群を数多く配しているところから、試掘坑を拡張して調査を実施することとした。また物見塚遺跡については縄文時代後期の遺構が台地北東の縁辺部から見つかっているところから、この縁辺部の下位部への遺構の拡散を確かめるため、先に入れた試掘坑の間を繋ぐ形で調査区を拡張することとした。

拡張調査は平成 20 年 2 月初旬に開始し 3 月中旬に完了した。

### 2 遺跡の位置と環境

山道添遺跡および物見塚遺跡は笛吹市の一宮町千米寺地内にあり、甲州市勝沼に接する笛吹市最東端の地域にある。山道添遺跡の北東側の境界線は北西－東南にほぼ一直線に伸びており、物見塚遺跡の南西側の境界線ともなっている。

土壌の発達はずぶる悪い。扇状地の形成は断層谷に沿って直線的に流れる大松沢が押し出した土石流の堆積によるもので、母材は風化またマサ化した花崗閃緑岩碎屑物である。土石流がたびたび発生し、千米寺や勝沼町藤井の集落を襲ったようで、明治 40 年の水害では死者数人を出している。

2 つの遺跡は標高 480m 前後にあり、見事な京戸川の扇状地地形の扇頂から北西へ 500m ほど離れた傾斜地を占め、2 遺跡の境界線には小さな谷が入る。山道添遺跡はこの谷と京戸川に挟まれた台地の脊梁部の北東側で、南西側は鍬塚 A 遺跡となっている。鍬塚 A 遺跡は縄文時代遺物の散布地として登録されているが、千米寺・石古墳群の中核部と言ってもよく、小規模な円墳が高い密度で分布する。開墾ですでに削られ滅失したものも多いが、現在でも横六式石室が開口しているものがいくつか見られる。

上記の小さな谷を挟んで反対側（北東側）が物見塚遺跡である。縄文時代・奈良時代・平安時代の遺物散布地として知られており、全国的に名の知られた釈迦堂遺跡群の一部を構成している。また本台地上にも古墳時代後期の小円墳がいくつか残されており、千米寺・石古墳群の一面を成している。

物見塚遺跡の北東側斜面は傾動地塊の背面に当たり、南西側に比べて傾斜が緩く狭いながら降下火山灰の堆積が見られる。縄文時代の遺構はこの降下火山灰層を掘り込んで作られている。

周辺の遺跡としては、山道添遺跡のすぐ西側に鎧塚A遺跡（古墳・奈良・平安時代遺物散布地）、その西側に鎧塚B遺跡（縄文時代遺物散布地）、釈迦堂PAの東に接して塚越遺跡（縄文・古墳・中世の集落・墳墓跡）、塚越遺跡の北東側、中央自動車道の横に三口神平遺跡（縄文・平安時代集落跡）、その東側に接して未新田遺跡（縄文時代遺物散布地）がある。中央自動車道釈迦堂PAを挟んだ西側には釈迦堂遺跡があり、中央自動車道に沿って南西に少し進むと若宮遺跡（縄文・古墳・平安・中世の遺物散布地）がある。

1980.2～1981.11（昭和55年2月～56年8月） 釈迦堂遺跡群の調査（山梨県教育委員会）

釈迦堂遺跡群には塚越北遺跡、三口神平遺跡、釈迦堂遺跡が含まれる。中央自動車道建設に先立って調査された縄文時代中期の大集落遺跡で、同時に数多くの土偶が出土したことで全国的に知られるようになった。

遺跡は衰盛あるが、旧石器時代から平安時代まで連続と営まれ、大きな成果が上がった。縄文時代草創期、縄文時代早期末（神ノ木台式）、縄文時代前期（下吉井式・黒浜式並行〔釈迦堂Z3式〕）、縄文時代中期（五領ヶ台式・貉沢式・新道式・藤内式期・井戸尻式・曾利式）、縄文時代後期（称名寺式・堀之内式）、古墳時代後期、奈良時代、平安時代の遺構・遺物が発見されている。

2008.9～2008.10（成20年9月～10月）物見塚遺跡の調査1（笛吹市教育委員会）

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業釈迦堂地区施工区の工事に先立ち実施された。縄文時代中期・後期の遺跡で、円形竪穴状遺構、土坑、ピット群が調査された（『物見塚遺跡』2010 笛吹市文化財調査報告書第12集）。

2008.12～2009.2（平成20年12月～21年2月）物見塚遺跡の調査2（山梨文化財研究所）

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業釈迦堂地区施工区の工事に先立ち実施された。笛吹市教育委員会で調査した地区のさらに東側にある。間に甲州市勝沼藤井を挟み、字名は南野呂となる。

旧跡時代、縄文時代中期、竪穴状遺構、土坑、溝などが調査された（『物見塚遺跡（2次）』2010 笛吹市文化財調査報告書第15集）。

### 3 遺構と遺物

遺構は検出されなかった。遺物は表層より微細な縄文土器片が数点得られたのみである。

### 4 まとめ

山道添遺跡調査地点は段畑造出しの際の切り土により形成された崖の下、物見塚遺跡調査は北西に下降する尾根頂部にあり、古墳時代後期の群集墳の存在が予想されたが、土地の改造が甚だしく、遺構はまったく見出せなかった。

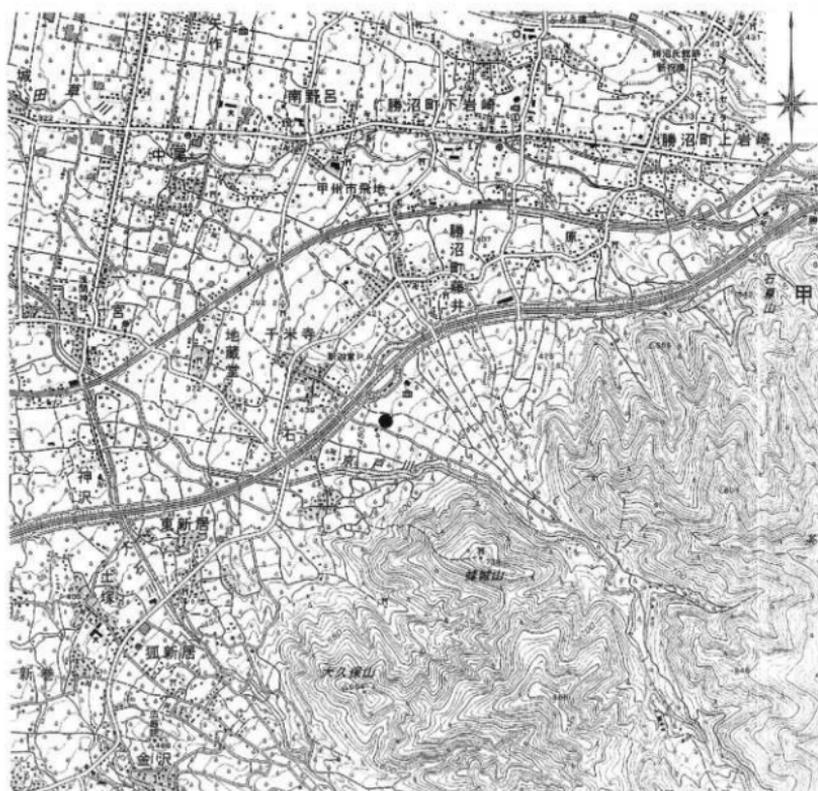


図1 山道派遺跡・物見塚遺跡位置図

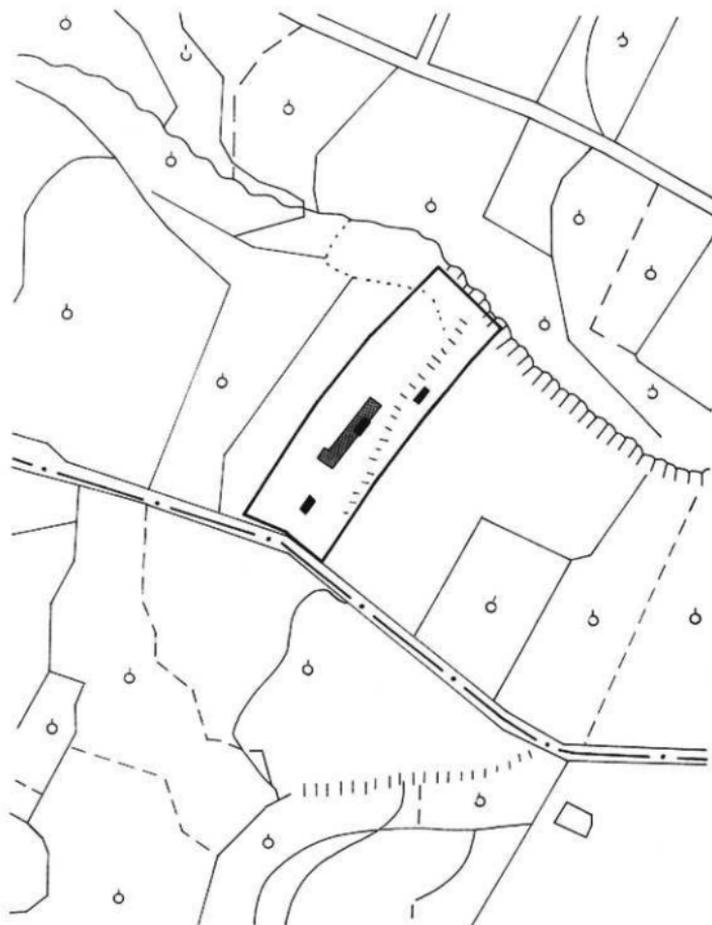


図2 山道派遺跡調査区設定図（黒色は試堀坑、灰色が拡張区）

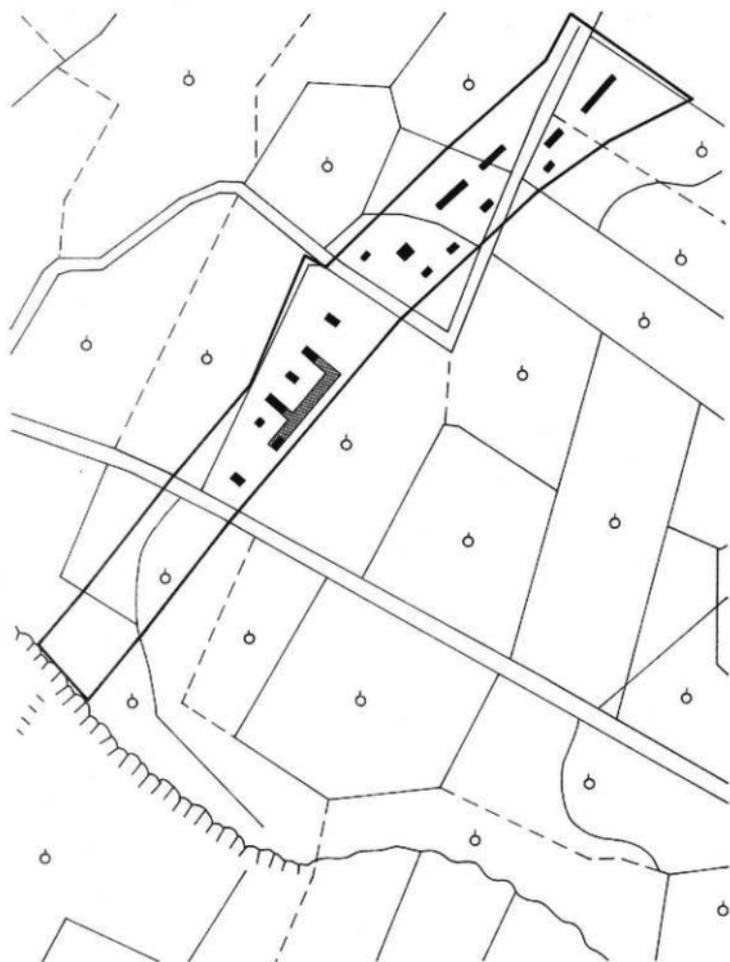


図3 物見塚遺跡調査区設定図（黒色は試堀坑、灰色が拡張区）

## 山道添遺跡



調査坑拡張区西側



調査坑拡張区東側

## 物見塚遺跡

調査坑拡張区全景



調査坑拡張区西端



調査坑拡張区東端



## 物見塚遺跡



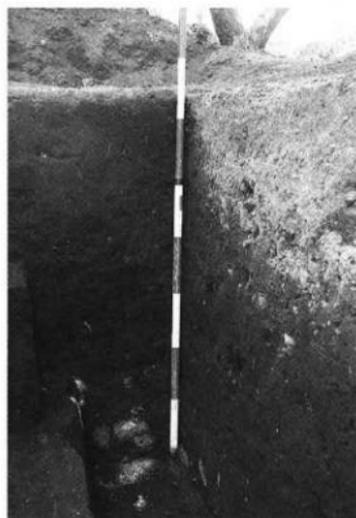
試掘坑（調査区東半）



試掘坑（調査区東半）



試掘坑（調査区東端）



試掘坑（調査区東端最深部）

山梨県笛吹市御坂町

# 上坊地遺跡発掘調査報告書



# 上坊地遺跡発掘調査報告書

(平成 17 年度 幹線道路 1 号改良事業)

## 〔例言〕

- ・本編は山梨県東農務事務所の実施した平成 17 年度大野寺地区幹線道路 1 号（みやさか路）改良工事に係る「上坊地遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- ・調査地点は笛吹市御坂町大野寺の福光園寺南南西約 500m の畑地である。
- ・現地での発掘調査は平成 17 年 11 月 11 から同月 18 日まで笛吹市教育委員会が実施した。発掘調査参加者は以下の通りである。

中込 稔、藤原さつき、石倉弘子、小林正輝、大久保一吉

- ・整理作業は平成 20 年 2 月 18 日から同 26 日まで実施した。参加者は以下の通りである。  
高野眞寿美、藤原さつき、西山和子、小田切健吾、渡辺利江
- ・本編に係る出土品・図面・記録類等は笛吹市教育委員会で保管している。

## 〔報告〕

### 1 調査の経緯と概要

山梨県東農務事務所の計画する農業基盤整備（幹線道路 1 号＝みやさか路）に伴う上坊地遺跡の事前の試掘調査では平安時代の住居址 1 棟が確認された。残存の程度が悪く、住居址床面までの深さも浅いものだったので、試掘坑の範囲を拡張して遺構全体の調査を実施した。

計画される農道は八代町竹居からほぼまっすぐ東へ伸び、御坂町大野寺の福光園寺の背後東南を回り込んで御坂町尾山へ向かうものであり、寺院跡として遺跡台帳に登録されている上坊地遺跡の一部を寸断するものであった。

上坊地遺跡は現在の福光園寺を中心に、周辺の果樹畑を含む。果樹畑は山裾斜面を連続的に段切りして平地を造り出してあり、見方によってはかつて幾多の僧房があったことを窺がわせる地形を呈している。以上を鑑みて、自然の斜面が緩やかな地点と、段切りして造出された平面部に試掘坑を設定して（図 2）、一部を小型パワーショベルで土層を剥ぎ取ったのち人力で精査を行った。

### 2 遺跡の位置と環境

上坊地遺跡は御坂山地の急斜面が斜度を緩める屈曲点付近にある。小河川による極めて規模の小さい扇状地地形が始まりかける北向き斜面地上に位置する。遺跡の南西側に川幅 2m ほどの城山川が北西に向かって流下している。

現在の福光園寺境内はこの城山川の右岸を占めているが、同川左岸の段切りされた畑地がかつて堂塔の敷地であったとすれば、寺由緒書にある往昔の「塔頭十六院」がそこに実在したと想定できる。

上坊地遺跡の東南 500m の小物成山（城山）の山頂（標高約 650m）には戦国期の「大野城」の跡、東約 600m にはやはり戦国期の大野対馬守の屋敷跡と伝わる場所がある。福光園寺背後の御坂山地は戦国期にあって、武装勢力の作戦行動の拠点として活発に利用されたようである。上坊地遺跡の約 200m 北には原遺跡がある。原遺跡は、城山川が合流する玄済川の右岸

台地上緩斜面地にある縄文時代また平安時代の遺物散布地であり、本格的調査はまだなされていない。

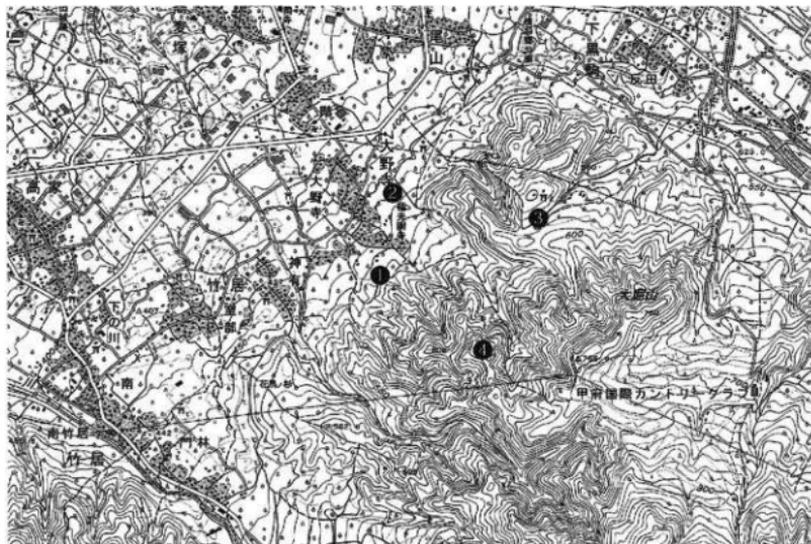


図1 上坊地遺跡の位置

①上坊地遺跡 ②原遺跡 ③大野屋敷跡 ④大野城跡

### 3 遺構と遺物

段切りされた果樹畑には過去堂宇があった可能性を考え複数の試掘坑を設定し（切土斜面と平坦部）、人力で掘削・精査したが、建物跡の痕跡は確認できなかった。切土斜面下部には排水溝が巡らせてあり、瓦が密に詰められていた。この瓦は現代の工業製品であり、この平坦部が寺院建物用に造出されたことを物語る証拠は得られなかった。

城山川左岸の台地上に造出された段畑に設けた試掘坑の1つから平安時代の土師器杯の小片が数点出土した。北側の1段下の畑の持ち主が耕作中に出土したという土師器杯（略完形）を見せてくれたので、試掘坑を一回り広げて精査したところ焼土ブロックが認められたため再度その周辺を広げ遺構の有無を調べた結果、隅竈をもつ竪穴住居址が確認できた。

#### ■住居址

平面が本来約3.5m四方あったと考えられる竪穴住居である。主軸は北-40°-西で、東隅に竈を有する。遺存は悪く、確認面から床面までは10～15cmである。もともと北面する斜面地に作られ畑用に削平を受けたこと、北半分ほどが段切りで失われたことが災いした。

竈は住居の東隅に袖部を掘り残して築かれていた。燃焼部は洗面器状に丁寧に掘られ火床は

平坦に作られていた。両袖先端の間、中央部に薄い焼土の堆積が見られたが、残存が悪く内容的には乏しい。

住居址南隅には楕円形のピットが認められた。最深部で床から35cmあり、底も二段式になっているが、最初からそう掘られたのか使用中にそうなったのかは不明である。ピット自体の用途も不明だが、物資等の収納・貯蔵に供されたのであろう。

#### ■遺物

住居址の竈前庭部の床に密着して潰れた状態の環が1点出土した(図5-2)。ほぼ完形である。このほか竈燃焼室の覆土中から環2点が出土している。うち1点は煤が濃厚に付着しており灯明用に使用されたと考えられる(図5-1)。

このほか試掘坑掘削中に出土した土師器坏片4点(図5-4～7)、甕口縁部片1点(図5-8)が出土している。

#### 4 まとめ

住居址の年代は坏の形式により11世紀前半と判断される。この時期の住居址が開けた土地の集落跡ではなく、単独で山中に見つかることは時々あるが、発見総数から観れば特殊な例であることに変わりはない。こうした住居の住人の存在は生業・素性含めて非常に興味深い問題を提起するものではあるが、相伴遺物もわずかである場合が多く、なかなか解明の糸口さえつかめない。いっぽう遺跡としては見過ごされやすく、知らぬ間に湮滅されているものも少なく

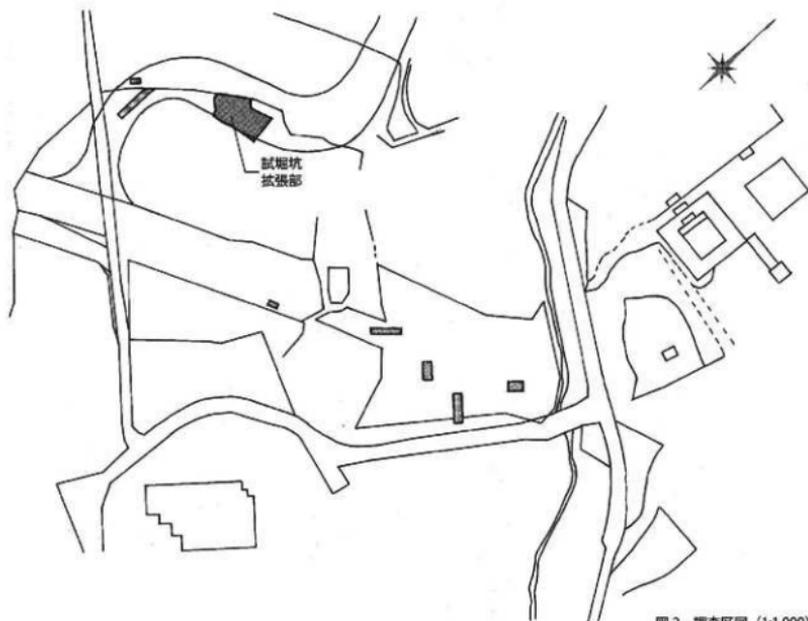


図2 調査区図 (1:1,000)

らずあると思われる。もちろん発見数が少なく、遺物も少ないからといって重要でないとは言えない非常に気になる存在ではある。

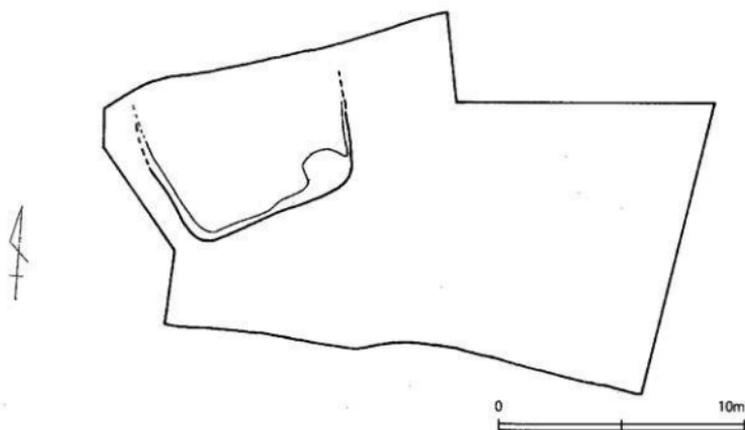


図3 調査区図

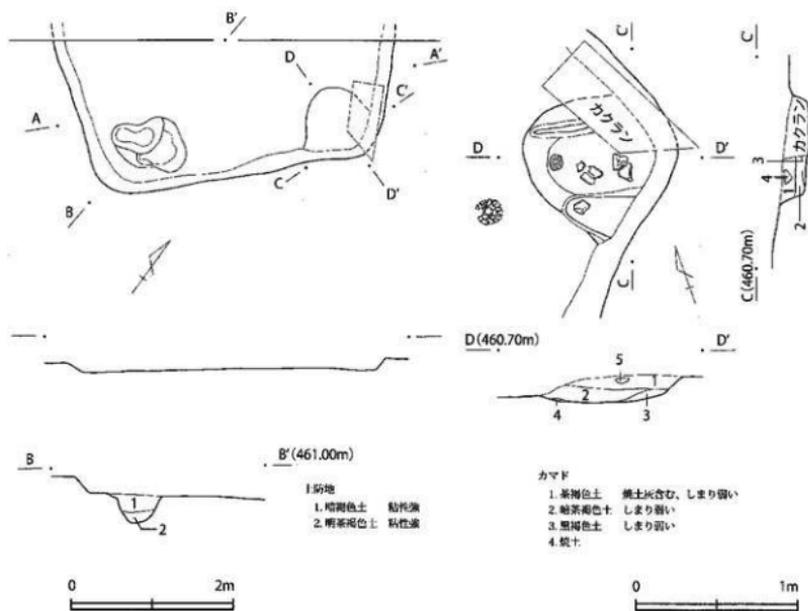


図4 住居址 (1/60)、カマド平面図 (1/30)

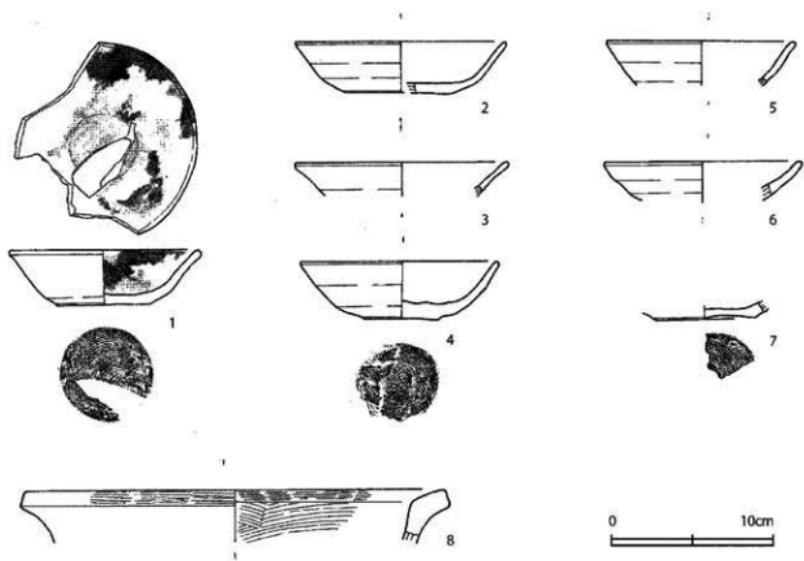


图5 住居址ほか出土土器 (1/3)

上坊地遺跡 調査前  
(左の甲府盆地に向かって降る  
傾斜地で、旧果樹畑)



上坊地遺跡 住居址  
(右端は段となり急激に  
下降している)



上坊地遺跡 住居床面出土土器  
(竈跡手前の床に押し潰されて  
出土した)



## 報告書抄録

ふりがな	なかはらいせき、ひがしこやまびー、しーいせき、かみまちだいせき、やまみちぞえ、ものみつかいせき、かみぼうちいせき							
書名	仲原遺跡、東小山 B,C 遺跡、上町田遺跡、山道派・物見塚遺跡、上坊地遺跡							
副書名	市農道、農業基盤整備、農道改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 17 集							
編著者名	小淵忠秋							
編集機関	笛吹市教育委員会							
所在地	〒 406-0031 山梨県笛吹市石和町市部 809-1 TEL055-262-3342							
発行年月日	2011 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード	測地系		調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
仲原遺跡	山梨県笛吹市境川町前開田1,286ほか	19201	境川9	35°35'46"	138°38'6"	H18,3,1~31	500㎡	市農道整備
東小山 B,C 遺跡	山梨県笛吹市八代町富家1,295ほか	19201	八代77,78	35°37'0"	138°39'30"	H19,2,8~3,30	130㎡	農農道改良
上町田遺跡	山梨県笛吹市春日居町鎮目1,177	19201	春日居31	35°40'20"	138°38'53"	H19,2,8~3,30	35㎡	農農道改良
山道派・物見塚遺跡	山梨県笛吹市一言町南野名950-11ほか	19201	一言87,86	35°38'31"	138°42'57"	H20,3,3~31	450㎡	農農道整備
上坊地遺跡	山梨県笛吹市御坂町大野寺1,348先	19201	御坂96	35°36'26"	138°40'27"	H17,11,11~18	300㎡	農農道整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲原遺跡	集落跡	縄文時代前・中期	竪穴住居址 11 軒	土器、石器	
東小山 B,C 遺跡	散布地	平安時代	溝、ピット	土器	
上町田遺跡	散布地	弥生~古墳時代	竪穴状遺構	土器	
山道派・物見塚遺跡	散布地	縄文時代	なし	なし	
上坊地遺跡	散布地	平安時代	竪穴住居址 1 軒	土器	

### 笛吹市文化財調査報告書 第 17 集

仲原遺跡 東小山 B,C 遺跡 上町田遺跡  
山道派・物見塚遺跡 上坊地遺跡

発行日 平成 23 年 3 月 30 日  
発行 笛吹市教育委員会  
印刷 相互印刷株式会社

The Reports of Archaeological Researches;

**NAKAHARA** (Sakaigawa),

**HIGASHI-KOYAMA B and C** (Yatsushiro),

**KAMIMACHIDA** (Kasugai),

**YAMAMICHIZOI-MONOMIZUKA** (Ichinomiya),

**KAMIBOCHI** (Misaka)

Archaeological Survey prior to the Construction of Farm Roads

March, 2011

Agricultural Department, Yamanashi Prefectural  
Development Office of Kyoto Area  
Fuefuki Board of Education